新和歌類句集十三

第二句
五代集
後乙至由

特別
イ4
3163
22(13)

貴
14
3163
22(3)

新和詩類句集

早稲田大学

新潟
忘れ
風
意二
新潟古
忘こ
新潟
郷
新仕指
意一
彩指
意二
彩指
郷上
彩指
意二
新千
歳中
新指
歳上

さ

かなしと人をおもひてやよいの空
さうにその子が望りまた窓ぬ
望りあれいまあ坂をおりてそ
こに出るあ小舟なそこふ
ちうさうにふそこに池の
湊りありてうて舟を中にい
こ川のうにむそこうそあ
そこのれちとみて川
なれとさくみそもすき
神谷月これの雨なを

さうりの人　源氏の舞
さうと男　二京氏物
さうりまれ　今昔二京物
さうりまを　おだまき
さうを湊り　おだまき
さうまわうり　摩訶の流
さて池り　おだまき
さうぬきを　新撰万葉
さうれ山風　改定二京

今はなどてそてぬるさ　後京極摂政前太政大臣
山ちをにけさそみやの鄙ころも　新後拾遺 秋下
ふるわるかつそてん秋をかさねつる　新拾遺 秋下
すゝしさのみそさわる松井のお　風 秋上
法乃友入へきつきのしるしとて　新千 天
世乃つねのえか孫ま寿かくそこも　日 天
中なるく心乃うつりゆくそ　新拾遺 天
とのつゝ法なりけりよのつゝ人　新拾遺 冬
うゐれなるを宿乃うへなりて雪に　風 親中
やとくよ利益乃末あいて一むら　新拾遺 冬
尺面乃月山をま雪かくし　風 親中
山もやなれのつゝ雪に沈よ　後京極摂政前太政大臣

さそれ山乃也　桂中納言俊綱
さそいつるん　桂中納言俊綱
さそこそてよ　皇太后宮大夫俊成
さそそくる　従二位頼輔卿
さそとそ雪　前大僧正慈円
さそれ一むら　皇太后宮大夫俊成
さそれおまん　従二位家隆
さそれおまん　従二位家隆
さそやこゝろ　参河内侍
さそさゝの寺　権大納言公衡
さそ庵乃ふ　式子内親王
さそかゝれ　従二位頼輔卿
さそ庵乃ふ　皇太后宮大夫俊成
さそ庵乃ふ　藤原秀能
さそ庵乃ふ　後京極摂政前太政大臣
さそ庵乃ふ　後京極摂政前太政大臣
さそ庵乃ふ　後京極摂政前太政大臣
さそ庵乃ふ　後京極摂政前太政大臣
さそ庵乃ふ　後京極摂政前太政大臣
さそ庵乃ふ　後京極摂政前太政大臣
さそ庵乃ふ　後京極摂政前太政大臣
さそ庵乃ふ　後京極摂政前太政大臣
さそ庵乃ふ　後京極摂政前太政大臣

和風床わりうく舟なるへかりけり　新後拾遺 秋下
かさ糸かうの衣とうきこゝろ　新拾遺 秋下
山さと家風のこゝろ　風 秋上
物思へとすわるかつ　風 秋上
く妹乃深さ　風 秋上
ふれりの海さ　風 親上
松風よ月乃　新千 秋下
姫風もおもてよさもして　新千 秋下
松をのなもいつせても　日 秋下
ろもせ一わてり　新千 秋下
きく人の袖を露なさ　新千 秋下
月乃入をうれ山乃　新千 秋上

かくてよとをつくしこめてわれ
ゐたりやうの月ぬまよ
ふかくさけりやうん如意寺ふもとの
庵をすてて山ごもりする秋よなり
日 霧
小倉山ふもとの紅葉ちりて木枯よはみ
心ぼそくあれのこりつくしいろ
なき物は秋のゝ月ぬまよ
ふかくさけりやうん如意寺ふもとの
庵をすてて山ごもりする秋よなり
日 親上
新拾 秋上
小倉山ふもとの紅葉ちりて木枯よはみ
心ぼそくあれのこりつくしいろ
なき物は秋のゝ月ぬまよ
新後拾 秋下
伏見山ありとも小田乃いほりに
日 秋下
但馬なる小野ゝ里にすまゝほしや
日 秋下
秋乃田のかりほにとまるわれ
日 親上
なれもまてしばしぬまよ
日 親上
なれもまてしばしぬまよ
新後拾 雑下
をく山里にすまゝほしや月ぬまよ
日 親上
をく山里にすまゝほしや月ぬまよ
新後拾 雑下
さらぬ別のつゐにいたるまて
日 親上
さらぬ別のつゐにいたるまて

さてのみ
雲林院
さて庵なる
紫禁中
さて庵なる
常光院
さてのみ
内匠頭
さてのみ
御製
さてかれ
常磐井宮
さて庵の
源持者
さて庵の
宗伴法師
さりとてや
紫式部
さりともや
後京極
さりともや
後鳥羽
さりともや
人丸
さよ衣
白河院
さよ衣
東三条
さよ衣
信生法師
さよ衣
平忠時
さよ衣
清原深
さよ衣
雅家

乃とかの雲ゐにさそひてよ
さりともや
古郷山寺井にみりの秋ぬまよ
さりともや
さらぬ別乃しぬや夜乃
さりともや
但馬乃ことゝもの
さよ衣
なれみすれとのまもすきて
さよ衣
日乃もとの花ぬまよ
さよ衣
袂なれやかうとの旅乃
さよ衣
ぬるてぬまよ
さよ衣
あすの夕ぬまよ
さよ衣
かうやうのをうれのてぬまよ
さよ衣
袂とゝ思ふねの
さよ衣

新千慶
新拾
風
彩雑
風
風
新拾上
日
日
日
彩千
彩拾
彩拾
新千慶
新拾
風
彩雑
風
風
新拾上
日
日
日
彩千
彩拾
彩拾

七十ぢ
石清水神の心ぞ
うつしてや
神ぞ
かうやの
ぬるのめぐみ
流のみ
うき世を
愛宕
いかでこの
袖の
ぬれ
ささめ
ささ
ささめ
ささめ
ささめ
ささめ
ささ
ささ
ささ
ささ

彩拾
新拾
彩雑
新後古
風
彩後古
新後古
風
新千
風
彩拾
風
風

いくよ
あまの
交野
心
岩ぢ
我
ちしほ
歌
今
今
今
今
今
今
今
今
今
今

松の木ずえもそよ吹く風の音よ　さゝの小田もしも
おのおのさゝ森のかげの月　雁の声
山ぢやたごのそこはかとなく吹風と　雁
そよ吹て雲もる秋の夜のふけ行ま　雁
山家のあるじをそゝくさゝの小田も　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
氏乃あ時あるあをみてや田もれ　雁
宇治の大門風あれて淀田よりさゝ　雁
六月あれなどほさゝの小山田に　雁
時をえてちるもしら人てるかの　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
うゑてや誰にこゝろをつくれかの心を　雁

さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁
さゝの小田もしも露ふかき夜半の月　雁

めにもうれ人乃あれなおもろけ世なりそ　院御製
いかゝつゝ乃つゝさゝ作ゝまよ二乃の　女房
なゝゝ世にあるやとかく分へくよ　俊成卿
初時ゑ又こゝろをめゝうきて小　沙弥法敬
あゝゝわ心よまやこまゝん私乃　源仲正
乃の世になふゝんをの乃あり新計　今如法
秋月みあいんわゝをはゝて山　皇太后宮
ゝや変わ月やあの琴にかゝつゝそ　東古政
名代のこといてさのゝ又林代変乃　蓮智法師
あ乃新のゝかゝれつよそまゝ変れ　権中納言
ゝゝ乃ゝ風よ衣かと冬　俊成卿
みゝまくいの栄をつゝあり山あゝ風　侍従長定

拾
冬

新拾
秋下

彩拾
恋三

風
恋三

彩拾
恋一

風
雑中

風
恋五

風
雑中

風
雑中

新千
雑下

新拾
恋

彩千
雑下

みるとてかさゝぬ雪ぞ降りつもる
乙女のうなゐ今ぞ盛りと
せめてそでこそつゝさゝめ乾乃入ぬれを
津久礼と思ふ事ぞなき海の
たゞそれ波のまにまにとうめもとう人丁
みぎわさゝ白波へなかゝみちひくうら苔も
あまさかる恋よつゝ絶ぬやまの
花さそふこすゑとみ吉野山
山風よそも底乃ひまよとぬれいつゝやや

さしく時
さしこなよ
さゝとう迄
さゝとうん
さゝとう
さゝとう
さゝとう
さゝとう
さゝとう
さゝとう
さゝとう

人丸
人丸
深谷信
為家為氏教
為家為爾
人丸
為家
為家
為家
為家
為家

新千
雑上

風
賀

風
雑上

彩拾
雑上

風
旅

新千
羇

新千
羇

新拾
羇

新拾
羇

新千
羇

新拾
旅

彩千
羇

新続古
物名

那波津乃むら〳〵風さわぐ
なみ人乃うらのこゝろを
みるまでにこの梅さきてあれ
ぬさよ風うら吹まてに
家乃内うちをうぐひす
雪消乃こゝろ
思ふそらにて
月末の月やさしく衣日も
さゝ山中山
さゝ山中山
さゝ山中山
さゝ山中山
さゝ山中山
さゝ山中山
さゝ山中山
さゝ山中山
さゝ山中山

さくや梅うえ
さく山もとの
さく梅うえ
さゝふそみ
さゝ山中山
さゝ山中山
さゝ山中山
さゝ山中山
さゝ山中山
さゝとうぬ

ほうき為家
御製
従二位家隆
為家為氏為教
為家為氏為雅
為家為氏為雅
為家為氏為雅
為家為氏為雅
為家為氏為雅
為家為氏為雅
為家為氏為雅

風 秋下　かりねしはてぬ夢たにもなほしはしやまの月のかけ　さゆきみてん　式乙内親王

風 哀之　はかなしやうつゝの夢のことはかりあかれのなきか　さむるねさめか　今上御製

新千 夏上　夏ことにおもへはかなしきなにはの袖の　さけは散らん　中院入道右大臣

風 秋上　思ふことなくてもみえぬ世なれは時ならぬに　さけるをちの　春宮

新千 夏　見つつよりおしなへて玉川のさとの人を　さける卯花　今出川前右大臣

同 夏　久かたの月の桂もみちかゝつてなほとに　さける卯花　読人不知

新拾 夏　布さらすかきねのうちの月かけより　さける卯花　常磐井入道前太政大臣

新続古 夏　津の国の雪とそみる山さとのかきねに　さける卯花　後普光園院入道前関白太政大臣

新後拾 春下　ちる花をまてとやなく吉野川岸のいはねに　さける山吹　後宇多院御製

同 春下　かはつなく井手の川辺のなにはかた　さける藤なみ　前大納言為家

新千句 秋　さらぬたにみなみの山のみつのえに　さそはれて　前大僧正慈鎮

新拾 秋上　露むすふ夕の月もさやかなる袖に　さえわたりつつ　[illegible]

風 秋上　はらそてよおもひつゝや妹か月かけて　さえ渡るらん　津守国冬

新拾 秋上　いつまてか山の風や　さえ渡るらん　菅原在秀

風 冬三　なれてはおもふなとやとおもふ松の根の　さえはてにけり　太上天皇

新千 冬　難波江の風のうへにてなみや　さえやまさらん　源兼氏朝臣

新千 冬下　のへの野のかはかせにむすふ川舟の　さえやまさらん　[illegible]

新後拾 冬一　あられふるかねもやみぬ夜の　さえやまさらん　二条院讃岐　覚助

風 冬二　こゝろ今宵もかくやへてゆかんとて　さえまさりけり　伏見院御歌

新千 秋上　ちるかたや風にたくふのゝ　さえて世はふけて　式乙内親王

風 秋上　あきはやまのはしもなかてふけゆく　さかぬ花の衣　深心院関白前右大臣

新千 冬三　たのむへきなにはもなき夕暮　さくらの衣　内大臣

同 冬　きのふともやくもかな衣に　さかぬ花の衣　二条院讃岐

新　風なるはきの花のかくれしつもり　さかぬ花の衣　[illegible]

新拾 雑中
新後拾 云と
新続古 秋上
新拾 尺
新後拾 忌三
風 玄中
新拾 夏
風 玄中
風 親下
風 玄上
新拾 玄上
日 玄上

雑うすむやそうつまうらとうくいてうくそう
かなでうきをいてとぬいてうたなのこ
かくまくやまかてうくう如風よいかん
うーのれんくわーとをうすれたるまて
あふまてとかうとて思ーふてうくけうくん
まるぬなうくひてぬやとれ桜ひうれそ
花や雪底やまうう時ちぬ為生れうくそ
足曳の山ふ底ひあうさみうとまうそ
うらうひうきまあー山きれをれ相れ
右里ひ彩うくうく花ふ物うれ色ま
さくふひあてうくぬやとれ桜ひうれそ
さりうき風 幸納言忠岑
さりうき風 幸納言忠岑
さめへきれ 如宝上人
さめぬうさ 今京極殿
さめんとせそ 四条宮
さうきまうす 院御製
さうきまうす 院御製
さみうれのて 院御製
さみうれのて 安法法師
さみうれのて 院御製
さみうれのて 左中将 基平朝
さみうれのて 実基公歌
さみうれのて 左大臣

風 天敬
新千 天
風 玄五
風 親下
風 親下
風 玄
新千 交
新拾 志一
新千 交
月 親上
新拾 交
新後古 冬

新後拾 夏 晴やらぬ雲の八重山さえそて時まてるかれ　さみだれの比　前大納言為定

同 夏 行ほなみそれぬ渡のちゝ衣はくとわきぬれぬ　さみだれの比　前大僧正覚守

同 新上 なをかくさすふみそてあま雲のからしぬ中　さみだれの比　入道前太政大臣

風 夏 かはりてぬまか石君ちに波こしてみ草よりそ　さみだれの比　後山本前左大臣

風 夏 あやめ草ひく人もなし山城のとはにかくこす　さみだれの比　前大納言経継

風 夏 あすか河日も浅瀬とやかはるらん七瀬のよどみ　さみだれの比　権中納言公雄

風 新上 晴やらぬ心のうちはやすらひやまたなきらそ　さみだれの比　左京大夫顕教

風 新上 かきくらしふりぬあま衣たちぬれて鴨の　さみだれの比　高階重成

新千 夏 庭はなたみさとにやま栄わ下かれ　さみだれの比　中務卿宗尊親王

同 夏 水こゆる池のさ草も隠れしてさそひ出る　さみだれの比　普光園院前関白左大臣

同 夏 津の井手の井堰の人もまちこてむ　さみだれの比　太政大臣

新拾 夏 あさりみつさえたつさえ芦川のまかれ　さみだれの比　前中納言公脩

新千 夏 久かたの雲ゐの空もたえはてゝ雲こそかゝれ山の　さみだれの比　参議雅経

新千 夏 おのれ若菜の末葉もみえずぬまのみくさの　さみだれの比　参議為氏

同 夏 瀬々の瀬よかりてこそしつ川綱手そ　さみだれの比　前大僧正公朝

新拾 夏 渡りえぬかりそめにもわたりてぬれせの　さみだれの比　一条内大臣

同 夏 名取川瀬々の埋木あらはれてゆく　さみだれの比　前大納言為定

同 夏 雲ふかれは波たちみなむつのみなかの　さみだれの比　権大納言義詮

新拾遺 夏 ぬるでおろすぬ沼のはみさたちぬるらん　さみだれの比　頓阿法師

同 夏 荒玉川わたる人も瀬は世にかはりぬらし　さみだれの比　関白前左大臣

同 夏 見もなれし人わかれ水地とあふ　さみだれの比　後西園寺前太政大臣

同 夏 さらぬだに風もやあま衣たつ沢の　さみだれの比　左近大将

同 夏 みなと川さこえてしのまてゆる　さみだれの比　前中納言為相

同 夏 萱ぬとて出る月も待たぬ空に暮れ　さみだれの比　権中納言為重

新古拾遺　夜もすがら水も岩ねて分けて
日　　伊勢乃あまの松焼衣これやそ
新拾遺　つゝもと入海をて成ふかたそ
日　　乃なくて山ハ松の緑そうすみの
日　　宮地河水乃心をまさしくも
新拾遺　うつて日数るつもあすの川かや
日　　そもさうとて成つる日未ふりをえみ
日　　すゝ川あるぬのれをからをして
日　　親波ふをみて雪もれてまよ山今ハ
新後拾　それをおくかるつ雪ハ雪つきせぬ
日　　さくふなくとてつくかやとの
新千　神乃まみそれ山の月親れ

さみれの比　江こえ比
さみれ乃比　はる雪夜
さみれ乃比　はる雪夜
さみれの比　松の江帰
さみれの比　為定朝臣
さみれの比　紀親元朝臣
さみれの比　源宗心
さみれの比　枝遠村
さみれ乃比　平貞秀
さみれの比　為平納言
さみれの比　慈厳僧都
さみれの比　法性寺入道
さみれ乃比　実自安政朝臣

新古拾遺　ふるさと松乃風を吉也そ
尺　　我やとれなる葛そうへさえ
風　　山里ふるれ新そ池そにしきの
新後拾　ふくくとうつろふ東の雲
風　　煙の雨にまぎれくか川の村の
秋下　なれをて何号ん山里ハ
新拾遺　なてのつ里ても山里ハ
秋上　いつれを秋乃ふそく風ふ
彩千　高一方をやり出てハあり川
新後拾　友ときく松乃風を吉也そ
新続古　我やとれなる葛そうへさえ
風　　山里ふるれ新そ池そにしきの
新千　うつろふ東の雲

寒松帰　寒松帰
御方　御方
僧子内親王　僧子内親王
雪間ふか　雪間ふか
四条女　四条女
反山年か　反山年か
左大臣　左大臣
読人志　読人志
武蔵ノ国　武蔵ノ国
御返　御返
読人志　読人志
松の風　松の風
津守国基　津守国基
おなじ心　おなじ心
乃返し　乃返し
読人志　読人志

風 秋下 人乃世ハ久しといふも一とせに又なき花乃かけをかなしむ きえわたれ 従二位為子

風 秋下 やすらひぬ世乃うき風乃身をそかれてなき世乃世ハ きそわかハ 太上天皇

新後拾 冬二 あまの戸をあけてつゝもる風をしのふかな さそわかハ 中□家隆

風 冬 桂乃戸をさしてまたくもる露乃月の光のさえて さえ〻みつく 権大納言公蔭

新拾 秋上 信山あらしはふきすさふ庭乃われて早一さえて さえわたれ 前大納言為定

同 冬 夕立乃なかてきえぬる雨をならしても さす日影す 前大納言為世

二百六拾二首

き

風 恋三 波まかせ乃人まハあたるまの紙さかさまに きみとかなへ 権大納言実明女

風 恋三 見わすれやとまの見人をつなくそなくまき きくとみなる 院兵衛督

新後拾 恋上 春さしをまさて吹上風乃まに風よ庭とふ きらなるとも山 権中納言経縁

風 秋上 あさなさなやふねようつかせてみを宮のわか きなて乃鶴 源義将朝臣

新千 秋上 あまのかはわたりをさけて七夕乃つまゆへに きそもちあふ 大納言経信

新拾 秋上 あさかりか庭をけていしよそ人の庭かさをたのむ きさせ人てハ 前大納言為世

新後拾 哥旬 たねよりてハ津のきなさこ乃麻乃あをき きらめくら 権大納言実平

風 秋下 日数ゆく稲葉の露人ハ人れやてなけゆすき きわ山めく 左中将忠季

新拾 秋上 虫乃声乃よわるもさひし明月の影すゝき きその鶴 徽安門院小宰相

風 秋下 あらすさ桂の下庭をもとめ夜の花の枝 きえあさ乃 大納言公重

風 秋中 庭乃虫ハなきとまりぬる夜風の乃人日まする きえしくとな 前大納言為兼

風雅 雑上
日数ふるころ夜寒の風吹そめて草にはしけき
きこゆなるかれ　和泉守金成

新拾遺 秋上
あれはてし枕の下にすむ虫の声も
きこゆるかな　後鳥羽院御製

新千 哀三
暮とれかてうつ人なきやどの
きぬたのおと　前関白太政大臣

新拾 哀之
なくさめし月の夜すからしはし
きぬたのおと　従一位行忠

同 哀之
うちつゝき風の音ばかりのこる
きぬたのおと　正三位知家

新後拾 哀之
なれにしそれのみとなる思ひ
きぬたのおと　津守国夏

新拾 哀二
とふ人の心の秋のすゑ
きこゆなりけん　大蔵卿有家

新後拾 雑上
なさけなき身のうき風も
きぬをまたれ　式部卿秀長

風 哀二
なきさの風をとふ夜さむの
きぬをまち　太上天皇

風 雑下
ものおもふ人の心
きさらきやは　法性寺入道前関白太政大臣

新後拾 夜
いまそかくしたふ秋
きせやはせぬ　天暦御製

新拾 哀五
はかなしと思ふもかなし
きそなかぬれ　源師光

風 神祇
とし月をへてしたふ心の
きこえあかれな　藤原氏之

新拾 春下
春風の花をちらす山の松
きる風はなかりき　太政大臣

新後拾 春下
なつかしやわかふる里に
きる風はなかりき　後福光園摂政前太政大臣

同 雑上
春日山みねとよりの
きく風はなかりき　前大僧正

新拾 旅
雲も霧も立けふの
きえぬ山かけ　源親貞

新後拾 賀
君かための春
き井かける　前中納言定家

新拾 冬
吉野山雪かりそめの
きのふはまよ　津守国冬

新拾 哀傷
身をしるの涙と思ふに
きのふのけふか　前中納言雅言

新千 雑上
いかにせん
きくもまち　藤原為忠

新拾 雑
酒ぬへき清の末はに
宿へりけり　贈従三位

新千 雑
都山
きくかいふかき　中納言家持

風 雑上
あまの川
きくかいはは　藤原宗継

新千 [illegible]
ちよをへてうつろふ色もあさからぬ菊の露をや君はむすはん　きくよりぞなる　普光院前左大臣

風 秋下
初霜のおきまどはせる白菊の花は色こそかはれ　きくぞ残れる　前中納言匡房

新続古 哀
雲の上にうつしうへてもみし月のかげぞかはらぬ　きくを見て　建礼門院大夫

新千 雑中
家の風たえずふきつたへてあはれとぞおもふ　きくぞかをれる　入道親王覚誉

新千 春
をりしもあれ露のおきまどふ代々のかざしに　きくとてもかし　権大納言長家

新続古 雑下
ことしより君がたもとに匂ふとてきくのしもさへ　きく咲の房　前中納言為秀

新千 秋下
長月や雲井の秋の花ならぬにほひはしるき　きく咲く庭　後宇多院御製

日 秋下
めづらしき秋を重ねて露の色いく千代までか　きく咲きつつ　前中納言実任

新拾 秋下
長月の九日ごとにあらたまる千代のためしに　きく咲きつつ　関白前左大臣

風 賀
くもの上にきこえて長月やながきよの　きく咲く水　正二位隆博

新拾 冬
水上に年をかさねて白河の流れも千世の　きくの下水　法眼源承

新続古 雑上
紫の雲井までやにほふらんきくの花咲く宿の　きく咲くは　読人不知

新千 秋下
はなのいろをみるにつけてもなかりせば　きく咲きてよ　前大納言為兼

新続古 秋下
露ながら折りてかざさむ今朝もなほ花にしられぬ人もあらじ　きくのした　康永院御製

風 恋五
とへかしな花の上の露も色にいでて秋の宿を　きくまても　新宰相

風 恋二
わがやどのまがきにうつる花の色も人をまつらん　きくまもなし　従三位親子

新続古 春下
まがきにはうつろふ山の花の色もあらはれて　きく人ぞなき　太上天皇御製

新拾 神祇
ちはやぶる神の宮居にうつしうゑて千代の秋にも　きくもなし　前大納言経家

風 冬
草も木もかれゆく庭の霜の上に花を残せる　きくも咲く　伏見院新宰相

新千 雑中
わがやどのみぎはの水にうつる花の色をかへて　きくのおきて　津守国夏

新拾 雑中
ちりもせぬ花のためしにいつまでと　きくのおもひ　藤原為明

新後拾 秋上
秋風の吹くにつけても色はまさらん　きくのまがき　前関白太政大臣

新千 物名
つまこふる秋の夜ごとに　きくの花ざかり　隆信朝臣

日 哀
もろともに秋の花にぞおもひやる　きくの露の　前関白左大臣

風 雑上
いふをいつの下のうれしさ
彩捨 雑中
波ろもとのふみのあまを丹中と
彩千 恋々
たてなのれもよもわそうの
風 恋五
なをもなれる人のかくいうあ
彩捨 雑上
あれのりあるつをとう雪をも
新千 哀傷
ますはそ花うあて哀山風よ
新拾 雑中
山姫さまれの庵をうくしの風
日 恋四
なるあやうそのさ雪乃雪とう
彩続古 雑下
そうのてあれそ月落雪
彩千 雑上
作花のこまのくさ
風 雑
山のれの梁乃鈴もなを
風 秋上
おうそ山うさもれ一葉れ冬のう

消ぬへき
後朱雀院
陽成院
梅壽後
久通
平幸政
崇徳院
歌二
加賀左馬
新陽明門
院
前左京大夫
藤原顕輔
皇后宮
大夫俊成
入道前関
白太政大
臣

彩捨 哀傷
いつ乃山のくきしこの比の紙なや
新続古 秋上
ハ久風をはらをれそ
風 雑下
うそもあやくしれを
新拾 秋下
山里れのくもそ秋乃林
風 雑中
さうとこ
風 秋下
山うやや秋れの雲れうう
新拾遺 夏
雨そうくうを山よなく
風 冬
雪とうあさけのそ
彩千 冬
しうくよこれ雪いうさし
風 秋下
雪うそ雨乃来よ山みそ
彩続古 秋下
深れそうあぬ杉秋乃
風 雑上
津くとなう

後冷泉
院御歌
皇后宮
肥後
皇后宮
肥後
花園院
院御歌
院御
製
後冷泉
院

新拾遺 恋
時はやとしりぬる比の露ふかきこの里人を さやかなりけん 従一位宣子

新拾遺 秋上
萩はらやなかなか露の子規枕にぞ さえさえなれん 三条実連

新後拾遺 恋四
いかにせん又たち帰る浅茅生の露をかきわけて さしも忘れず 従一位入道前内大臣

風雅 秋下
入れ行く月の秋の夜の風寒く いかにせん さても物憂き 権大納言為定

風雅 恋中
かねて人のあさぢの露も草わけて あさて さくら吹なり 後恵法師

風雅 秋上
春草のまだうら若き野辺の人をさへかれは さすがなり 権律師慈成

新拾遺 秋上
こえ出る声もあはれなる草にかれはてて さすがなり 左近中将基氏

新拾遺 春上
つまぎとて人やつむらむ山すみのかれ行 さすがなり 光厳院御製

風雅 秋
遠く霧ふる森の下草かれはてて秋や さすがなるらん 性威法師

新拾遺 恋一
思ひ孫の萩の下葉にこぼれてさむき枕に さゆの面影 皇太后宮大夫俊成

新後拾遺 秋下
みてし程もそこはかと時雨の旅のうらに さゆの面影 従三位行能

風雅 冬下
吉野川いはせの浪にうき葉あらしの夜はに さゆの白雪 従三位為政

新拾遺 冬下
吉野山峯のの桜さきぬれば吹ても さゆの白雪 源貞氏

風雅 秋上
天の原ふりさけみれば月の影清く さえにけり 読人不知

新拾遺 恋一
あさ茅生におく露よりもあはれなるを さしも忘れじや 読人不知

新後拾遺 別
たのむべき我が身ならねば浅茅原こえ行日を さしも忘れじ 左京大夫行家

新拾遺 賀
かくてのみさやかに老の身のやすらかにて さしいづる 後嵯峨院御製

風雅 恋三
一夜ふかき風のおとにも今かはすまかりなき さしもあらじ 院冷泉

新千載 秋下
雲かかる峯の月影に袖のうへに さしいづる 後伏見院御製

風雅 秋上
さやかなる月のみちをわけて さしも分けて 前関白左大臣

新千載 秋中
夜のむしの声よはる秋の夜は さしいりて 一条内大臣

新拾遺 秋中
日にそへてまつね夜ふかみ山の月を さしいでられ 祝部成仲

新拾遺 春上
古の孫の日のみかりわれはそのかみ松や さしそふらん 後京極摂政前太政大臣

風雅 秋上
御の孫の露つむ雲のうへに出て消えぬなかし さしそむる 大納言経信

新続古 恋五
須磨の浦こきゆく舟のほのかにも我もおもはれて　さとのあまの思　山部赤人

新千 恋二
ひとしれぬ身のなからへやまた逢てしぬることに　さしもやまさん　読人不知

新拾 恋
こゝろには[illegible]人にまかせて[illegible]松のえたかはるや[illegible]　さくらの[illegible]　後光厳院御製

同 賀
わかれては[illegible]よそまてしのはんかきりなき[illegible]　さくらのよしは　高階宗成

同 賀
身の代の[illegible]の月のそらのみつけは　さくらのなかの　前大納言経定

同 神祇
うこきなき[illegible]たてしもの[illegible]　さくらのなかの　後西園寺入道前太政大臣

新拾 神
あはれとや神の鏡にてらしみるらむ[illegible]　さくらの[illegible]　花園院北家

同 神
いくよかは神をまもりとみるらんやまことをもためしに　さくらの[illegible]　源和氏

新続古 賀
かはらぬみとりの松はみてなほ世をまもらん　さくらの川の[illegible]　権大納言為平

同 釈下
たかさこの山のなき海のふかき[illegible]我の[illegible]　さくらのめくみは　左兵衛督直義

新続古 釈中
ところの[illegible]文よりも[illegible]人をもてなす　さくらのめくみは　後福光園摂政前太政大臣

同 賀
あめのしたの誰かはたのまん[illegible]しもかね　さくらのめくみに　大江宗秀

新拾 賀
鶯の声をまちてさく花はちりてもまたぬ　さくらのめくみに　前大納言為定

新千 慶賀
いく千代とかはらぬ色の[illegible]なかの[illegible]　さくらのあくるを　昭訓門院新大納言

新続古 賀
末遠く[illegible]まつ[illegible]　さくらのあくるを　権大納言為遠

新拾 賀
百とせにいくたび人をむかへん千代のかさね　さくらの花の代まつ　皇太后宮大夫俊成

同 賀
[illegible]十[illegible]　きみの花の代々の分　前右大臣

新拾 恋
[illegible]　きみの花の代々の分　前大納言為定

新続古 賀
すみ川[illegible]人の[illegible]　きみの花の代々の分　醍醐入道前太政大臣

同 賀
神風やいすゝ川のそこきよみ[illegible]　きみの花の代々の[illegible]　後光明照院関白

同 神祇
八百よろつ神の[illegible]　きみの花の代々　前中納言直房

新千 恋一
人しれすおもふ心の[illegible]　さくらの下の　高内侍

同 恋四
我やとの[illegible]　きみのすみかを　読人不知

新続古 賀
[illegible]松[illegible]　きみそかえん　釈[illegible]

新千
巻

新拾
賀

新千
巻

新後拾
賀

新千
巻

新拾
尺

新拾
尺

新後拾
祝

新千
哀一

月
秋

新千
巻下

新後拾
雑秋

新後拾
巻下

月
秋上

新千
巻

新拾
賀

新千
巻

新後拾
賀

新千
巻

新拾
尺

新拾
尺

新後拾
祝

新千
哀一

月
秋

新千
巻下

新後拾
雑秋

新後拾
巻下

月
秋上

おこりわたるをよめるさきもり

きみそうめ　権僧正永縁

ふりてつもれる年の数かな

きみそみん　皇后宮大夫俊成女

そこぬ松ちよをかねてや

きみそろへん　中納言国信

松竹よ変らでちとせ君がため

きみそろへん　前大僧正隆弁

ちよをまつ末を重ねて

きみそろへん　二条院讃岐

うれしおもふ心みるべき

きみそ知れる　皇太后宮大夫俊成

ちよやふる神のしるしやさかえん

きみそ栄やえん　権大納言長家

雪井てやしむと思へ我袖よ

きみそ知らん　従二位家隆

花も紅葉もうつろふ色

きみのまにまに　参議雅経

神ちやまとの宮ゐ立

きみのそ立　前参議教長

ちよやふる神のしるしやさかえん

きみそ栄やえん　権大納言

雪井てやしむと思へ我袖よ

きみそ知らん　従二位家隆

花も紅葉もうつろふ色

きみのまにまに　参議雅経

神ちやまとの宮ゐ立

きみのそ立　前参議教長

白雲若七首

白雲若

白雲若七首

白雲若

台風川をれ波よせみて岩守

きみそ山めき　従四位上行摂津守藤原為政

今の川ことかへてをくれかな

きみそ山めき　法眼和英

これもまた神やうごかん台のわかれかな

きみの教のこ　前大僧正禅守

烈風ようさやたくてもすまのうら

きみそ称へ　前大僧正慈鎮

彩千忘二　うきよ人乃こゝろをそらとさへて
風　忘一　それも気人乃心ぞ雲もなき
新分忘三　なりてはおもひけるあは八風りう水や
日　忘三　河口乃実乃あるかさへこゝろなきものとは
風　忘三　かうき思ひけるよなあはれもの
彩拾忘四　なへてさくらもつかりけるお坂乃関
新續古忘一　花さへうきねにうつろふ人まても
新拾冬　名をおとゝふかれの山里の人めや
新千雑中　かりのみせとへそをも思ふやれをも
日　玄上　酒のみとゝいふ乃ふ山里を
新千尺　もるつそかうく月そおもしろき
中文庫　仁宗三女
拾雑　かれの内府
二条院　撰公
読人不知
宣光門院　彩色美事
権中納言　経宗女
二条院
後堀河院　為子
二条院
清慎門院
権中納言　経宗女
後堀河院

彩千慶　うき人乃こゝろをそらとさへて山乃松の風もせはしや
風　女　秋風とかうもつくかな雲乃色を
新續古女　かりかねの月にうつろふ心よりく
日　女　秋ちかき難波乃芦乃声まても
彩千冬　大きみのみくしを波かとそ
彩千忘一　いふもなか神乃こゝろくしの
新拾冬之一　夏ふかみ人をも松をかけてこそ
新續古忘二　吉野川をふきくるかぜ神よ
彩拾忘一　あまてらすかみのみよゝや世乃つゝ
風　冬　我やとも松なきものう大井河
彩拾入　雪ちるもつきせぬ月よあくれ
風　冬　ふる山乃時雨てとろうきせぬ

山人のおもひ出て枝をきつゝ
折りてもそでにおれこそうつりけれ
名をくちなしの花ぞ立山
滝そゝぐ風をもふかぬ
思ひいるかなしの
いでやし況やあれ
おもしろやわれ一人の
心をみちびきて君の
出ぬるかげもみえ
ぬ程
一すぢにおもひ入ぬる
心よなのむ

風 親中
彩捨 冬
彩捨 冬
風 五
彩千 三
風 親下
新後古 親中
風 雑上
彩千 恭
新捨 賀
日 秋上
新 親中

ゆふべかな 後二条院
ゆふべかな 法皇御製
ゆふべかな 昭本の後一条
ゆふべかな 源親行
ゆふべかな 麻続王
ゆふべかな 春歌中納言
ゆふべかな 春歌中納言
ゆふべかな 第六度公任
ゆふべかな 京極前太
ゆふべかな 京極前太

彩捨 親下
彩千 三
新 拾遺
彩捨 恋三
彩千 三
新捨 恋三
新後古 秋上
新捨 恋三
彩後古 交
日 親中
彩捨 秋上
彩後古 交

おもひ出て
まつもうき人をそ
月もそでにみよあまりこと
一すぢにおもひ入ぬる
心よなのむ
さまでこそ
心あてにおれこそうつりけれ
あはの実ぬれて
さまでこそ

宮道弥益
紫式部
大蔵卿匡房
左兵衛督
従二位為子
前大納言
前大納言実
前大納言
前大納言
丹波忠守朝臣
後伏見院
鴨川
参議雅経

新續古今
非拔
日
玉上

作の社は神さひよけの杉ぬ枝を波
やう〳〵なのさう垣やふ幾旗さ
夜ひにそ〳〵吹風てそくら
風
交
新千
交

いつよう志てそくんう宮よ風ら郎
日
交

なうかそてそこてるなうくうら
新勅撰
交

若風よ宮てそのれ志なやさ
日
交

葛城やたよ山よ野ら宮へうら
新拾遺
交

つつよれそ宮てまこふりくやそ
日
交

なう神のそこいうかて少狭よ山
日
交

てつつわへう宮や暁めん山
新拾遺
交

文山宮のく志こへそう時
日
交

やて文つきれてくきれて
新拾遺
雑春

ゆをて西　後頼朝臣
ゆそてう分　参議雅経
ゆそてう垣やふ幾旗さ
ゆそてう分　従二位家隆
ゆそてう垣やふ幾旗さ
ゆそてう分　従二位家隆
富て
ゆそてう分　為道朝臣
ゆそてう分　平氏村
ゆそてう分　千恵満
ゆそてう分　従四位下行内匠頭兼播磨守藤原朝臣
ゆそてう分　祝部成茂
ゆそてう分　為家朝臣
ゆそてう分　為世

新續古今
文

山里へ梅つまてす〳〵風そてこそ
日
交

くれつう宮てそ今一つをくれ
風
交

山宮れてそう日新きてうてかう
風
交

梅とよう為てそ風やそう
風
交

寄れ梅を暗りやそ
風
新勅撰
交

つてくよう為人宮へさう
新拾遺
交

きて文日新う折のくそ
風
交

一こ〳〵の宮吹そう山風よそれ
風
雑上

かて雪れつかこう吹風よかれ
風
交

折つやそてう日つて山みつ
風
交

月う折なてきこれの庭を折
風
交

如う折すての秋の宮てそ
風
交

久らの社　菅原秀治
久らう分　従四位上行式部少輔兼侍従
久らう分　徽安門院
久らの社　従二位為子
久らう分　従二位為子
久らの社　従二位為子
久らう分　従二位為子
久らう分　従二位為子
久らう分　従二位為子
久らう分　従二位為子
久らう分　従二位為子

新拾遺 夏　すゞしさは柳の糸にみだれつゝ 風もまだみぬ 夕ざれの空　後宇多院御製

新続古 秋下　松風よおのへの月ハくもるとも かくハみちにおもひ 夕附ひのかげ　入道一品親王永助

風雅 秋上　わけくらす 野への千草の花のいろを 夕暮ぞしる　菅原親元

新拾遺 恋三　消かへり物思ふ袖の露よりも 夕暮ぞしる　藤原為右

日 恋三　さのみやハ物思ふ人の心をも 夕暮ぞしる　従三位長衡

風 雑上　大方の雲のかゝれる山のはの 夕暮の空　前太政大臣実兼

風 春上　吹よわる風に柳のみだれ糸 夕暮の春　伏見院御製

風 秋下　一むらの嵐の末に風すぎて 夕暮の庭　照別門院 権大納言

風 冬　うづもるゝ野辺の草葉に雪みえて 夕暮の庭　前中納言定資

風 秋下　たちのぼる煙の末の雲にまよひて 夕暮の空　前右兵衛督為兼

風 恋二　うきにたへ人をうらみず待ほどに 夕暮の空　永福門院

風 恋二　こゝろをやさらぬ思ひに添へて猶 夕暮の空　前参議経継

風 恋四　花もまだ散らぬにかねて思ふらん 夕暮の空　伏見院御製

風 雑上　さらぬだに物思ふ秋の夕暮を 夕暮の空　前大僧正慈鎮

風 雑中　何となく物思ふ人の袖のうへに 夕暮の空　後京極摂政

新拾 恋三　とへかしな人のあはれも知られつゝ 夕暮の空　前大納言為世

日 恋三　いまはとて物思ふ人を待よひの 夕暮の空　藤原親家

新拾 春上　玉鉾の道行人もたえだえに 夕暮の空　正三位知家

新拾 秋上　月待と人はいふらん我はたゞ 夕暮の空　従三位家隆

日 秋下　秋風や荻の葉そよぐ音をまた 夕暮の空　後京極摂政

新拾 冬　初雪はふりもやまぬ山かげの 夕暮の空　前大僧正慈鎮

日 羇旅　草まくら旅寝の床の秋風に 夕暮の空　前大納言忠良

新拾 恋三　待人の心をしらで月をのみ 夕暮の空　藤原為藤

日 恋三　まだ人の心も知らでなほかゝる 夕暮の空　大江為章

新拾遺 忘れ 旧 歌上
今はとて思ひ絶えにし身なれども
新拾遺 忘れ 旧 歌上
姉妹なる人の身まかりにける時よめる
多かりし昔の月を思ひ出でて
新拾遺 忘れ 旧 歌上
ひとりぞ眺めつるかな
新拾遺 忘れ 旧 歌上
題しらず
伊勢
新拾遺 忘れ 旧 歌上
秋風の吹くにつけても思ひ出でよ
新拾遺 忘れ 旧 歌上
あまの刈る藻にすむ虫の我からと
新拾遺 忘れ 旧 歌上
いとせめて恋しきときはぬばたまの
新拾遺 忘れ 旧 歌上
夜の衣を返してぞ着る
新拾遺 忘れ 旧 歌上
題しらず
伊勢
新拾遺 忘れ 旧 歌上
雲のうへも涙にくるる秋の月
新拾遺 忘れ 旧 歌上
なほ袖ぬらす影は変らず
新拾遺 忘れ 旧 歌上
題しらず
伊勢
新拾遺 忘れ 旧 歌上
秋風の吹くにつけても思ひ出でよ
新拾遺 忘れ 旧 歌上
あまの刈る藻にすむ虫の我からと
新拾遺 忘れ 旧 歌上
いとせめて恋しきときはぬばたまの
新拾遺 忘れ 旧 歌上
夜の衣を返してぞ着る
新拾遺 忘れ 旧 歌上
題しらず
伊勢
新拾遺 忘れ 旧 歌上
雲のうへも涙にくるる秋の月
新拾遺 忘れ 旧 歌上
なほ袖ぬらす影は変らず

新千載
なほ人の
風 秋上
おもかげは
風 交
松風や
風 秋下
更けぬらん
風 雑中
雲のうへも
風 雑中
涙にくるる
風 秋下
秋の月
新続古 秋下
なほ袖ぬらす
風 雑中
影は変らず
風 秋下
夜の衣を
風 交
返してぞ着る

夕書乃雲 大沢教室
夕書乃宿 袋流出ル
夕書の山 祝子内親王
夕書乃山 院一条
夕書の山 伏見院
夕書の山 参中納言重資
夕書乃山 経二経行家
夕書乃夜 多々良持世拾遺
夕書の夜 拾遺 伏見院御
夕書の夜 永福門院
夕書乃夜 宝光院前大僧正
夕書乃夜 宝光院
夕書乃夜 前大納言為氏
夕書乃夜 伊勢
夕書乃夜 順徳院御製
夕書の夜 平更時
夕書の夜 宗仲法師
夕書の夜 源家長 拾遺
夕書の夜 今上御製 乃脱
夕書の夜 後宇多院御製
夕書の夜 法華堂入道前関白
夕書の夜 後伏見院御製
夕書の夜 前大納言為氏

風冬 村くもにまじりてなみの峰の雪さまして(?)ふる 夕くれの空 永福門院

風冬 柏(?)はけりかはらはふかきすゝき風吹まよふ 夕くれの空 進子内親王

風雑上 たちそむる雲のあやしく風立て松はふかくる(?) 夕くれの空 従三位兼行女(?)

風雑中 山松はみるみる雲にきえそめてさひしさのみの 夕くれの空 儀子内親王

風冬 なみつる(?)草葉の(?)よりもふきあれて山の(?)さひしき 夕くれの空 永福門院内侍

新千恋三 吹かへて空にもとまらぬ(?)風よそにきえ(?) 夕くれの雲 按察使(?)範行(?)

新拾恋三 とふ(?)のつゝ(?)偽なりとても(?)待(?)く思ひさらし(?) 夕くれのそら(?) 前大納言為世

新拾恋三 わくなるふるまてたのむことの偽かへらぬ(?) 夕くれもかな 前大僧正尊玄(?)

新続古恋三 さうてい(?)ちつ(?)はれはまたりとかはそてよそにそ(?)ぬ 夕くれもかな 源氏頼(?)

新拾恋三 いふをもせめていふ(?)身のたのみむかしもかせん 夕くれもかな 従三位家衡(?)

新拾恋三 なをさりとのいのちもかれてたのしいまり(?) 夕くれもかな 賀茂親久(?)

新拾恋三 うちとけ心ひとりよたのめるさえりたりける 夕くれもかな 前大納言為兼(?)

風夏 月やいつる星の光のかはるかなすゝしき風の 夕やみの空 伏見院御製

風夏 夕月夜いりぬる月よりも(?)すゝみてそ(?)みえし 夕やみの空 宗法親王(?)兼光(?)

風夏 またきより山はくらくもけちかき螢ほのふる(?) 夕やみの空 皇后宮大夫俊成女(?)

新秋秋下 かつをきよかく玉葉の露ちらして庭おちらむ(?) 夕やみの空 西行法師

新続古秋下 長月の月もまちえぬよなかれは秋暮ぬ(?)との 夕やみの空 太宰大弐(?)

新拾恋二 おもひたえし袖も思ひのすゝ(?)ちてまたも(?)ちへ(?)り 夕まくれかな 後深草院少将内侍(?)

新続古恋上 やとかへんまつ(?)ほとさ(?)えかひ(?)ふる(?)はまよふ(?) 夕まくれかな(?) 従三位能宗(?)

日冬 ならひ(?)の尾上の雪にさそはれて又山かへ(?)す 夕あられ(?) 宗久法師

風夏中 春かすみ月の夜(?)の庭の花(?)の風よりられてあかる(?) 夕霞(?) 前大僧正慈快(?)

新拾恋 かすみ(?)月のさか(?)山の水(?)の花(?)こゑ(?)に(?)あかうき(?)も 夕ひかり(?) 権大納言忠光

新続古恋下 庭けふ(?)はそこ(?)あらめ草の庭立てまみぬ 夕霞(?)分 前大納言為尹

風雑中 山本はまたれ(?)そめて嵐さき(?)梢ふりのこれ(?) 夕日かけ(?)分 章子内親王(?)

新後古々
しづのめのかりほのとまやをあらみわが衣手は露にぬれつつ

風雅
うきて世をそむく山よりいでしかどなほ世の中は思ひこそやれ

新拾遺
おもひ入る心の底を知らねばや松吹く風の音のさびしき

風歌上
月まちて山のはちかくなりにけり雲のはたてに明くるしののめ

新拾遺
みよの春なれば野もやまもかすみこめて雲のはたてに明くるしののめ

新拾遺
さらぬだに秋の夕べの山風よ松吹くころの声のさびしき

風歌上
さびしさをいかにせよとて山風よ松吹くころの夕べなるらん

新拾遺
山人のみちかよふべき谷川の水のほとりの松の夕風

風雅
なかなかやうきふる人の袖よりもまばらに落つる庭の松の葉

夕日さす谷の松風声たえて雲にかよへる山人の道

雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

新後古々
しづのめのかりほのとまやをあらみわが衣手は露にぬれつつ

新拾遺
いつとなきおもひのたねをおもひ入る心の底を知らねばや

新後古
花ちらす山より出づる松風に雲にかよへる山人の道

新後古
雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

新拾遺
雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

新千
雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

新拾遺
雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

新後古
雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

新後拾
雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

新後古
雪ふかき山路の松の夕風に心ぼそくも鳴く鹿の声

新千秋下
新拾遺冬
新拾遺冬
新後拾遺冬下
新後拾遺冬
新千冬
新後拾遺冬
新千冬
風冬
新後拾遺冬
風冬
新後拾遺冬
風冬

九重に神さびまさる御代の色を
大井川なほ山風のさむければ
久しくもなりぬるかなと冬歌よみ侍りける
吹きまよふ外山の雲のすさまじく
ふりくるままに積る白雪
ふるさとは雪ふりにけり
白妙の衣ほすてふ夏の月
うちそりまさる時やきぬらん
雪ふりしきる山
雪ふりしきる山
雪ふりしきる山
雪ふりしきる山
雪ふりしきる山
雪ふりしきる山
雪ふりしきる山

きぬ着せわたす
おぶ松原
三条院女蔵人
按察卿
永万二年
仙洞
法皇経供
百首歌
為家
為家
後鳥羽院
仙洞
後鳥羽院
仙洞
後鳥羽院
仙洞

風新拾遺
新後拾遺
日冬
新後拾遺
日冬
風新拾遺
風冬
新後拾遺
風冬
新千冬
新後拾遺
風冬
新千新上

我やとの庭の雪をふみわけて
何もあれ雪ふる松山をよそにのみ
よしの山ふもとの雪は消ぬらん
とふ人もなき山ぢ哉
かきくらし雪ふりつもる山ぢ哉
白妙の衣ほすてふ夏の月
待ちつけぬ雪ふりしきる山ぢ哉
雪ふりしきる山
久しくも成ぬる雪のあけぼの
たのめつつ来ぬ夜かさなる雪の朝
めづらしや雪ふりしきる山ぢ哉
雪ふりしきる山
雪ふりしきる山
雪ふりしきる山

後京極摂政
前太政大臣
家百首
後京極摂政
前太政大臣
後京極摂政
前太政大臣
後京極摂政
前太政大臣
後京極摂政
前太政大臣
後京極摂政
前太政大臣
後京極摂政
前太政大臣
後京極摂政
前太政大臣

新拾 冬
かきくらす袖さへ今朝はこほるらん梅にひつるの 雪の明ほの 後鳥羽院御製

新続古 冬
さむしろにとはぬ人の心まてあらはれてしる 雪の明ほの 宗尚

風 冬
みちしあやすき風はいつのれてまた来ぬらぬ 雪の朝ほらけ 津守国基

風 冬
花よたにもとふすみの色に猶かくれなき 雪の朝おき 従二位為子

風 冬
山すその野はしらかりのかすもさしみ 雪の朝あけ 院一条

風 冬
鳥のおと松の嵐の音もせす山と川のかれ 雪の夕くれ 永福門院

新続古 冬
まつ人も跡をまてゐてまたねるつ田の森の 雪の夕くれ 従二位行家

風 冬上
梅の花さくとちりまかふやみ山のかすみ 雪のふるらん 貫之

新千 冬
くれ竹の葉分の風はたくくふりかかるに 雪の下折 藤原雅朝朝臣

新拾 冬
漕かたなしと舟とむる難波の葦の 雪の下折 兵部内侍

新続古 冬
たつねくる人もなきに嶋の山松の木すゑの 雪の下折 参議雅経

新後拾 冬上
芦根川山やま風しぬんせきいれておとす 雪の下水 順徳院御製

風 冬
みつの色神にも染てかくるにしられてかくれて 雪の下とて 前中納言為相

風 冬
くれは川ちりあさ風の柳かれてしまかれ 雪のしら糸 永福門院内侍

新千 雑
わすれてはたのむ山の姉の尾上ほとかため 雪のしら山 前大僧正慈鎮

日 雑
雲まよふあさの白波みてたのむ人かな 雪のしら浜 亀山院御製

風 冬
とふかたの影はの松はうちそせてあはれかた岩に 雪おれの松 従三位兼行

風 冬上
宿からも冬ときみえて我おくの人のこゝろは 雪やつもらん 小弁

新続古 雑上
すみ川河やかつ成ぬらんやそせの水と ゆきやかすみて 読人不知

新拾 雑冬
わつかつし我とはいりきしそめてさくらかみね ゆきさうかんの 従三位実ナ

日 雑春
わつかまたに庭まの通てかけりな木末や花の ゆきさまかをるらん 九条実源朝

新続古 冬上
吹わたるわさかへさなくみしらすを出てや ゆきまよふとほ 三条入道前内大臣

日 冬上
冬ハ空をあさ雪にけもさへてかるかりハ ゆきけならん 後京極摂政前太政大臣

新続古 冬
風さむしさゆるみえれかる夜のはかりし山の ゆきけならん 後京極摂政前太政大臣

風冬　雪ふりてゆきあふさかのせきもみえ
新拾冬　水もるかとて袖の氷山ふえられて
新後拾冬　やたの originにうち出てられ山風のあらし
日　旅　いつてもうひきわたん心もち
新後古冬　吉野山峯の originすみそめて
日　冬　originもうき身のさまにかへ
日　冬　こゝをふもと山松よりもそひて
日　冬　吹わたるこゑもたゝまれみなを山
風寿上　山きぬ雪なきてうちのひさきもとおりへて
新後古寿下　雪ふりしきてうちのひさきもとおりへて
新千　忘四　雪ふりしきてうちのひさきもとおりへて
新拾寿下　一枚うちいれて神もや花のこゝろを

雪ふりしきて　後京極
雪ふりしきて　源頼員
雪ふりしきて　為家
雪ふりしきて　為定
雪ふりしきて　為定
雪ふりしきて　法眼宗性
雪ふりしきて　恵慶法師
雪ふりしきて　曽禰好忠
雪ふりしきて　人丸
ゆきてつもる　紀貫之
ゆきてつもる　坂上是則
ゆきてつもん　紀友則

風秋下　たゝくよりひゝきそめしもみち秋のさを鹿の
風恋二　聞とるまゝ時雨ぬ袖をうつまに
新千　忘四　うき人の心のあきの風よ海士の
風冬　物おもふこゝろそれ行の風よ海士の
新拾　忘一　うき人の心のあきて思つゝぬれそみゆる
日　忘四　思出の袖をみよれもまてくる
新拾　忘三　歌もひゝきてくるせよ人の
新千　春　つゝさゝひくらひまもうつろふ
風　歌下　さめてはうつれ初ふみとこゝろ
風　歌下　ありうちにみるもうれしうちの
新後拾　歌下　ゆうつゝみるもうれしうちの
新拾　忘五　物思人にわすれ事

ゆきしほそみ　後京極
ゆきてつもる　為定
ゆきてつもる　為家
ゆきてつもる　永福門院
ゆきてつもる　為守
ゆきてつもる　為定
ゆきてつもる　法眼行遍
ゆきてつもる　後西園寺
ゆきてつもる　為定
ゆきてつもん　後京極

風
忘四

大阪乃ふねハてまてにまてて
風
新拾
雑下

更にみて　読人しらず

更にみて　皇太后宮大夫俊成

新後拾
雑下

思ふ秋つゆ置しをくらん山乃おくにハ
思ふ秋つゆ置しをくらん山乃おくにハ

更にみて　前大僧正慈円

新千
忘四

それそふねわれやそらんまきのとに
それそふねわれやそらんまきのとに

更にみて　参議雅経

新後拾
忘四

わかれハてなれぬる月の秋の夜を
わかれハてなれぬる月の秋の夜を

更にみて　権中納言実清

日
新拾
雑中

思ふ秋の露のやとりハ誰もかハ
思ふ秋の露のやとりハ誰もかハ

更にみて　式部卿宮

日
釋

うつろふ花のいろをこそみれ
うつろふ花のいろをこそみれ

更にみて　二条院讃岐

日
忘三

らんやそなれしなかの八月の月
らんやそなれしなかの八月の月

更にみて　中院右大将

新拾
雑中

版の世のうき事と思ハれこの世
版の世のうき事と思ハれこの世

更にみて　日吉社禰宜祝部成仲

日
雑中

うてはをそてふみつくしてしかハ
うてはをそてふみつくしてしかハ

更にみて　前大僧正慈円

新後拾
雑下

思ふ秋のつゆにやどりて世にふれハ
思ふ秋のつゆにやどりて世にふれハ

更にみて　権中納言長方

新拾
雑中

うき事をしのふ袖のみ露ふかし
うき事をしのふ袖のみ露ふかし

更にみて　皇太后宮大夫俊成女

新千
恋五

ふるさとの軒ハの月ハ秋ふかし
ふるさとの軒ハの月ハ秋ふかし

更にみて　従二位家隆

新後拾
雑下

思ふ秋のつゆにやどりて世にふれハ
思ふ秋のつゆにやどりて世にふれハ

更にみて　参議雅経

新拾
忘四

風
忘二

風そふく庭の松むしこゑよハみ
風そふく庭の松むしこゑよハみ

更にみて　従二位家隆

新千
恋五

あるうちハやそれもうきよの秋の月
あるうちハやそれもうきよの秋の月

更にみて　前大僧正慈円

新後拾
雑下

今人ハおりうきよの世に着かうと
今人ハおりうきよの世に着かうと

更にみて　権中納言長方

新拾 雑中
新古 旅
日 雑下
新々 恋四
新後古 春
日 雑下
新拾 雑上
新続古 恋二
新千 天
新拾 恋一
日 雑上
新千 羇

美濃のくにうつまさしうてまうくさてうた
嵐ふく秋風ぬまの戸のくしもよりぬの
乃てくへ面影ちさわの世よしもかうれ
うちてうさとうてとわりつまれ
中くよわうおうーと思てまさしの世ま
あれまなうす光れねさあとて暁ふ
秋やうき旅のくそうく風のまいきくれふ
うしおれいそてまかしひよまうさおの
さあやてそさまて秋うれなうかあうれう世の
婦乃教ふるうれまいれてくみ
うてねま月うへわさ秋まのれ
旅秋すう家九山風さしまま月よへおかよ

新後古 羇
風 恋二
新拾 恋三
新後拾 恋二
新千 天
新拾 恋一
風 雑中
新千 恋二
日 恋四
新後拾 恋二

美ねまうん 枕ありい秋よみうぬうそれ人をいうう
美ねたうう 暁とうまも地とくふ三うさうれ枕さうあ
美れたうう うさうてと中くうあさ枕しまよ一よの
美れたうう ろうまや我思秋れまもとかうう
美ねたうう あくなうまみ契れのうきさあてみよれ
美ねたうう 吹かうと秋いれ山の松せよまうて見てみうま
美ねたうう あうううに世のてみよまもれありうきあ
美ねたうう いふもんあううみ実ふへてゆうさぬよい乃
美ねたうう きえうう君の衣を吸てまみよまれう
美ねたうう やうてふしうかうしてあうんみまうき
美ねたうう うてまふこそうーあうう梅の山ふ秋うん
美ねたうう ふしくよりふうさうあれうう

新後古 羇
日 恋四
新拾 恋二
新後拾 恋二
新千 恋二
新拾 恋一
新千 雑中
日 恋四
新後拾 恋二

美ねまうん 枕ありい秋よみうぬうそれ人をいうう
美ねたうう 暁とうまも地とくふ三うさうれ枕さうあ
美れたうう うさうてと中くうあさ枕しまよ一よの
美ねたうう ろうまや我思秋れまもとかうう
美ねたうう あくなうまみ契れのうきさあてみよれ
美ねたうう 吹かうと秋いれ山の松せよまうて見てみうま
美ねたうう あうううに世のてみよまもれありうきあ
美ねたうう いふもんあううみ実ふへてゆうさぬよい乃
美ねたうう きえうう君の衣を吸てまみよまれう
美ねたうう やうてふしうかうしてあうんみまうき
美ねたうう うてまふこそうーあうう梅の山ふ秋うん
美ねたうう ふしくよりふうさうあれうう

新続古 旅中 都出て幾日入りにし杉の山に雲をかさねて けふ 夢のかよひち 二条院讃岐

日 旅中 何となくすぎにしかたのあはれをも青葉わかみ 夢の世かたりと 花園院御製

新千 旅下 うちとけてさめても見えしたびねかなさすかにかへらぬ 夢のなごりは 法印定忠

新拾 恋二 いまはとて見しをなきかなしさの人わすれそここに 夢の名残や 後二条院御製

風 恋三 さめがたき恋はうつつに夜もあけぬべし 夢の名残で 院一条

新千 恋二 ちぎりしも更にさめてはかなしみそさわつつ 夢の名残を 権中納言

日 恋二 とにかくに人めを忍ぶよひよひもしらでしの 夢のうき橋 浄妙寺左大臣

日 恋二 たのみしに思ひなしてもわすられてぬるよはの 夢のうき橋 権大納言実俊

日 恋二 たのみつやまた猶かけて絶えぬよはの 夢のうき橋 読人不知

新千 恋四 わたるべき身をかぎりにてしもあらばさき 夢のうき橋 後光厳院御製

日 恋四 うつつともなきその契りもたえね 夢のうき橋 因幡

日 恋四 こひしさをいかにわたらん一よともなし 夢のうき橋 藤原長秀

新拾 恋一 人はよもかかりしくのわかれかりしはらの 夢のうきて 権大納言義詮

新拾 恋四 今はさへ見しあはれを面影のうかぶよ 夢路さへ 源泰年

新拾 旅中 忘れなよ何しにしも思ひてぬれいやさき 夢のうきて 法印清忠

新続古 恋五 一津まての浪のきえたぬる夜もかりの 夢のうきて 桜井基佐

新続古 哀 あすか川あすともいはぬ世の中は 夢のうきて 津守国冬

新拾 旅中 何か思ふなにかはうけくさめてぬ 夢のうき世と 後光厳院御製

新千 ? すさまじくつらさはてそうすれぞあはれ 夢の契りの 西園寺院

風 恋一 さすかにぬ人の思ひてやそらんてしらぬ人の 夢のあふせも 徽安門院一条

新拾 羈旅 ねてはかようてうしはゆかりなん旅ね床の 夢の果ては 前大僧正実超

新千 恋二 かりまくらひとりかかるかりてさむ旅の 夢しみちには 従三位通有女

風 旅下 むかしのなかの衣をかたしきてたのもしれ 夢をしるか 源義直

新拾 恋二 うき中の契りはひくもとめて人めかしまれ 夢もかよはず 平光俊

三百十二首

神山よ千代あるかさをまいてゆきしるべをも　少将内侍　後拾遺雑

さ

さくらへのぼよ新みちを　皇后宮美濃　後成女

さくわるしくしくと人を待て　永福門院

さくおく人乃ごとく如名　法等四条

さくたにうこぐ琴の如名　北野宮寂蓮

さくるよ歌よてるさくら花　前左大臣

さくと、そて何まつらん　高階重直

さくとたに音信る見　後鳥羽院御製

一村を野しくちるを惜く　未得御心意

さくる方おくるとある月新　正三位成国

さくる新方ゝ幾のゝ月　後光厳院御製

さくやこのよにあんにん

凡夏

月立二　新拾遺一

月立五　新後拾遺三

新古立三

凡立二　新拾遺

新拾遺秋上

月立三

新拾 恋三 あしかり入江の舟のよそにてかん　さりやよそにもやそへらん　大蔵卿有忠

新千 春上 春あさき雪けの水の袖ぬれて　さりてかりのなみたつらし　後宇多院御製

新拾 恋三 いこまつと松山川のうらやましよ　さりぬ人は思ひましくに　大江広秀

新続古 恋三 まんてしぬる夜の夢のかなしき　さりてぬまのと人を待らん　従三位重氏

月 冬 しもをきて小羽ももしきあしの　さりく入江のうはこほるらん　藤原雅親

新千 恋四 なたりみのうきをやしたふ野の　さりぬりつくにあとかゝて　前参議忠定

新千 夫 もしぬるたのゝうきなるあさる　さよわひてみる人もろ　前大僧正覚円

新続古 夫 梅乃香をもちゆきのうち　さよもひゝきて花のうへと　前大僧正永性

新千 夫 宿の方のうたたてあかなし　さよもひそしあやれの空　法眼行済

新続古 夫 今こそしかえると待ちぬあきたに　さよもひゝそしあやれの空　前大納言為定

月 秋下 にほてらも夜みの秋のあさ風や　さよはるかにもぬるらん　藤原俊顕 朝臣

月 春上 あしの屋の塩屋にたつ煙　さともきよの夕かすみ　前参議忠定

新拾 冬 あくてよしにつてさるかたのさかりつき　さもくらぬ秋の空　前中納言為秀

新後拾 恋下 そよめかしてもゆかはあきのとも　さよとへぞくつれなき　従二位為遠

新続古 春上 谷ちるをさくきなはさくや雪かな　さよかれなもなりかねなん　前権僧正

新続古 夏 あくかにし人のこゝろもかはくまに　さよのゆきたなさの夜の一声　浄土寺入道 親王

月 羇旅 きつて山のきそえんかはあきの　さよのゆきたなさのゆかり　進子内親王

風 雑中 立ちのほる煙もしきの山もとの　さよのこなたなるしの一村　浄土寺入道

新続古 雑中 うちのとなりたやなかくもゆれ　さよのうへさとけしをの卯花　後法師

新千 冬 あかれりつ立もしらみそやまの住　さよのうへをさけの卯花　今川修理大夫

月 恋 夕月よもちかとをてか川の　さよのうへをなとらて　前大納言為世

新後拾 恋五 きれなるていちのかたよのとも　さよのうへやつなからん　前内大臣

月 恋五 あにらかのぬれにくもかものとも　さよのうへもまたとむとよ　前大納言

新千 恋五 うつろふな人あはれのかなしとも　さよのうへもまとぬえよ　正親町院 大宰大弐

新後拾 雑下　のかれきてはなれしかのこゝろはさもあらて乃　さとまても身はなれすよそなりて　橘元吉

新拾 冬　山のはにうつりし日まのうすき霜や　さとまても日は見ゆる峰なれん　津守国冬

新後拾 雑上　ましらきて憂きとこそ思へ山里の　さともなくさはしらしもゝなわ　前内大臣

風 雑下　くるれはさいらすよとてもすまぬ世の中に　さわかれのこゝろさしを行らん　読人しらず

新拾 春下　散つもる花のちりて雪あらそひし　さらはまてしはしや人も思ひなん　按察使資継

新後拾 雑上　よし浮世はなれなくてはやさ桜　さらはまてかやもとなれ　前参議雅長

新千 春上　さかりなる宿をも思はぬ身と見えて　さらにさしてみよ桜かれ　平兼盛

新拾 春下　鳴きとまらぬ君をおもひ出よ春て　さはれともなく花のちるらん　後宇多院宰相典侍

新拾 雑春　花やてよし野の山の峰ぬれて　さかりしも花に心さそはれ　法印實性

月 雑春　かくはかり思ひしられて山をいて　さむしまつや遠山に住ん　津守国量

新拾 春下　身にそへて見ゆる人やさそはれし　さらに心も春のとや見えん　如願法師

新後拾 雑上　昔やは人なかれぬ伴ふれな　さらぬ雲のまへにうつる　後光厳院御製

月 雑　いとしくなへ人のさつかし　さうちをかは汝之　民部卿為明

新千 雑中　かくはかりつらき六十の老のはつ　さらにきみに雑つかふる　前大納言経顕

風 春上　まちわひつゝ冬てこゝろ世は　さらにやよのかとしみ奴　後伏見院御製

新後拾 冬　冬もとやこゝろにしかさく都人　さ夜の中に山に行人すらし　永福門院

新千 雑下　うつゝとはえてもおもひたとへ路　さうにこつふなる　法印實性

新後拾 恋三　旅はまた物おもふ人や行末を　さうたし人乃ちらのなかるん　後押小路内大臣

風 雑中　いくらしかく住よそになつらん　さらに見る世はなをしふる　夢窓国師

新千 雑中　行末は心あらぬかなしと見へて　さらにかな世に住なきまなを　法印實性

新拾 雑中　あわれ川ゆくよの関せ越えぬらむ　さらに見るよの世のさかと奴なれ　一条入道内大臣

新後拾 哀　あれのえをうつし出かぬ初み山　さらにめかし世のなけいさむらふ　権大納言公時

新拾 雑上　あまたにるよ行きかはらぬ川　さうつともくらん来む　前大納言経顕

新後拾 春下　花ちると見よかうみ吹ん風の　さそへはまたもしるなからん　従三位雅家

風 春下　一とせにも吹みだしつゝ風ぞそ　さそふ花ものこたらめ　前太政大臣
新拾 春上　花よりも新嶋の梅のにほふらむ　さそふ夜の風いかにし　後光厳院御製
新拾 文　うつろひの花ならねどもさそひつる　さそひつる山かぜきたり　常盤井入道前太政大臣
新千 文　水にゆる池のさゞ浪をさそひて　さそひきておなじ月夜のかげ　芳艶利華院前関白内大臣
風 恋一　あくまでに行ゆきかねと梅ぞちり　さそはれてこはいづくにいかん　小大君
新後古 秋上　身をしてねがふ世はかなくかた　さそへども雲のうへの月　藤原俊頼朝臣
月 雑中　住人のすみかはてなきよりを　さそふ山水のなかにけん　後白河院御製
新拾 春下　吹来る風もよしらぬ浦風の　さそふをもとにかすみなく　前関白左大臣 近衛
新後古 春下　あすこそ春も有とも思ふにて　さそふあらしも花の下風　前参議雅有
新千 雑上　大井川かはべの水はなみなわ　さそふ嵐山の紅葉　前内大臣
新続古 冬　みわたしてもふるゆきもかれはて　さそふ雲ちもなけれ　紀国法師
新千 冬　夜もしたつゆきをやまぬれ　さそふ水にもうかれてゆかん　信実法師

風 春下　いまはさは花もちりしをうらみむ　さそふもつらしきもうらみし　従二位家隆
新拾 恋四　あらはれてかくれなき身のいでてこそ　さそふもうれし三つの小車　後花山院前内大臣
新続古 秋下　こゝろなき宿も山里もなきに　さそふあらしの木の葉のおと　雅永朝臣
新拾 恋　身をうきてよりもまさる契の都に　さそふよしもかくいまはしらぬ　慈円
新拾 雑下　あかなくにおもひしこと物を　さそはれてもしろき庭の松風　覚誉法親王
月 雑秋　一夜くらきかよひめならぬよひへ　さそはれて嵐の初風　俊恵法師
新千 春上　よそにみしかもなく花のかげに　さそひていづる山の春風　西園寺入道前太政大臣
新拾 恋　あやにくにおもはれ行しいまさら　さ月はさ月いつまでと思ひや　前大納言為氏
風 恋　年をへていまもはれぬる都に　さ月てふかたのあはれにこそ　前中納言定家
新千 恋　かくれきすよしもあへなくや　さ月まつ花のかをりなる　後鳥羽院御製
月 恋　あかでうつしもしらぬきず　さ月にねたきの袖ぬらすまでも　前大納言為氏
新続拾 恋　すぎこしかたうちの水茎で　さそへども山の下にも　進子内親王

彰廣右春上
月
桃上
彰於旅
彰廣右桃上
彰於桃上
凡
立々
彰女恵へ
凡
立へ
月
冬
彰於冬
彰廣右春下
彰於賀
彰女恵へ
凡
桃中
月
桃下
彰女
衰
凡
立へ
月
旅
彰於桃下
彰廣右桃上
凡
桃下
彰女
桃中
彰於桃上
彰女
霧旅
彰於秋下

たつ里をとてうめん梅乃くれ
本乃やをとくうこうめん梅も
行くるゝ春もけ衣かりやて
くれやらぬ名乃をた婦きわに
乃宮乃まうにをこもる幼れえを
人りうるつをとにもそへけ
そうこう聖中九の歩を勇きて
かくうそうその春まての衰きわ
情う花やお新の又おう人
とたこうつうの名乃旅なきを
さくかわ神の心浪いくれをて
るく心いや此百代めりめて

さみうかふ空方の雲風
されう神とうりりしと
されうむとふ帝よ桃うれ
されうるくそもの心里
れうおとうせしは
さはるくもしかくまわや
さに神代しぬしつるれ
さうに海をみる尺おきさ
さうにおほゆる耳九言
さうにうこう耳のくれ
さうや花乃月とうん
さうにやえ尺みまれ

天平勝宝
乃座
後冷泉院
御宇
入唐僧一玉
新之子日
一玉新之等
桂之向之具
通

凡
桃中
月
桃下
彰女
衰
凡
立へ
月
旅
彰於桃下
彰廣右桃上
凡
桃下
彰女
桃中
彰於桃上
彰女
霧旅
彰於秋下

境乃音にゆめいまあるなみも
おうよ山くつうれをうれおいる
かみてあるもとうる尺面乃
まうてゆれし世とに号月
くうくもうてん旅を安れ
もしうるひなた尺の面乃
恨る尺凡まうてひる花乃
号旅のまとわかいるのまれ
久うて月にそうれとくん
旅をそ月乃あうおうを
さてこうの音信うり
いくれかとめいうれ心れく
是曳れ心乃衆やめまして

太上天皇
安倍頼氏
之陽宗成
新之
保安年新之
道回法師
法下安基
僧忠寛意
安奈京祝
法下之孫
保氏俊新之
保和行
桂僧忠基

新子 立二
月
非下
新像古 義
新よ 立二 新水 冬
月 立一
新よ 立二 凡 非下 新水 薬
新よ 冬
新像古 秋下 凡 秋下

新像古 冬
新よ 幻下 凡 冬
新像古 非上 新子 立八
月 非 凡 立四
月 立三 新板於 冬
新水 非上 新像古 立一 月 冬

如法一室院 入唐請来 入唐求円人右
擦南歌上 入唐求法 住
入唐求法 住
多武峰 文徳成也 墓氏郡右
智証大師 御製
静住寺 静住寺
仏法滅相

光明峯寺 入唐請来人右
中務宮家 称之
後伏見院 ツキ
ラニ人ス
お大師 入唐求法
後伏見院 御製
承福門院 入唐三度 渡唐
板状歌 同日入唐
後宇多院 御製
神名月 来月 系 神名月

新秋 夏　けふくれはさてうしはさのへてして　さのゝおかしその森になくらん　平氏村

新後拾 秋上　としくれは花にかたくもかりかな　さやなのまつはちるへき　二条院讃岐

新秋 旅中　かつしはつもはし老の水無瀬川　さのこやかはと袖ぬらしつき　中大夫史家母

風 春下　春の雨にうつろはてなれや　さそはくもにまたゝくれぬ　従三位成実

月 春下　春すみ嵐の山のはてなれ　さそはれてもはなはさるゝ　権大納言公

新千 物名　山吹のやえの花たよの山桜の　さかりまへはむかしの花のわかな　長能

風 春中　まちかねてなかくかくもてなん　さくらにさきの花の色わかな　貫之

月 春下　行くたいそてにくらん我宿の　さくらいはなの風よのうらて　藤原元真

新千 春下　はるかなるもしのやうち年　さくらにかはるゝ色のたゝいそ　後宇多院御製

新後拾 春下　こすゑたに花もまつすけ庭の面の　さくらにちるる花のちる白雲のかた　後光厳院御製

新千 春下　しらなみへ又くれ色のさくらを　さくらにゝ帆るのしらぬの空の　後京極摂政太政大臣

風 春中　いはをもうしれ山のはなのつれせし　さくらにかかる春の一しほ　前中納言定家

月 春中　ほうろうのかすみをそらにちらく　さくらに入るありあけの月　後鳥羽院御哥

月 春中　春雨のふるはなみたかさくら花の　さくらの花はいさたにかわる　中納言家持

月 春中　いまのまてに梅の花さく人は　さくらの花のしたにかけぬ　人丸

月 春上　わかそのに何よりたてゝ梅の花　さくらもまちてちらんとすらむ　太上天皇

月 旅下　かつらきのわたりの世の花さかし　さくらさく色もなさしさそ　二条太皇太后宮右京大夫

新千 春下　いま春にかくのこのした花ちりかへて　さくら咲乃花とこそしらん　律師円光

風 春中　はなてしるかの花園しつゝ　さくらちりゆく春にさかるは　前内大臣長　お長政太上

新後拾 春上　くもゐなる梅の花のへい　さくもちりぬも久しかるらく　読人しらす

月 旅下　よのなかの人のつのすゑもたらぬ　さやかにて世緒のよの月　後醍醐院御製

新後拾 冬　夜もねられぬ吹ものにかよ　さやかにあられは音もかはらて　権大納言實盛

新拾 秋下　あかつきのあかてよいはくまて　さやけさよの月にゆくらん　為兼卿

風 秋中　うしとやもまもる見月影そ　さやけさよりもかつるゝかな　後鳥羽院御哥

新古 賀　ゆくすゑは八百万代の稍乃めと春も　さ湛くこゆる千代乃かけ　入道通具

新秋 春上　雨そゝり匂ひしほりて花　さけは散りふる雲のしらぬ　参中納言定家

同 春下　うれしさは浪乃をちかた　さけるかと吹ちる雪もあらし　関白前太政大臣

新古 春上　かさゝきのつはさにかゝる月はかね　さけるほとの文もしらん　柿本人丸

同 冬　くもりなく月を惜けり　さこそいふ人のまかひきれ　六条入道前太政大臣

新秋 羇旅　よるはゝゝ小嶋の磯の浪まくら　さこそかゝりあきのかせの　大納言通具

新秋 冬　たつた山かねては年の暮るるには　さこそは雪もふりつもるめ　光俊朝臣

同 神　さためこそ神に祈り　さこそはかれの嵐も深き　伊勢大輔

新後拾 旅　大月日をはやの影をも持のへし　さこそさえ田の中乃このま　後徳院御製

風 冬　おろかなるひとも恋しと深く　さこそはまたにかゝるの月　正三位隆教

同 春中　春日野の世はのとかなるに　さこそはうへの名のうた　儀子内親王

同 春中　花乃色をさそふや初日の影に　さそはれて名の契ものかけさ　後伏見院御哥

新古 旅二　忘るなよしもふこの気の　さていつくに行てやは　後中院前太政大臣

同 神　かゝるをも神の文をかしこみて　さてもたと人はいかに　鴨長明

新後拾 旅二　恋しきは方のあはれ命とを　さそれとなき契りある　源輔義

新古 旅二　天津風かけりまかせて行舟の　さそうつりゆくやなかん　藤原家秀

同 恋一　みまさりし世のつま恋しきに　そのゆくへをもとめに　前大納言成通

新後拾 旅二　朝夕によその川をへたてての　さて見しかん後乃世ま　従三位村基

新拾 冬　ぬさとつくる身をねかひまくも　さてしも花の雨氣ふる　前参議定家

風 旅二　行すゑにかたをかたりしかと　さてしもありとの姿は　大宰大弐重家

新秋 雜上　行く方の月をそてなた浪乃上に　さてしもあそん秋ふ惜しむ　前参議為秀

新後拾 雜中　さすかにうき世の家とこれ　さてもいとなきれや行　前大納言隆季

風 旅一　思ふ方にきまりし人の一つに　さてもいたといはぬ　永福門院

同 旅下　いかにてゆきたるしてかゝる人の　さてもいたといふ月もなた　前大宰大弐俊兼

彰像吉立三
人のとはゝなせと我もとふ

彰松立三
ものもふことのみも打ながめ

月立二
ながめつゝもとくかへるかな

凡赤
きえにけるあはのうたかた

彰松立ム
をく露の身にかぬ我

凡雑下
袖ぬらすわれもよのうき

彰松羇
しら浪のよるひるとなく

彰吉羇羅
さすらふる野への神の月

彰松秋上
さゝ原やつくみてうつるあきの

彰吉文
さゝ原やをくの小笹をしなへて

彰松雑上
雪ふりつもる冬の夜半を

彰松寄上
さゝ原やふかき心のしるべとて

彰吉立三
さゝ原にほとゝぎすきく

彰松秋上
さゝ原やしのゝめちかき

彰松ム
さゝ原やしのゝめちかき

月立三
さゝ原やしのゝめちかき

凡雑下
さゝ原やしのゝめちかき

月旅
さゝ原やしのゝめちかき

彰吉秋上
さゝ原やしのゝめちかき

彰松ム
さゝ原やしのゝめちかき

凡秋上
さゝ原やしのゝめちかき

彰吉立三
さゝ原やしのゝめちかき

月秋上
さゝ原やしのゝめちかき

凡ム
さゝ原やしのゝめちかき

崇光院御製
後二位行忠
廣高院准后
後伏見院御製
雪二位為定
後伏見院御製
皇太后宮大夫俊成女
参議雅経
九大夫
権中納言公雅
女院小弁
権大納言通明
嫡後二位為定
吉門院御製
吉門院御製
後鳥羽院
女房
後鳥羽院
女房
女院小弁
太上天皇
権大納言公雅
権中納言雅世
参議雅経
権大納言通明
嫡後二位為定
吉門院御製
吉門院御製
後鳥羽院
女房
後鳥羽院
女房
女院小弁
太上天皇
権大納言公雅
権中納言雅世
参議雅経

風 冬　吹しほる梢乃風は身にしみて　さゆる霜夜乃星清きかな　従三位為兼

新後拾 冬　またゆくも色の陰はれてほのかなる　さゆる霜夜の月のひかりに　前右兵衛督為盛

月 夏　かさなれる松にかゝれる雪の消えもせ　さゆるかのやまのしつくに蝶　伏見院御製

新拾 冬　菊かほる六十の老もいとなまれ　さめぬ眺めはむかしなりけり　慈威上人

新千 雑三　あらまして一夜乃夢の契り也　さめぬ思ひのしけくもあらなん　後宇多院御製

風 雑下　おもひもさらぬ世のわかれし夢　さめぬはうきもよ世をや捨さん　永福門院右京大夫

月 雑下　さてそれかさそのよはふかくなりにけり　さめぬはうつゝもあやはしもせ　院御製

新千 恋二　見えねの夢のちきり深かりし　さめていりのつくさぬよかは　平時村朝臣

風 恋二　あひ見つる今夜のうつゝもおなし夢　さめてはゆめとおもはれて　永福門院内侍

新千 雑下　めくりあふ夢ておもひかよひける　さめてそこのはてまさりけれ　大江広茂

月 恋二　見えぬの夢にうつしの契りかな　さめてくれなのこはぬかな　二条院讃岐

新後拾 雑　なかき夜の夢をゆめとも知るへきや　さめてくまなく見る人そなき　亮舜上人

新後拾 夏　夏の夜の夢路けりつゝかくまさす　さめてくもこゑは松のこかけに　後鳥羽院御製

新千 雑　玉水もとくる岩のもるやみ草　みゆるさきほかくておもふ　前中納言定家

風 雑上　夜もすからいねぬふしとも思はなく　行入月の影をまつかな　賀茂重久

月 秋　見しとき心そめにし人の面影なれん　さしはせるかたのこちゝわ　前関白

新千 羇旅　志りまてうちわたる世のこゑをきく　さしくれぬともや見はみえん　前関白良基

新千 秋　しら浪をとゝけくもけるかゝるのの舟　さうきん人の袖をとふる　成助法師

風 秋　みかさ山かり見のかなさかり川の　さして行しかたはいかにのむかし　藤原長経

新千 冬　君かことを共にしらはれをみつるよ　さしてのみをきけるやも　前大納言為家

風 雑上　はよ千鳥やさにひとつけたりの心　さしての頃も浪やもとめん　藤原房顕

新千 雑秋　三乃川とけてあふなる舟のよくなくか　さして一夜とねとちかひまん　藤原秀行

月 雑下　いつれはとほちかりのあを草の　さしもあてこそ船をてまん　よみ人しらす

　あけくそてよとよたの瀬けてる川舟の　さしもうき世にさてこそかひはなかれ　前中納言雅継

月 三二 凡 秋下
彩傳古 飛中一
彩子 飛中
彩傳古 秋上
彩子 飛下
彩拾遺 飛上
彩傳古 飛中
凡 秋上
彩傳古 秋上
凡 飛中
月 秋下

いたく物くみそほつ雲の色新
なふとうく夜ふかよふ松て
ほ月物のまうれ一こ
さくとしてみうれなく
さもとうたしれなん
萩ふ吹音ふさうといれる
さもかしやうふ人のた
さもうてや人て信ん
さもうふ浪うふ舞ほ
さもくうふ物のえれ
さもあるふある明
さもさのえ善のあ
さもうふ久ふ物うふ

国ちはふ
姫子物院
彩子
宗と郷主
定卿
相秀房
九二長
ろろ郭下女
祝子成詮
海の上人
彩傳古 連資
彩傳古 院卿
彩傳古 郷主
今上四宮

彩拾遺 そ
彩拾遺 一
彩拾遺 二
凡 二
月 三
彩子 上
彩子 二
彩格 文
彩拾遺 非
彩子 飛下
彩傳古 二
凡 飛下

さうきのおむろあ
うりさ萩のふ夢よくふ
さふ浪れつふのこと
人ふ行方ふ浦ふよこ
ふれそさに花ふりふ
ふまにふりそれ梅ふあそ
いたにふ春ふむふ月ふ
ふ雪ふ風れ音ふれ
ふふ時ふとふ夜ふ
ふふ水ふとうのひこ
ほ世ふふくあふみふくや
ふりふ光ふふ郭凡
ふふにふてまくふん
ふふかふ郭ふ浪ふれ

さふきま宿よ浦叶ふ
おりのふ凡ふ音れ
さをふうやふこふふ
和泉式
中元にふあふ
用
今出川入道
ふ右大臣
和泉式
光俊朝臣
安嘉門院
郭内
実国卿女

行末のつばくらめかな　彩よ 立三
行春や号泣そうに肉そうて　彩後吉 飛下
ほととぎすのねあるように啼いてゆく　彩松 立三
凡 飛下
うたゝねの上りてもいてせん　彩松 飛下
いろにでくはるるかの月の影　羽 赤
ほろ〳〵と花方として桜哉　彩よ 立一
きえ〳〵ゆめの神よとよる雨　彩格 支
心ぼそもいとうつゝぬ夕ぐれ　彩後吉 飛工
さすや君への帰りてう寒し　彩後吉 飛工
さすやかまくらにとおてこ　彩後吉 飛工

二百五十九首

凡 秋上
彩松 秋上
凡 旅
羽 秋下
彩松 秋上
彩後吉 秋下
凡 秋上
彩松 秋上
凡 秋上
羽 飛上
彩よ 雑旅

ま

菅うるまよりの花みくりて　乃秀 秋上
人わ見いるもうもはうそうめ　常雄 井文 秋上 改
旅うもうもうう人ちゝゆき　凡 旅
入あしい元ろのれるに響うめて　羽 秋下
うにぐる久日の新乃ろ　彩松 秋上
きうはう音くろとしてみぬ　彩後吉 秋下
こう乃糸うちみろとい天川　凡 秋上
さう心乃指もよやうろん　彩松 秋上
つろぬをしあ初いゆちかくて　凡 秋上
うもしはい彩て萩乃音うも　月 飛上
うれしくなる庭のとこを　羽 雑旅

乃秀 秋上
常雄 井文 秋上 改
凡 旅
羽 秋下
彩松 秋上
彩後吉 秋下
凡 秋上
彩松 秋上
凡 秋上
羽 飛上
彩よ 雑旅

彩校秋下　をちこちみえてゆくすゝきかな

彩子秋下　月ろうの門の西ろのけうとふ

凡秋中　虫の音もなくて萩原よろぼひて

彩子秋下　ゆくあきのをのこもし野よ寒こゝて

凡　秋ぜり月乃尾上いでそめて

飛工　秋ぜり月乃尾上いでそめて

月秋下　羽目山もみぢそめきのふのゆふ

月秋下　あわの月いまをさかりと秋みそて

月飛工　入日さす海ちと秋のわたるに

彩校五二　いとせめて中なる流乃音たゝる

彩子秋下　るまでもてゝなる菜ちゝて

凡　夏をへてくるわしの郭公

文　心乃儘のなんまおもふ人ゝ

月飛中　ゆくすゝきこゆ入あしの音

御製

後二条院製

後宗祇打消ス上ニ

祝言成句

後伏見院御製

後伏見院打消ス上ニ

後伏見院御製

後宇多院御製

後宇多院打消ス上ニ

後伏見院御製

後宇多院御製

後伏見院打消ス上ニ

後伏見院御製

後宇多院御製

彩校三　いてしかな秋ある人乃一ことも

彩校足数　海にぶけれとなをこの葉氏

月飛中　春ふ乃うらゝもちてて尺わせ

彩校五　くちなてしやまふりわに結ぶん

彩校書上　くるかしらみもれて方乃夕たゝる

彩校書入　久乃ゆ遊いみるとにはうの雪降水

彩子文　九重乃色乃芭行すくる色

凡　ちわくてく今そに降かゝまた

文　いさ尺ゆるかゆゝも梅ちかゝ

彩江校　すゝきまろうれ取ふ

飛書　すゝきまろうれ取ふ

彩子尺　すゝきまろうれ取ふ

彩書古文　すゝきすゝきまろうれ取ふ

彩子朱　すゝきすゝきまろうれ取ふ

新千 歌　[illegible]　[illegible]　[illegible]

新続古 恋二　[illegible]　[illegible]　大僧正[illegible]

新千 秋上　[illegible]月[illegible]　[illegible]明[illegible]　前大納言為世

新拾 雑上　[illegible]　[illegible]　藤原為重朝臣

新千 雑上　[illegible]　[illegible]　[illegible]

新拾 旅　[illegible]旅[illegible]　[illegible]　中務卿[illegible]宗

新続古 夏　[illegible]　[illegible]花[illegible]　前中納言宗量

冬　[illegible]　[illegible]　[illegible]

新拾 雑下　[illegible]月[illegible]　[illegible]人[illegible]　[illegible]

新千 恋五　人[illegible]　[illegible]　後[illegible]院御製

新拾 雑秋　行[illegible]　[illegible]　[illegible]

新千 春上　[illegible]　[illegible]　従二位家隆

新拾 夏　[illegible]　[illegible]　院御製

新拾 雑下　[illegible]　[illegible]花[illegible]　花園左大臣家小大進

新千 夏　[illegible]　[illegible]花[illegible]　花山院御製

風 冬　[illegible]　[illegible]　[illegible]

新拾 冬　[illegible]　[illegible]　よみ人しらず

月 夏　[illegible]月[illegible]川　[illegible]　[illegible]左大臣

月 雑春　[illegible]春[illegible]　[illegible]　二条為遠

風 雑下　[illegible]　[illegible]　前中納言為相

新千 恋八　[illegible]月[illegible]　[illegible]　[illegible]

月 秋上　[illegible]　[illegible]　よみ人しらず

風 恋也　[illegible]人[illegible]　[illegible]　[illegible]

月 夏　[illegible]　[illegible]花[illegible]春　[illegible]

月亜二　どこぬる夜のふたりのとこねん　永福門院

新よ　いうそうまの多のふしたちるん　後宇多院御製

新秋　天つ代のねよかしわうのかうそ

新秋下　春しそもわうそうやらみるる月乃

月雑　袖もある心なくきまえたてよ

新続古亜二　さのやとりかうをかくお淡

新秋秋下　そろ人のきふのまにねてぬ

月　夏　人待といそねうそうなくきた

新続古亜二　うた中にを井のそのの歌と

新秋亜二　おうくへてあれーうう亜にるそのと

凡　夏　風をたれ乃あとはは立たれて

新続古足名　みのなるやをれ神乃者と

新秋中　なくしけさにつるりにおをおく　御製

新続古羇旅　おくさをおく明みやまるやのは

新秋　夏　御ふ歌りうるなくひもおを月

月　秋中　ものうにいうゆるもつれやを赤て

新よ　なまにるを法やゆよ春ふ乃

新秋　春上　いくとを尺ていうりのふのの

新秋秋上　この里に村るすりて春ふ女人

新続秋立名　あるれくる多家まろくそ寄の

月　亜一　その多家とと立れ寄のみれあし　後花院製

新秋　春　ふそまてもかうぬれあうぬ　二条為忠

凡　秋下　るるみうに世れさの聖人れ寄　後水尾院

新秋　雑上　心於いな春春ここ寺寄の　保時寄

月 雨上
雲のゐにうつむ雪れ年をえて
新後古 亜一
富士乃嶺よりもわも雪と年もえて
新拾 春上
心里いつとなる雪れこれしかも
新後古 亜二
日乃もとわれしこてほと羽毛乃
新千 文
草毛た雪とわさけくうよ雪
新拾 亜四
ろを川むとふ水れみた方世に
新千 亜一
そもそくる方をもりて
月 亜二
さてもんはいう人やそうほん
月 亜二
うさる方世にあるん乃いちのふとを
月 亜二
もれ止のそもれまとさだえ
新拾 亜三
しと夜ふしれしくさ灯燈乃
月 春
叫ととれきもたろ夕そもわ
凡 春上
ちまり雪行止とみよそわ

新拾 春
さてれなた約ろ乃有
月 亜一
さててあ止ふとろさい人九
新後古 春下
さしもんねれ乃雪と散
月 亜一
うるそのやみ人乃の草下かで
新拾 雑下
多辺心かれ人乃そもわ立
新拾 春上
元にのこまてみてろくあく雪の
月 春上
春の野にるめたくわう雪れ
新後古 雑上
学乃原雪てくみのまにう
月 亜二
つとまていく海凡をちたわきぬ
新玉 雑春
郭公まち里をなかとるや
新千 春
いも世川とぬ水の射鵜い
新後拾 秋下
うえこ乃里人ちうっとを

まて雪乃定
入る京数と
水助
後京極摂政
前太政大臣
後宇多院
御製
亜四て俊通
念乃佛
八条院讃岐
猪名風廣
清浦朝臣
非成俗頭仲

月 夏　なくきけは声もけぬ一声を　きてはいつ人にかたらん　西行法師

風 雑上　まつかねもつきぬるたけの郭公　きてはとかたる人しなきれは　三善為連

月 雑中　きくたにも谷乃ほそ道の雨乃音　きてなをあはれの声もはれ　進子内親王

新秋 雑上　岡ちかき萩のはそよく風の音は　きてなかくたゝ寝もかなく　権律師慈基

月 大谷　遠けれは声もきこえし郭公　きてのこしくまや方の空には　参議雅経

風 秋中　雲のほかに鳴けは暁の空を　きてのちは衆いろりんかも　よみ人しらず

新後拾 夏　雲乃かゝるはきゆる山乃夕月に　きてはしのひもまかりけれ　権中納言雅家

月 夏　鳴くなりておほれし五月の郭公　きてそうしてそ野のゆく夜　二品法親王覚助

新後拾 秋上　えたもなくふく風をし秋風を　きて出るよりも庭の萩原　後照念院関白左大臣

新秋 夏　きのふ山ほとゝきす郭公　きてたゝ人まつかたみそ　照光門院一条

風 夏　待えても猶めつらしき一声は　きてはなたれ郭公　右近大将通房

新後拾 恋二　いはまてり関乃あくのこゑ逢坂　きてしるも音そまた　慶空上人

新千 羇旅　先なほららしいみしいみさとを　きてうらはるか白川の関　澄覚上人

風 秋上　いく秋のこれもはなつ虫の音や　きてならさはるか虫の聲　前僧正範憲

新拾 雑秋　足ひきの山に月すむせいは郭公　きての山のゆくこと　小弁

新千 夏　もろともに山乃はの郭公　きて見やこの人かたらん　法眼行済

新後拾 恋一　ありまてみやるてねあともやしを　きてしらぬ神のしらね　正三位季経

新秋 雑上　時鳥いはぬ今はや聞き人ん　きてもこひつる声は鳴くらん　従二位家隆

風 夏　聞きらすに待たぬかや山のつらん　きてしけるを待ちはつ　寂蓮法師

新千 恋上　あはれしかくのまた雪ふる　きてしのはるを見てし　郁芳門院安芸

新秋 雑上　冬くれはまつ花の色そかはる　きゆる雪ともあく雪の路　入道二品親王覚誉

月 冬　氷乃下にこえてあなたの　きゆる浪まのよやみ　前参議教長

新拾 恋五　忘れすはこころの雪乃跡みて　きゆるあはれに如なりけて　馬内侍

風 恋四　いにしへも哀れ人のかたみにも　きゆるもあはきやの一ひ　永福門院

月 冬
てらしけんなかのいけの水の面に　さゆるよは清きかけの上の雪　源仲正

風 恋や
うたゝねの夢もはかなき世の中にうき　君まちわひてしきたへの　前大納言実昭

新拾 哀
しら浪の上にたちゐるあさきりに　みするかたちの有明の空　西行法師

風 雑下
ますかゝみくもるとなしにしられける　みかきみかけていつはりもなし　読人不知

月 雑上
うつろはぬ人のこゝろをおもひしるも　みしよにかはる梅の花かけ　読人不知

月 賀
春の夜やかけさへ花にうつろひて　をしむ心のしほりけるかな　皇太后宮大夫俊成

新続古 雑中
世々のあとのかたみにのこる我　まちもつらし我なかにたまへる　祝部成茂

新千 雑上
松の葉も老木の柳よはりて　またもとむるはいはほなりけり　前中納言雅孝

新拾 神
神のまもる御代おさまれる所に　まちかつるのちきりなしえねは　祝部行氏

新拾 恋六
いかにしてかは人をとはるゝ恋ならて　ちきりてもいつかしほの袖　よみ人しらず

新千 恋二
いつはりの別れのなき涙の数ありて次　かへりまちわひてかへりけり　読人しらず

風 恋一
青柳のうちきにかれるゝそて　君にうらみのきえぬ身なり　権大納言隆教

月 雑下
たのまれぬ身そてをかけてかくれなき　きみのかたちにとてかへりみれ　永福門院内侍

月 恋や
世中さかりとふ川もゆるいかなれ　きのふと我とう中しらぬ　小町

新千 神
をこのまゝ浅沢のみ代のかみかけて　きみと神とにたのむ人は　津守国冬

新続古 神
ちはやふる神のをしへをまもりて　きみをまつる万代まてと　前大僧正良瑜

新拾 賀
きみはたかきやまのこゝのへのまつり　きみをまもる世のかきりなき　入道前内大臣

新続古 雑下
かくて世にかゝるのたのしみもまた　きみをまもる御代をかさねつゝ　万秋門院

新千 恋二
もえわたるこのみもすゝの川の岩にもる　きみとたのめしはかなかりける　祭主輔親

風 賀
さくら花千世の春の色にあそひて　さくらの花のいろにあかさむ　右近大将通忠

月 賀
冬の月はさえてしるしかきりなき　君か千世の春と咲て　深心院関白前太政大臣

新続古 冬
冬の月のあさ人のおもひにかゝる　きみか千世の数いそへける　普光園入道前内大臣

月 賀
春日山松にしるしの松の葉の　きみか千世の数をそへける　中納言資宣

風 雑下
むかしをしのふ人もなき世には　きみかくれなき月をなかむる世よ　前大納言資明

新續古 戀二 恋しさはまだ見ぬさきを人もみな きみがかるにけり我もまさしん 藤原資隆朝臣

新拾 賀 ときはなる玉松がえやいく千世も きみがよはひにまきをそへてん 権大納言公明

月 賀 君しろ田に千とせを経て住霧も きみがこのよに上つしと見ゆ 源師光

月 雑中 数ならでわがしへさまかふ方もなし きみがためにと猶しもの 源直氏

月 夏 風にほふ花たちばなに袖かけて きみがためにと君もけかるみ 赤人

新千 賀 わか白髪ぞ流をうつして千世までの きみが祈のむねとうつせ 京極前関白太政大臣

新拾 秋下 うつし人は千年までも君まつの きみが老をおもひかぎりて 法眼行済

新千 春上 祈のうしして二葉の松の千世をこそ きみが座によそうつしけれ 入道前太政大臣

風 春下 常盤なる山吹の花かくさき きみが千年と花にもや よみ人しらず

新拾 雑中 見なれけり身にもあまりて見えしに きみがめぐみの杯あまりぬる 後山本前大臣

新續古 賀 ながかしくのとわる世て成よるか きみがめぐみや空方にしめ 前内大臣雅孝

新拾 賀 萬代のりまで何世をへてます鏡 きみがかげをまみへてなん 基俊

新千 賀 千年ふるかの松も千とせの きみが御代にはひさしかるらん 源道済

新拾 賀 亀山のちて世の人のためしも きみが御代をまもるらん 皇太后宮大夫俊成

月 春下 春の山風るきまに花はまにあらて きみがこの中ぞ花をも 後二條院御製

新續古 夏 世にいはふ君の御代はにはしれて きみがこの中世の 花山院前内大臣

風 雑中 年経てもあはむ世の人の きみがよは 二條前大納言實教

月 雑上 時しらぬ庭の形をも花はなる きみがために 永福門院

新續古 戀三 もれいはぬ君のおもひのやもはらし きみがための 鴨長明

新千 賀 いはふ世はなほ千世の世の千世の きみがかずへて 前大納言為世

月 雑中 玉敷の庭にたえぬ流れも きみがみふどかこ 遊義門院

新續古 戀四 うつしてもかけぬの 行すまり きみもかくこそ 前大納言為兼

新後拾 戀六 忘草をそふとつつて住よしの きみは 源兼氏朝臣

新拾 神祇 かくてふ住吉の きみに 伊勢大輔

彩後古秋下
はなのこしろう人ゆきと住乃えの
彩ふ
雨上
もちこわまをしあれ住ろう
彩ふ於雨秋
れりのこ音いをまて住ろー
月
亜ム
のほこよゆくをたーんと忘草
凡
雨上
春と住乃水をんふ住ろー乃
彩於
雪下
ちとぬしなくやーま地と大井の
彩後古
雪下
行春のこれくみよとみみのこ乃
彩於
雪下
我ゆえて矢みろこと住ろーの
凡
賀
天う代の寺ーせをしみろ川の

百八十八首

彩後古
亜下
ゆきはねあとの後乃音ろ松　源和氏
彩ふ
亜二
ゆきはねあとの夜の通ひ　女京盛位
彩於雨
亜二
ゆきねゆゆをいそねそわろ　乗真住佛
彩於
雨中
武蔵野のとうきこうたの夜半ふ　太幸大武
月
雨別
ゆきにうたみこ乃ろ　重家
彩ふ
雪下
小心田乃かりこ乃ふをたもけを　聖武天皇
月
雪上
ゆきうな世にまも世てうろ　光る君ろ入名
凡
雪
ゆきあるゆきにうし風う吹　お行ろ入名
ゆきさうけよ雪降まれ　権全右入名
彩ふ
秋下
ゆきうにーの降ん　芳随利華院
彩於
旅
ゆれるとれ乃ふ永人　お入内ろ民
凡
雪
ゆき行とたとてのふを　女院ろ御

月 秋中
雲はらふ夕日の浪の色すみて
ゆく光みえぬ霧の一むら
院御哥

月 秋中
たえだえの雲まにつたふ氣色して
ゆく光に出る雲の夜の月
平宗宣朝臣

新千 雑
帰る人まださぬねたるよやこの
ゆくとしの内の逢坂の関
権中納言具行

新拾 秋上
足曳の山のあなたの月影の
ゆく方とほき秋乃空哉
正三位知家

新後拾 秋下
まづ深山乃ゆふ奥乃哀夜も
ゆく方しらぬ秋の夕かな
前中納言定家

風 秋中
山本の田乃もとに吹きし露乃
ゆく方みえぬ秋の一むら
後鳥羽院御哥

月 秋中
あまの海やかたみくらさき島の帰
ゆく方見えぬ沖の浦の舟
前中納言有光

新後拾 恋五
あまの住むうらのさとびとを帰くも
ゆく方遠き須磨の浦わ
正三位成実

月 冬
行きてたえなむとせし若水乃
ゆく方もなく流るる所
春宮院御乳母

新千 秋下
月影の夜さ渡るみなとには
ゆく方もなき波の上の舟
前大納言為世

新後拾 秋上
妹もたのむ花と夜ちらじよ
ゆくてに悲しき人乃夕暮
源秀之

月 恋下
この頃吹く田子の浦の波ぞ
ゆくてにさえぬ神やぬるらん
永福門院御製

同 夏
すずしさは三室の山の郭公
ゆきてや見よと来らし海
前中納言定家

風 夏
ともすれば涼しくなりぬ風みえて
ゆきて涼しき杉の下かげ
後鳥羽院御哥

月 春下
ゆく春をとどめかねつる夏の月
ゆく夜とともにせまりぬ
俊成卿女

新千 羇旅
あすからや風やふきまよふ浦をとこ
ゆくへやなに浪の人の船
後鳥羽院御製

新拾 秋下
夕されば雲とみえてたちる霧乃
ゆくかたの秋の花の風の吹
後西園寺入道前太政大臣

新拾 冬
冬ごもりやがて時雨のやまの
ゆく帰もみえぬ雲ぞつつ
宣光門院

月 恋三
わすれぬにはるかに
ゆく帰もしらぬ花の跡
皇太后宮大夫俊成

新後拾 恋
思ふ人まかするならば
ゆく帰もしらぬ浮月の空
同

新千 秋下
三保の浦にさして見るゆふくれて
ゆく帰るかたの雲の影
左近大将義詮

風 恋二
心のまゝにいさよひ月にさそはれて
ゆく帰るかたにあかれなや
藤原隆信朝臣

月 秋中
大井川くだすいかだの橋乃下
ゆく人もとまりて雨乃夕暮
前大納言為兼

新後拾 羇下
旅人の駒ひく坂の山の
ゆくも帰るもわかぬ所
太宰権帥為経

新後拾冬
かりねたてくるる浪も紫翅く

新後古賀
夏の代り心乃浦のりる月影乃

新秋賀
芝乃庵をみとられそろくく

新後拾夏二
ふたりとしくるる契ふう

月雅上
もしく野うかわけるあといみしく

新古今恋二
つゆのうらくほとゝぎすなきたわか

新後古恋三
つと松沢伯しらともうるさ

新古今雑下
そうそうものよかく変わる光

新後拾恋二
こしまてのあとをとうてうらくと

新古今恋二
ぎまてとおもむ命をいかゝん

新後拾恋四
ありまてとかまて命と思もし

新後古春上
花とみくくやめとるん春乃

新後拾冬
ゆくせにほる山川乃水

新後古賀
ゆきまくくるる夜乃

新秋賀
ゆきまとめくさる遊の笑行

新後拾夏二
ゆきまとぎさのこぎれ

月雅上
ゆきまのこるのまくるる

新古今恋二
つゆのうらくほとゝぎすなきたわか

新古今恋二
ゆきまてとおもむ命をいかゝん

新後拾恋四
ゆきまし乃なかうなわるも

新後古春上
ゆけとをなた岩のあとを

一村乃里のうらくの煙

新後古雑
ゆくをうとたのうとるる夫

風吹くしのみやうかるやも

月秋上
ゆくへもしらくうかれ

ワそなたうれしなせうとや

風秋下
ゆく袖のなこうをふはかさるも

月秋中
ゆくへにしもうそもうれ

月秋下
ゆくへとてあまよ乃知まて

新秋賀
ゆくをいとふ乃知まて

新秋上
ゆくへとたのおふこのまるる

新後拾三
ゆくへとてうつしもしられて

風雅下
ゆくへとたにわれうう夜

新後古秋上
ゆくへの空乃うれ乃る

月秋上
ゆくへのそ乃ありの

新後拾下
ゆくへの神の阪なるとうわ

ゆけを遠こうるく夜

新後古秋上
ゆくをうとたのうとるる夫

白河院宸筆
ゆくへにしもうそもうれ

後成女
ゆくへとてあまよ乃知まて

常磐井入道前太政大臣
ゆくへにしもうそもうれ

後鳥羽院御製
ゆくへとたのおふこのまるる

関白左大臣
ゆくへとてうつしもしられて

法性寺入道前関白太政大臣
ゆくへとたにわれうう夜

後拾遺雑二
ゆくへの空乃うれ乃る

権中納言長方
ゆくへのそ乃ありの

美濃国院宮
ゆくへの神の阪なるとうわ

菅原孝標

風 雑中　山かけの雲の杉まを見えゆく　ゆふへの空に君かよはひを　前大納言為氏

新千 冬　草も木もかれてさひしき山里は　ゆふ日のかけもえこそつれなし　安嘉門院

月 恋二　我恋は行衛もしらぬ嵐にて　ゆふへの空の雲に消ゆく　常磐井入道前太政大臣

月 恋一　人しれぬ思ひのしるしなかりせは　ゆふとゝろきもよそにこそきけ　馬内侍

新後拾 雑上　神まつるとて小田にちかくなるゝ身の　ゆふくれまてとゝろきの森　賀茂益久

新千 恋二　さらさらに契りし人のあてもなく　ゆふまてとふ人もあらなん　よみ人しらず

月 雑　神のますこゝろの山の月影の　ゆふかけてしもけふのみあれ　法性寺入道前関白太政大臣

風 夏　山の気を行すゑあらはしてなかて　ゆふ風涼し夜の草むら　儀子内親王

新千 夏　一方にあはれの秋は心すこし　ゆふくれ毎の風の涼しさ　伏見院御製

月 雑上　入日さす嶺の木葉もまみえて　ゆふさしのかけそ涼しさ　従二位行家

月 霧　むらしくれ雲ちる奥の山風　ゆふ霧のなかのあさき萩　従二位家隆

風 夏　秋ちかき風いとゝ涼しくて　ゆふ立の雲に雨まさるなり　前大納言為兼

新後拾 恋三　うきてなほことゝふ人のなくてのみ　ゆふつけ鳥は鳴くとなくらん　定為法師

月 秋上　いつもかく秋をまたれんとはいへ　ゆふつけ鳥の萩のうへかせ　法印浄弁

新千 神　神まつるたまかきのうへの榊葉の　ゆふつけ鳥の声かはして　津守国冬

新千 雑上　暮ゆく月のかけしらすして人の　ゆふつけ鳥もみやまるらん　藤原為明

新後拾 雑下　行つきぬ老の坂にきこえて　ゆふつけ鳥もきくとやなくらん　賀茂雅久

新千 雑上　老ゆくかのはやあきの　ゆふつけ鳥も八声なくらん　浄阿上人

新千 夏　とりのこゑはなれしたれとみよ　ゆふ霧かくれやまとなてしこ　章子内親王

新後拾 秋上　たつまよの人の小萩(えき)をたつねて　ゆふ霧むせふ庵　従二位雅家

新千 羇旅　文こそみよ波の玉ゆら　ゆふ霧かくる人の嵐　後伏見院御製

風 冬　ちよふやのしまのはての浦風よ　ゆふ浪千鳥立さわくなり　左京大夫顕輔

新後拾 夏　しらなみて野路の波の夜半に　ゆふ波かけて秋風ぞふく　中務卿宗尊親王

新千 夏　夕すゝみ御禊川　ゆふ浪かけて袖や立らん　後西園寺入道前太政大臣

新後古
秋上
うらさびし入江の尾花なみのみて　ゆふ浪かゝるまのゝ浦せ　後京極摂政前太政大臣

月
夏
夏の日もかげさす池のさゞ波に　ゆふ波こゆる風ぞ涼しき　前大僧正隆源

風
雑中
ひとかたにまよふ風の吹はらひ　ゆふ浪こゆるよどの浮橋　在原朝村

新拾遺
旅
たびまくらいまはこゝろの秋の山　ゆふかけ雲に屋どやかりまし　覚助法師

新続
雑上
まだき野の草とぢてこそ雲の　ゆふかけ山の麓の鳴るらむ　浄正尹卿親王

風
秋上
こゝろせよすそ野の尾花咲そめて　ゆふべの山おろしの風　後光院御製

新拾遺
雑三
いつはりのむかしに影の消なむと　ゆふくれまちて浦のほとり　前大僧正慈鎮

風
冬
冬ふかき雪の中にて年のこえなむ　ゆふぐれまちの風のしらみ　後鳥羽院御製

新拾遺
雑上
きのふけふ岸ちかくの水の音に　ゆふしほまちて月やすむらむ　前内大臣雅孝

風
秋中
あさかぜの松の枝に庭の雲　ゆふぐれさそふ風の吹かよふ　後伏見院御製

新拾遺
雑三
いつはりと思はまほしき契かな　ゆふしほの音に影やうつらむ　源和義朝臣

風
秋中
なにはかたつらなる山の麓の　ゆふしほもゆく月のかげかな　後光院御製

月
冬
降つもる霜さえて月の影も消て　ゆふぐれまちて庭の白雪　同御製

月
雑中
浦風にさそはれてよる浪のほの　ゆふしほの浪の上の雨　同御製

月
雑中
磯の音に心はきたる浪に吹あらはて　ゆふしほ浦の松風　同御製

月
春上
花のかをみさそふ春の風に吹立て　ゆふれしの雲のかなしさ　後伏見院御製

新千載
羈旅
ふる里はなかも屋どらむくまつらむ　ゆふさりいつとなく人のあかし　前大納言為定

風
旅
ゆふぐれは心もとまる旅のやどり　ゆふなきの下を行く風　前内大臣為道

新後拾遺
雑上
あさくふく方にたなびく雲のうへに　ゆふしほのはるかに浦の風　前内大臣公朝臣

月
秋下
難波江のいりえの浪の音もなく　ゆふしほする秋の塩風　後鳥羽院御製

新拾遺
冬
芦の根もうらかれはてて寒の日に　ゆふぐれいとゞ山のしく雪　信実朝臣

風
冬
あれたる夕霧いとふかくなるわ　ゆふしほこほる枯野の草　前大僧正源恵

月
冬
のこれはる草の夕霧も晴なむ　ゆふさえし里の人の袖　化佛女朝臣

月
雑上
こゝろとは江のおもてに映る　ゆふしほやさし浦風ぞ吹　読人不知

新拾遺　里ふれさ心淋しくもいほりして
風　村雨ぬるゝ袂のおもえ
秋下　時雨ぬるゝ心ちこそすれ
月　秋上　旅風のうた
秋上　ゆふたつをそ待つけ
月　雅上　ほのうすやほたるのまよふ
月　雅中　夜ふかき野ら海ちかみ
新よ　雅中　みちのくのみさをの松の
風　寿中　こゝ里のそとの村の柘
新拾　秋下　日くらし此山ふもと
月　雅上　折ちかみ心下ゆく
風　秋上　うき旅の心ぞとまる
月　秋上　旅風い遠き羊腸ふもと
月　秋上　よ秋ぢの夜の旅にて

ゆふたつにうく蛙の旅人　寛保三年為氏
ゆふたつもふる袂のおもえ　後京極摂政
ゆふたつをそ待つけ柳　寛保三年為重
ゆふたつのうつろふ山　夜泊宿春
ゆふたつみてゆくも浦ちかみ　夜泊旅春
ゆふたつゆふつゝ里の　寛保三年
ゆふをそふもとの柳　寛保三年
ゆふかけふる岸の苔ぬれ　寛保三年
ゆふづく松風うき　寛保三年
ゆふかぜ吹の夜の人　後京極摂政
ゆふの雲の八重山　後京極摂政
ゆふの新うき　後京極摂政

月　旅　雪さえわたる入谷いほ
月　夏　夕風ふく心もやせ小田より雨晴て
新後古　秋下　さゝ分かてみえし山田より
新拾　冬　里もるゝ月のかげ
風　雅上　ふる雪の三笠山
新拾　秋上　旅ねの夢の
月　冬　ふる雪の
新後古　冬　大井川こほりふく風や
月　春上　清のうらまでもさえ
月　冬　ふる雪や咲ぬる梅のえ
新拾　雅上　炭の烟りかすみそめて

院御所　進吉報と
寛保三年為重
雪降朝来
経三位基輔
服部保胤
保氏卿
安倍晴光朝臣
或人邸前雪
二首
小観為雅
等持院殿
九十首

風

冬 新続古
みきはふく嵐の程をあらそひて ゆふたに氷る庭の池水　従二位行家

冬 新続古
うちよする沖つしら浪音たてて ゆふたつ沖の風や吹らん　祝部成繁

新拾 雑上
旅ねする都の空はみちのくの ゆふたつ雲に秋の夜の月　左兵衛督基氏

新続古 冬
紀の海やかたもの浪の雪はれて ゆふなみの浦のうら風　藤原重光

新拾 文
時しらぬ山郭公さ月まつ ゆふたやすみぬ折の情なん　祝部行氏

新続古 冬
ふりくらす行ゑもしらぬ音たてて ゆふたの日かげ岸の松かえ　権少僧都公敏

新拾 羇
時雨ゆく雲をかさねて ゆふたちのあとの雲の間　卜部兼直

新続古 冬
冬かれの人かけもなき ゆふたの風のさむさ　左兵衛督直義

月 哀
山はよしそれとみえけるの ゆふたの世のすさひ　源高光朝臣

新拾 冬
月いかに雲のかよひ路 ゆふたの遠の山の端　権大僧都経賢

月 冬
うかれぬる月を風の ゆふたの行のはま人　公順法師

新千 雑上
えみぬれば行方はしらぬ ゆふたもつきぬるころ　前大納言為氏

新拾 冬
おしの鳴きしもやさむき夜さむにて ゆふさはいそく松の山のは　後山本左大臣

月 雑上
新千
行浪やうらめしく思ふかの ゆふさかけさむきものなかりし　性覚上人

新続古 冬
さえまさる夜もさむき山おろしよ ゆふさかあかつきの夜半　藤原季経

新拾 冬
浪の間ゆきさそふ月影して ゆふさかかけの浦の風　後二条入道前太政大臣女

新続古 秋上
秋風の松のみどりの色まされて ゆふさきそよく人はなし　源光行

新千 秋下
萩が花露に小萩さく秋に ゆふさつ人の袖にまつて　従三位実顕季

新千 秋下
長かれとみやまの音に人の鳴る ゆふさむのしもの霜　後一条院御製

月 冬
ゆきもさん庭の浅茅にかれは ゆふさやおのれをやさん　源義行

新続古 恋上
長き夜は人もとはぬもみちかは ゆふさもとすみた鶴もみる　藤原隆信朝臣

新拾 雑秋
浮雲の峰のこまに嵐出て ゆふさてらすむ月の光　前中納言有光

風 雑上
長月ても花の色をちる梢に ゆふさたのこれ苔の埋木　藤原為量朝臣

新後拾 冬
ゆふかけの浪もとまらつきの日の ゆふさうかくのゆらら波る　権中納言為重

風雲上

咲初てまつとそ待るうめ
ゆきの中にもとめ梅かえ　権大納言為兼卿

新拾遺
恋四

ちねもえたちもしこゐそめなから
ゆきのしたにもとめてそみる　従二位為子

月
雪上

立日よりまつ花とんとうれしさを
ゆきのこりてや梅のかほらん　藤原為世卿

新千
雪上

ふるあまつ雲いかに晴ぬて
ゆきのこる山の梅のかほり風　前大僧正慈円

月
雨上

たまこたにうもれしうめの
ゆきのした水のこゑもうちとけて　従二位為子

新続古
雨上

新拾遺
雨雪

うき心なくさめつもりつる
ゆきのやとの入あしの雨　通陽門院上総

新後
雨上

ふるさとの梅のしたかせ
ゆきまつ月の雲のうす衣　章義門院

風雪

なかめやは思ひ初しく
ゆきふりつもるまに野に出ても　従二位為定

月
春上

ふれつもりて里人のいそかん
二月や梅のもとの雪かき　権大納言為定

新続古
雪上

二月や梅のもとの雪かき
ゆきの内に花のにほひを　権大納言為定

新後拾遺
雨上

しるへのうめのそこにかくれる
ゆきけふとをも花の夕暮　前大僧正慈円

風雲

物ふかき夕暮ふくさとの
ゆきのしたに水鳥の声　前大僧正慈円

新拾遺
雑秋

先こゝろとや草のたえまに
ゆきわけて井手の玉水　前大僧正慈円

新後
雪

ふるさとはけのそれもわかに
ゆきかりにとふ人のかくこゝろ　前大僧正慈円

新後
雪

すこしのまもうもるもさひしき
ゆきふかきやまもとの小里　前大僧正慈円

新続古
雪下

ふる人のふるくこゝろもしけき
ゆきみてこそとふもとの雪　前大僧正慈円

新後
雪二

ゆきこそ月のいりあひのそれ
ゆきのあなたの遠の山もと　前大僧正慈円

新拾遺
雑別

ゆきみてうへをさそうわかん
ゆきのうちの野人のすまゐ　前大僧正慈円

ゆきそてうへぬきわかん
ゆきのしたの水のそこひも　前大僧正慈円

ゆきふかきやまのそれかた
ゆきのうちの竹のおとまで　前大僧正慈円

ゆきたふさのそをとゝのへ

月
亜二
同もう一枚ありこれ実方朝臣
新傳古
秋上
七夕
月
友
月
冬
凡
雑中
新拾遺
冬
月
雑春
新傳古
雑中
凡
冬
新古
羇旅
新拾遺
亜三
凡
亜三

ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ

道もなし雁がねの
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ

注後乃み
七夕こひ
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜

夜半雅明
新古
逢人
おもふ人
夢人僧正
遍昭
院御
院御
夢人僧正
遍昭
院御
院御
夢人僧正
遍昭
院御
院御

月
亜二
月
亜二
月
雑下
月
旅
新傳古
亜三
月
羇旅
月
天智
月
友
新拾遺
雑下
新古
羇旅
新拾遺
亜二
月
亜二

いそで世のなみだ
うつしをおくかとそ
いたものいたうもけくうとみ
つゐの思ひやねともふる
多のなのしきりわをうつて
あけゆく秋のみちとそなる
ねのほとろおろそねのやうのうたくこそ
年くまなきてしもなれ初音こそ
うつしたにもいそねさうくれ
さ枕夜をこめてなくなる
ゆめのもうつた都なほ
さよ夜ふけてうつる月の
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ

道もなし雁がねの
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ
人のかよひぢ

あかつきわかれなんとよ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ

雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜

夜半雅明
新古
逢人
おもふ人
夢人僧正
遍昭
院御
院御
夢人僧正
遍昭
院御
院御
夢人僧正
遍昭
院御
院御

後乃み
こひ
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜

夜半雅明
新古
逢人
おもふ人
夢人僧正
遍昭
院御
院御
夢人僧正
遍昭
院御
院御
夢人僧正
遍昭
院御
院御

月
亜二
月
亜二
月
雑下
月
旅
新傳古
亜三
月
羇旅
月
天智
月
友
新拾遺
雑下
新古
羇旅
新拾遺
亜二
月
亜二

いそて世のなみだ
うつしをおくかとそ
いたものいたうもけくうとみ
つゐの思ひやねともふる
多のなのしきりわをうつて
あけゆく秋のみちとそなる
ねのほとろおろそねのやうのうたくこそ
年くまなきてしもなれ初音こそ
うつしたにもいそねさうくれ
さ枕夜をこめてなくなる
ゆめのもうつた都なほ
さよ夜ふけてうつる月の

あかつきわかれなんとよ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ
ゆきかよふ

雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜

夜半雅明
新古
逢人
おもふ人
夢人僧正
遍昭
院御
院御
夢人僧正
遍昭
院御
院御
夢人僧正
遍昭
院御
院御

後乃み
こひ
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜
雁なきわたる夜

夜半雅明
新古
逢人
おもふ人
夢人僧正
遍昭
院御
院御
夢人僧正
遍昭
院御
院御
夢人僧正
遍昭
院御
院御

新千 恋五　逢事はいつとしもなくかきたえて　ゆめにも人に通ひてまさん　後醍醐院大納言典侍

風 恋五　うきなから思ひ出けるわかれくや　ゆめにも人のみえしなるらん　従大納言公宗母

新千 雑下　つらかりし旅寝の中にましひさて　ゆめとしれはよのことわりそ　安嘉門院大弐

新続古 哀傷　おもひしり世にあるものとならひたに　ゆめとおもへは人のあはれさ　卜部兼直

風 又益　散花も惜くもあらぬ世の中は　ゆめのうちにてうつゝなりけり　前大僧正慈鎮

新千 恋二　みしよをはさらにしのひて行すゑの　ゆめもあはれの人の面かけ　前大納言公蔭

新拾 雑中　思ひ出はありとみるまに過にけり　ゆめとさめてもしはしなりけり　権少僧都行覚

新千 恋二　うつゝにはまことにいかとみるよしの　ゆめ路にもあはぬ逢坂の関　前大納言為世

風 雑下　いまひとりあかしかねたる夜もすから　ゆめ路にいかにふしのかよひけん　藤原隆信朝臣

新続古 恋三　つらきゆへにいもとしつかにみえんは　ゆめちはなといさむまちかん　釈寂法師

新拾 又　旅寝してやすく見えてぬるの　ゆめちにかよふかたもあらなん　三条入道左大臣

新千 恋二　とにかくにあはれ夜ころのうきねの　ゆめちにいつまで通ひてまし　殷富門院大輔

同 雑上　旅やつれ宿もるゝ梅の花の香に　ゆめちをかけて匂ふ春風　前大僧正慈鎮

同 恋二　うた人のたのむるよひの関守も　ゆめちにさへやゆるさゝりけり　中宮大夫公宗女

新続古 羇旅　旅の山月をたにやしなふ草の庵　ゆめ路にさへや通ふ風の音そ　従二位家隆

風 恋一　つれなき人のこゝろの関守は　ゆめちまでこそゆるさゞりけれ　後醍醐院少将内侍

新千 羇旅　嵐ふく宿の月影をほのかにて　ゆめ路もとほし都の山もと　前大納言忠良

新続古 羇旅　さすらふる身はかねのこゑに草の枕　ゆめ路もたえて通ふ山かね　従三位義重

新千 恋二　待わたる旅はいつとなく床の身に　ゆめちもやかてかよはさるらん　等持院贈左大臣

新拾 恋二　ひとり寝のいふともなき床さひしき　ゆめちもやかてかよひさるらん　同

新千 羇旅　まこと思ふ宿の関守の枕　ゆめといふにも浪の音も聞　法印宗助

同 雑下　袖ぬれてぬる夜の床もしらぬ身を　ゆめとえは松風の声　源家長朝臣

新続古 恋　かくしつゝ年月はつるよしもかな　ゆめとえれこそかれしよ　西園寺入道前太政大臣

新拾 恋三　いつしかとせめておもひのたえしかな　ゆめとさへみて旅ねてまし　藤原信実朝臣

新千 秋上　うたゝねの手枕さむき旅人の　ゆめをのこして月をみるかな　平宣時朝臣

新後拾 冬　かりまくらしぐれも夜はの浦風に　ゆめとはさてなくなるかな　源氏頼

風 雑下　なれにたるまくらやいつの名残にて　ゆめを夜半ともみなしつらん　従二位為子

月 冬　まつ人の夜のやどりのうきにまよふ衣　ゆめを夜はしらぬ心かな　寛尊法親王

新後拾 秋　露をこそかくもおきてぬるよの　ゆめをも夜はふ萩の上風　平英時朝臣

月 雑下　うちとけてみるにもあらぬかりふしの　ゆめをもなくむかしとぞ思ふ　前大納言為氏

風 雑下　思ひとくもとかぬ夜のまくらさへ　ゆめかとたにもこゝろやはせん　菅原光俊朝臣

新千 羇旅　都思ふ人のみち越えてもね　ゆめかとさへ思はでありけり　入道二品親王尊円

新千 哀傷　うきの世をさきたてしそむる人は　ゆめうつゝもえこそ定めね　前内大臣

風 恋二　うき中のみそれとさけまくらの　ゆめよるさまはなりけるを　従二位為子

月 雑下　ほくといふ方とてやむしねの　ゆめをみし夜はなりける　前関白太政大臣 通

新後拾 羇旅　えられしとまたあたへきんはかなりよの　ゆめうつゝのさかなりける　権大納言公明

風 恋一　ほくもとをこえぬ今はまうでし　ゆめさへいとしむしかるよ　前大納言實明女

新後拾 恋三　もろともはかなきのほくいそぎ　ゆめうつゝも人はかはるめ　徽安門院宣旨

新後拾 恋三　さりしろやあかさぬきまくら覚えて　ゆめのあとも夜きけるとがは　醍醐入道太政大臣

風 雑下　別れし人をまてるやかるらん　ゆめのさめて今さへみてに　前太政大臣

月 恋二　きくてたるあさきまくらにかふるみ　ゆめのてちのさのおもふ海　前大納言為家

新千 恋四　世にしらぬ思ひをつけるる秋乃　ゆめのなみださへおもふ　今出川前右大臣

月 恋三　まよくのあかぬ別れのまくらして　ゆめのみ夜をのみけさはつゝ　権中納言公雄

風 雑下　人の世はたゞ憂しとかや一夜の　ゆめの中をもくいをあらそふかな　従二位為子

新千 雑中　なにゆかしき何とかなきえ覚やね　ゆめの中なる世の中とぞ世を　後鳥羽院御製

新後拾 哀　うつ涙のこゝろぞかけて　ゆめのまくらの袖のうち花　藤原為明

新千 恋一　うつつの是やいかにとこよの　ゆめうつゝもかゝるかやれ　権中納言公雄

新後拾 雑下　ゆめうつゝの中にとむかへして世をそのかな　ゆめてふものはうたかたとはかなけり　常盤井入道前太政大臣

ゆめもしらぬものかくれ ゆめもしるもの康乃之卿 惟明親王

二百五十三首

さ、

同 雑下 いつはのさはらるあらしふきにけり 基俊
新後拾 雑下 ゆはてぬあけくれかねのみ鴻浪 二條院讃岐
新千 友 みしもなを津守ほとりの浪こえて 藻壁門院
新古今 三 津守ほとりの契ありけれ 大宰権帥仲実
同 三 我こゝろ 後二條院
新後古 三 いはてしと三井寺にて恨ねと 権大納言通
同 三 いはれぬ君なをさりの村雨を 宣光門院
同 三 ふるとなくぬるゝ袖のなをはやき 藤原定家
新拾 三 いつしかも 後二條院
新拾 冬 さらぬ風さゆる秋のゆふくれ 土御門内大臣

彰拾雑　尽くせ　さほりくに　風ようる　称の糸　西行法師
風　雑上　なるなく　さてそ　山風ふさろくあもあの　順徳院御
雑上　さうしい　さもわすまそ　ふり　枝のる柴折折ふる　作り作
彰千　秋下　風　叶らぬ　さとは　山川ふそ　文うそ　製
風　友　雪ふれ　深草原　思ふ春　新なくなわ　彰千　雑上
友　彰千　彰拾　かなしい　秋風よ　人かいふれあも　三位家
雑上　彰拾　五々　風　をかふの　柿ふ　ふれ年　一ふ　徽安門院
五々　風　雑中　あま風も　さとい　ふもを　五法　一条
彰続古　彰続古　五二　新千　秋　新続古　大宮に　法下定
五二　新千　秋　新続古　秋　ふりれや　ふうち　家
新千　新続古　久々　ふりて　さふる山ほ　ふみち　順徳院
友　新千　友　なるある　さふるに人の　沙弥　製
ふりれし　さふに人の　沙弥　ふりほ　順徳院
さふる卯　製
さふ気なる　卯春　ふりち　法下定
さふる卯　法下定
製

新拾　雑上　なでおれ　さふる月雨よ　枕ほる夜の　共ほる　徽安門院
新千　友　ふ川の　さとのふれの　卯花　一条
風　心もの　さとのほ　永福門院
雑上　法下　さとの名に　筆法　製
新続古　雑下　あまれも　さとの梅　秋ほる師
彰拾　五々　風　雑上　一ふ　無名抄
新拾遺　五々　風　雑上　一ふ　無名抄
風　旅　一ふる　さとのふ　後二条行雑
彰続古　五五　あるのふ　さとのふる　三位盛資
新続古　五二　そなめし　さとのふる　前中納言
彰千　雑上　花なし　さとそ　定家
彰拾　雑雑　行上り　さとわしある　民部卿
彰拾　雑雑　春ひかる　さ卯のふる　後の京極
彰拾　雑雑　春ひかる　さ卯のふる　内大
彰拾　雑雑　春ひかる　さ卯のふる　小野小町

風 春上
春たちて さはまたし 梅のはなをもみしや 人のかはらん　貫之

新千 雑上
いくたひか さかりみすらん 玉垣のみれたる枝の 秋萩の[illegible]　前大納言為教

新続古 雑上
萩かるゝは さらぬ[illegible]を 伊勢のなへて 雪まちぬるを 尋ねけむ　権律師仙覚

風 秋上
いくたひか さかえ[illegible] 松の葉に 花ちるほとはなかりけるかな　前大納言為教

新拾 神
露けしや さかきの枝にかけつらん 神のいかきは いく代ふりぬ　津守国夏

新千 神
代々をへて さかゆくとみゆ[illegible] かはらすは いつもかはらぬ 神の[illegible]　権中納言為明

新後拾 神
かはらすや さかゆく神の恵にて 千代ともいはし 花の松かし　按察使[illegible]

新続古 羇旅
なかそらの さよの中山 ゆきやらて 月をみる秋の 旅の空かな　斎藤基経

新続古 雑
うつりゆく さよの枕に かよふなり あはれにきゝし 秋の下風　三条入道左大臣

新続古 冬
かくれなし さゝにもなほ 山のはの るゝしらは 待つなるらん　藤原為之

新続古 冬
冬まては さて残りつる 紅葉の みてつれなき 霜かな　左大臣

新千 雑下
みし世の さらなるぬは 道をみちの 嵐にかはりなりけり　前大納言為教

新拾 雑上
行てみぬ さらにまれなる 秋の夜は 一夜をもなき かはらぬ　中納言為定

風 秋
かつらこそ さらにうつろひ かはらぬは 花もちるなむ 色にしみけり　左兵衛督

新拾 恋三
いかの葉も さらぬ袖にて 世をふるも かはらぬものを 恋ひつつぞ経る　前参議為秀女

新拾 雑
ならぬ世を さらにめくりて はかなくも 住みしかはらぬ月を見るかな　大納言成通

風 秋
みよしのの さらに末は たかくとも 秋をのみこそ 世のにほひかな　院御製

新千 雑
さやかなる さらにいまなる 都にも 秋の月影 みるへかりける　前大納言公[illegible]

新千 羇旅
花の香を さそひ吹来る 風ならは 夜はにおとつる人やあらまし　権大納言[illegible]

新続古 雑上
ねさめして さそふなる 秋風に 荻の葉そよく 音のかなしさ　大納言通具

新続古 雑上
さこそ人 さそひこし 秋のゆふくれに 袖もしほるゝ 露の色かな　源持之朝臣

新続古 秋下
いかにして さそひくる 風のまに 露そおきける 萩の上葉に　平宗宣朝臣

新拾 雑上
春をせは さらにつもり 年ふれは 花もちりなむ 身をいかにせん　二品法親王尊胤

風 冬
ふるふりの さらにふる 枯葉の 音そさひしき　普光院入道内大臣

新拾遺 はりまより
新後拾 京へのぼり侍りけるに
冬 新後拾 新後拾 雪のふりけるを
冬 新後拾 新後拾 萩の葉もしをれ
冬 新後拾 新後拾 さそひあつめて
冬 新後拾 新後拾 ふく風乃
冬 新後拾 新後拾 うつりゆく
冬 新後拾 新後拾 風こそ
冬 新後拾 新後拾 山を庭
冬 新後拾 新後拾 枯ゆくは
冬 新後拾 新後拾 なをさりて
冬 新後拾 新後拾 なをうゑて

新後拾 さうふかに絵をかきて侍りける
新後拾 雪のふりてこまれるの
新後拾 新後拾 雪のふりこめられて
新後拾 新後拾 萩の葉もしをれ
新後拾 新後拾 さそひあつめて
新後拾 新後拾 ふく風乃
新後拾 新後拾 うつりゆく
新後拾 新後拾 風こそ
新後拾 新後拾 山を庭
新後拾 新後拾 枯ゆくは
新後拾 新後拾 なをさりて
新後拾 新後拾 なをうゑて

陽明 雪のふりたるを
拾遺 雪のふりこめられて
拾遺 萩の葉もしをれ
拾遺 さそひあつめて
拾遺 ふく風乃
拾遺 うつりゆく
拾遺 風こそ
拾遺 山を庭
拾遺 枯ゆくは
拾遺 なをさりて
拾遺 なをうゑて

新拾 雪のふりけるに
新後拾 雪のふりこめられて
新後拾 萩の葉もしをれ
新後拾 さそひあつめて
新後拾 ふく風乃
新後拾 うつりゆく
新後拾 風こそ
新後拾 山を庭
新後拾 枯ゆくは
新後拾 なをさりて
新後拾 なをうゑて

新拾 雪のふりけるに
新後拾 雪のふりこめられて
新後拾 萩の葉もしをれ
新後拾 さそひあつめて
新後拾 ふく風乃
新後拾 うつりゆく
新後拾 風こそ
新後拾 山を庭
新後拾 枯ゆくは
新後拾 なをさりて
新後拾 なをうゑて

新拾 雪のふりけるに
新後拾 雪のふりこめられて
新後拾 萩の葉もしをれ
新後拾 さそひあつめて
新後拾 ふく風乃
新後拾 うつりゆく
新後拾 風こそ
新後拾 山を庭
新後拾 枯ゆくは
新後拾 なをさりて
新後拾 なをうゑて

新拾 雪のふりけるに
新後拾 雪のふりこめられて
新後拾 萩の葉もしをれ
新後拾 さそひあつめて
新後拾 ふく風乃
新後拾 うつりゆく
新後拾 風こそ
新後拾 山を庭
新後拾 枯ゆくは
新後拾 なをさりて
新後拾 なをうゑて

新拾 雪のふりけるに
新後拾 雪のふりこめられて
新後拾 萩の葉もしをれ
新後拾 さそひあつめて
新後拾 ふく風乃
新後拾 うつりゆく
新後拾 風こそ
新後拾 山を庭
新後拾 枯ゆくは
新後拾 なをさりて
新後拾 なをうゑて

新拾 雪のふりけるに
新後拾 雪のふりこめられて
新後拾 萩の葉もしをれ
新後拾 さそひあつめて
新後拾 ふく風乃
新後拾 うつりゆく
新後拾 風こそ
新後拾 山を庭
新後拾 枯ゆくは
新後拾 なをさりて
新後拾 なをうゑて

新拾
春下

春なれや
名もおぼろ
月も
朧
よ
の
内
大
臣

新後拾
春下

風
ふけば
花
の
香
を
さそ
ふ
山
の
春
の
夕
暮

風
雅
春下

春
の
夜
は
ま
だ
宵
ながら
朧
月
清
水
へ
行
く
人
の
袖
の
匂
ひ

新千
春上

春
た
つ
と
風
や
さ
ら
ん
み
よ
し
の
の
山
も
霞
の
遠
ざ
か
る
な
り

新後拾
春中

春
の
夜
の
夢
の
浮
橋
と
だ
え
し
て
峯
に
わ
か
れ
る
横
雲
の
空

新後拾
春中

世
の
中
は
な
に
か
つ
ら
き
と
思
ひ
と
る
花
に
な
ぐ
さ
む
こ
ろ
も
で
の
み
ぞ

新千
春二

春
来
ぬ
と
人
は
い
へ
ど
も
う
ぐ
ひ
す
の
な
か
ぬ
か
ぎ
り
は
あ
け
ぬ
な
り
け
り

新後拾
春中

春
の
夜
の
夢
の
う
き
ま
く
ら
ほ
の
ぼ
の
と
鳥
の
な
く
ね
に
さ
め
ぬ
る
か
な

新後拾
春中

世
の
中
を
い
と
ふ
ま
で
こ
そ
か
た
か
ら
め
う
き
に
し
づ
め
る
身
を
も
人
か
な

新千
春二

春
の
夜
の
夢
の
う
き
ま
く
ら
ほ
の
ぼ
の
と
鳥
の
な
く
ね
に
さ
め
ぬ
る
か
な

新後拾
春中

世
の
中
を
い
と
ふ
ま
で
こ
そ
か
た
か
ら
め
う
き
に
し
づ
め
る
身
を
も
人
か
な

新拾
春上

春
の
夜
の
夢
の
う
き
ま
く
ら
ほ
の
ぼ
の
と
鳥
の
な
く
ね
に
さ
め
ぬ
る
か
な

風
雅
春下

春
の
夜
は
ま
だ
宵
ながら
朧
月
清
水
へ
行
く
人
の
袖
の
匂
ひ

新千
春下

春
た
つ
と
風
や
さ
ら
ん
み
よ
し
の
の
山
も
霞
の
遠
ざ
か
る
な
り

新拾
春下

春
の
夜
の
夢
の
浮
橋
と
だ
え
し
て
峯
に
わ
か
れ
る
横
雲
の
空

風
雅
春下

春
来
ぬ
と
人
は
い
へ
ど
も
う
ぐ
ひ
す
の
な
か
ぬ
か
ぎ
り
は
あ
け
ぬ
な
り
け
り

新後拾
春下

世
の
中
を
い
と
ふ
ま
で
こ
そ
か
た
か
ら
め
う
き
に
し
づ
め
る
身
を
も
人
か
な

新後拾
春下

風
ふけば
花
の
香
を
さそ
ふ
山
の
春
の
夕
暮

新拾
春下

春
な
れや
名
も
おぼろ
月
も
朧
よ
の
内
大
臣

風
雅
春下

春
の
夜
は
ま
だ
宵
ながら
朧
月
清
水
へ
行
く
人
の
袖
の
匂
ひ

新千
春下

春
た
つ
と
風
や
さ
ら
ん
み
よ
し
の
の
山
も
霞
の
遠
ざ
か
る
な
り

新拾
春下

春
の
夜
の
夢
の
浮
橋
と
だ
え
し
て
峯
に
わ
か
れ
る
横
雲
の
空

新後拾
春下

風
ふけば
花
の
香
を
さそ
ふ
山
の
春
の
夕
暮

新千
恋三

こ
ぬ
人
を
う
ら
み
わ
び
ぬ
る
夜
の
袖
に
は
月
の
や
ど
る
な
が
め
を
ぞ
す
る

新拾
恋下

こ
ぬ
人
を
う
ら
み
わ
び
ぬ
る
夜
の
袖
に
は
月
の
や
ど
る
な
が
め
を
ぞ
す
る

新後拾
恋三

こ
ぬ
人
を
う
ら
み
わ
び
ぬ
る
夜
の
袖
に
は
月
の
や
ど
る
な
が
め
を
ぞ
す
る

新千
恋三

こ
ぬ
人
を
う
ら
み
わ
び
ぬ
る
夜
の
袖
に
は
月
の
や
ど
る
な
が
め
を
ぞ
す
る

新後拾遺 春三
新拾遺 春一

さえかへる
衣手より
かすみわたれる
春の夜の
月

権中納言資教

新千載 春三
新後拾遺 春文
新千載 春上

大江千里
春風に
ほころぶ梅の
花の香を
たれ
ともわかぬ
夕暮

参議雅有

新拾遺 春一
風雅 春上

藤原為家朝臣
梅の花
さきぬと
ばかり
見しほどに
ほのぼの
明くる
春の夜の
夢

前大納言為氏

新拾遺 春上
新千載 春上

藤原家隆朝臣
梅の花
にほひを
そふる
春の夜の
朧月夜
しく
ものぞ
なき

従二位行子

新後撰 春上

後京極摂政前太政大臣
梅が香を
袖に
うつして
とどめ
おかば
春は
過ぎても
形見
ならまし

新後拾遺 春上

前大納言為定
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新千載 春上

前大納言為世
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新後拾遺 春上

権大納言為重
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新後拾遺 春上

前大納言為定
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新千載 春上

権大納言為世
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新後拾遺 春上

前大納言為定
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新千載 春上

権大納言為世
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新後拾遺 春上

前大納言為定
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新千載 春上

権大納言為世
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新後拾遺 春上

前大納言為定
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新千載 春上

権大納言為世
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新後拾遺 春上

前大納言為定
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新千載 春上

権大納言為世
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

新後拾遺 春上

前大納言為定
梅が香を
風の
たよりに
尋ねても
春は
過ぎぬと
告げ
やらぬ
鶯

風雅 春中　あたりさへ(?) さそはるる物を桜花 …… 　貫之

新千 恋四　風寒み さそはれ行(?)…… 　左京大夫顕輔

風雅 雑下　おもへども さそはれぬこそ …… 　永陽門院左京大夫

新拾 ？　まことに人 さそはれ…… 　花園院御製

新千 釈教　あまのかは さそはれ…と思ひながら …宿の…道あり 　永福門院内侍

風雅 恋四　根ごとは さこそ …… 　権大納言公蔭

新拾 春下　山さくら さこそ嵐のさそふとも …… 桜かな(?) 　従二位家隆(?)

新拾 雑上　露(?)置きは さそはるる山の …… 　安倍清行(?)

新拾 冬　… さえ(?)に …… 霜の月 　従三位成家(?)

風雅 春上　… さそはるる …… 　後鳥羽院御製(?)

新拾 春上　うくひすの さそはれ …… 　後宇多院御製(?)

新後拾 雑上　… さそへ(?) …… 世なりけん 　よみ人しらず(?)

新千 雑中　そむきても さそはれまし世中に …… かはらさるらん 　平氏村(?)

風雅 雑下　はるかにて さてや …… 　永福門院内侍

新千 羇旅　いつのまに(?) さてや …… 月 …… 　従三位為子(?)

新続古 恋四　身をかくし(?) さてさこそは …… 人 恋と思ひこそせめ 　前大僧正 [illegible]

新千 雑上　… さてしもやまし …… 初霜 　藤原泰宗

新千 恋五　契りけり さてもいつはと …… 　後山本前左大臣(?)

新千 雑中　… さても …… 世中の …… 　大江 [illegible]

新拾 冬　槙の戸を さてもかくれぬ紅葉を …… 　昭慶門院一条

新拾 恋三　… さても …… 月とみる …… 　大納言 [illegible] 母

新拾 恋二　思ひきや さても …… 　六条右大臣

新拾 恋三　その風に さても消えなて 白露の …… 　前大納言 [illegible]

新後拾 神祇　かけまくも(?) …… 代々 …… 松風 …… 　法眼 [illegible]

新続古
新拾
五三
新々
新拾
冬
新続古
春下
風
春下
新後拾
春下
風
春中
新拾
春下
風
春中
新拾
五八

春のあけぼのさくら咲きぬらし松ふく風のかをるまにまに

さくらばなちりぬるかぜのなごりにはみなそこもなくなみぞよせける

さくらばなちりぬるかぜのなごりにはみなそこもなくなみぞよせける

さくらばなちりぬるかぜのなごりにはみなそこもなくなみぞよせける

さくらばなちりぬるかぜのなごりにはみなそこもなくなみぞよせける

さくらばなちりぬるかぜのなごりにはみなそこもなくなみぞよせける

さくらばなちりぬるかぜのなごりにはみなそこもなくなみぞよせける

さくらばなちりぬるかぜのなごりにはみなそこもなくなみぞよせける

さくらばなちりぬるかぜのなごりにはみなそこもなくなみぞよせける

あだ波の民
立阿上
貧窮問答
左近中将
雅
大伴の
右卜
源兼持朝
臣
院御
貧窮問答
源俊頼朝
貧窮問答
源人宗
無名
貧窮問答
藤原
家隆朝
臣

新千
五三
風
冬
新拾
教
新千
冬
新拾
秋
風
春中
新拾
詠
春下
新千
秋
風
春上
新拾
春上
新拾
春下
新拾
春上

鳥の声もさえかへる朝の風にうす雪とけてなのしそよ

さえかへる朝の風にうす雪とけてなのしそよ

さえかへる朝の風にうす雪とけてなのしそよ

さえかへる朝の風にうす雪とけてなのしそよ

さえかへる朝の風にうす雪とけてなのしそよ

さえかへる朝の風にうす雪とけてなのしそよ

さえかへる朝の風にうす雪とけてなのしそよ

さえかへる朝の風にうす雪とけてなのしそよ

平貞後
藤原等
源俊頼朝
臣
院御
おほ江の
教長
源雅光
朝臣
後京極
摂政前
太政大
臣
源具親
朝臣
後鳥羽
院御
源家長
朝臣
後鳥羽
院御
後堀河
院御
後京極
摂政前
太政大
臣
源和氏
朝臣
後嵯峨
院御
宮内卿
女房
後伏見
院御
従二位
京極
紀貫之
朝臣

彰拾 五下
彰拾 冬
彰拾 冬
風 冬
彰後 巡三
彰千 巡三
新千 雑下
彰続 秋下
彰よ 巡二
彰よ 雑下
彰よ 慶安 風 巡二

いたづら
さらでだに物わびしきを
そのよの
さゆる
さゆる
さゆる
さゆる
さゆる
さゆる
さゆる
さゆる
さゆる
さゆる
さゆる

中務 異本 訳
二条院 讃岐
山階入道 左大将
前大納言 為世
隆源朝臣
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉

彰千 尺
彰拾 巡二
彰拾 夏
風 雑中
彰後 冬
彰よ 雑下
彰よ 雑中
彰拾 秋下
新後 雑中
彰拾 雑上
彰拾 秋下
風 雑中

さらでだに
さらでだに
さらでだに
さらでだに
さらでだに
さらでだに
さらでだに
さらでだに
さらでだに
さらでだに
さらでだに

法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉
法印 源誉

あるく　三位通安
あれて　紫雲出製
さびしき雨の夜なれば
思ほゆれ　侍従忠
五五　宮内卿
さもうかりける人ごころかな
笑いわらへる　弐下大納
さもさ荻吹く風の音
微妙院
わが恋の　小宰相
さもうらみ侘ぬる袖の涙かな
彰考館 部中
彰考館 部上
風 五五
彰考館 部上
彰考館 部中
風 五三
彰考館 秋下
彰考館 旅
彰考館 氷
風 五三
彰考館 部上
風 五三
彰考館 部上

わするなよ　権大僧都
彰考館 部上　覚春
さびかくれゆく身の程ぞ
彰考館 部中　一条院讃岐
さもあらばあれ山ほととぎす
彰考館 部上　宮内卿
さもありぬべき名の月影を
彰考館 旅　宮内卿
さもしばしとや夕立の雲
彰考館 部上　雨園前大納言
さもあはれ秋はゆふべと誰かいひ置きけん
新千 詞中　前大僧正慈円
さもなくて
彰考館 五五　福光園寺前大納言為家
さもなくて過ぎにしものを宵の間の
彰考館 五五　権大納言為氏
さもなくて過ぎにしものを宵の間の
風 五二　二品法親王覚助
さもなくて過ぎにしものを宵の間の
彰考館 秋下　権中納言定家
さもなくて過ぎにしものを宵の間の
風 冬　権中納言長方
さもなくて過ぎにしものを宵の間の
風 五二　進子内親王
さもなくて過ぎにしものを宵の間の

二百廿八首

彩抜秋上　きてうへの
風　秋上　うわらもわけゆくかりのゑ　今集歌を変
彩な　秋上　さよ　ふけ染汁なくて人のをみの宿のタれ　注に位なる
彩抜　秋下　うわの雁れ初ほをきてほそ田もそうれまこ　廣義院
彩抜　秋下　きこしる　うわれ雁の名月をうこ　兼春院の歌
彩抜古　秋　陰うる義　うをの物こ与也　秋の
風　秋中　あまりの　うわれあるこ　秋の
風　秋上　落てもる　うわの一染れ点の中に秋のあれをうこ如き　今二条殿・仔等
彩続古　恋ム　うえてこう　うねて　前権殿　九本
風　雑上　をとの　うわれ　秋の
彩続古　雑下　さ夜深て　うわれをのこ沙ハ　注につふれ　万九ん
彩な　雑下　寒にく　うわれ　お中納言定家
彩抜　雑下　星人ゑ　うわれ　万九の
彩抜　雑上　ねてうく　うわれ　中務
風　恋五　知れぬ　うはて神　万葉相如
彩抜　雑中　うわこ人　うわれ　雑興法師
彩抜　雑下　秋もまた　うわれ限　大宰権帥
彩抜　雑上　にあまの　うわれ　基俊
彩抜　雑中　しれ常を　うはて　万葉冬隆
風　雑下　ふた人を　うわれ山　雑興法師
彩抜　雑下　ちる紅葉　うわれ　秋の
彩な　夏　見てをれ　うわれ流　秋の
彩続　雑上　ちる色杉　うわれ　秋の
風　雑下　里うく　うわれ　秋の
彩続　雑下　おみな　うはてしおく　秋の

新千 雑謌　老ぬれハ　うけしたくみん衰ゆ身をおもふらんなほ梅の花　大中臣能基朝臣

新拾 秋上　天河　うきくさきえの舟のつなてもあらぬ世をいくしほかへらん　前中納言定家

新拾 哀　松まくら　うきなくさまハ夫わかきの枕にて夜のやとりぬ　源俊頼朝臣

風 春下　うつろふの　うきみの山かけ見てそ折けるかなしきもの　読人不知

新続古 冬　冬されは　うきみの千里ハ木の間ちりしかの嵐をやさしみ見ん　権中納言雅縁

風 恋四　うつろひて　うきみの〓の花のしからみ衰てあやなくて　院御製

新拾 恋三　七夕ハ　うきみのあけの袖のしらけ〓れけさしもあるらん　赤染衛門

新続古 恋上　いつはりの　うきみのかけにからる露やこそ〓〓〓〓らん　左大臣

風 恋三　思ひやる　うきみのことはの〓〓やるゝ〓〓と又いつくらん　前大納言為兼

新拾 雑春　梅か香も　うきみの野への霞の〓〓らん〓〓〓〓とそ橘　権僧正典雅

風 雑下　露けさハ　うきみの〓れ〓〓〓〓〓ら神の〓〓〓〓　伏見院御製

風 雑下　みよしの　うきみの〓のやとりしるへせはなれ　中務卿宗尊親王

風 恋三　かハかはり　うきみの〓〓〓〓〓根人〓〓〓〓〓〓〓〓　伏見院御製

風 春下　年ふれハ　うきみの桜かえもこりやかさねの宿花のちる　伏見院御製

風 恋二　なかゆくに　うきみの夕色みておもひのしるしハ〓〓〓物かは　読人不知

風 雑下　おもふかな　うきみの〓〓〓世〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓　前中納言為相女

風 夏下　〓〓〓〓　うきみのしらかし〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓　後伏見院御製

風 雑中　かへさにハ　うきみの〓〓〓山の端の入日〓〓〓〓の〓〓　永福門院

風 恋四　さかりには　うきみの〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓　従二位為子

新拾 雑中　いにしへを　うきみの〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓　道昌法師

新続古 羇旅　よみ人も　うきみのしれたる〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓　従三位成仲

新拾 哀　あやしくに　うきみへの月ハさかなれと山〓〓〓〓〓〓〓　神祇伯顕仲

新続古 雑謌　おほえなく　うきみのわかにあはれ花たらしこの人〓〓〓〓　読人不知

新千 哀傷　きのふハ　うきみらんの物をやうち衣のまくて哀にいかてひとりぬる　前参議仲文

新千 秋下　千代かへこ　うくれはてぬるはよるべの人てこそ松の白露　後宇多院御製

新千 秋下　花すゝき　ふくる夜の嵐の夕風にみだれて袖の白露　伏見院御製

風 秋下　長月の　うくれさりける九重にいくめぐりとも秋の行　山階入道左大臣

新千 恋四　ぐぬなくて　うらみても思ひにまよふ我なるをとりてこそ　坂上郎女

風 恋一　青柳の　うすきいなかに何ゆへおもひかけゝらん人とこそあり　東三条入道摂政

風 恋三　それながら　うきは涙をもりやすらむ袖の上にこそ　永福門院右衛門督

新続古 羇旅　しほれて　うちしぐれつゝの嵐にけふもみ山を出るかな　よ人家

新続古 秋上　なにはへの　うきなかにわたるも尾上の松のうつりかな　一品法親王法守

新続古 秋　冬の夜の　うしろ山にかゝれる月を風とのみかはぬるかな　藤原仲実朝臣

新千 冬　おそさに　うつもれしみゆきの上にこゑのありけり　民部卿

新続古 恋中　きのふまで　うつゝにもわがの恋の名のみたつらむ　頓阿法師

新後拾 旅　河原の　うきゆき井にかけてもいかなる人に逢せ　浄人家

風 秋中　かりそめの　うらみなくてもみえぬ野辺の松もうつろひにけり　和泉式部

新拾 秋下　ちり初の　うきゆくまてゝ里人の衣や夜さむにかへるらむ衣かな　権少僧都能覚

新拾 恋中　わかれぬる　うこきてぬれともかなしてかゝる世の中に　山田法師

風 恋下　夢見ぬの　うきことにぬれそふ袖の露にかゝる枕にまたそゝく　郁芳門院宣旨

新千 哀傷　よしなしも　うきにいやまさりゆく人の思ひ出にぞ有ける　九条左大臣

風 恋下　きりくて　うきなかの枕の露ぞ身にしみて達ふ夜もなし　後宇多院御製

新千 恋一　あひそめし　うきぬるに今もたえぬるひとの涙とそなる　伏見院御製

風 雑　あさからぬ　うてぬるみてけりおもふ人の心の風の白雪　山本入道前太政大臣女

新千 恋二　ほのかにも　うきぬれしかはいかにしてなれ人のなけかぬ　後伏見院御製

新続古 恋二　あやしくも　うきぬ思ひこそそれのたよりとみえて心なき　源家長朝臣

新拾 旅下　草の葉や　うてゆく露とみえてもかりねの秋の涙かな　権大納言公家

新続古 冬　かけ置の　うらみても山深きあたりの人めもたえやはつ　入道一品親王尊道

彰松 亖三 ［…］
彰松 亖三 を乃ぼり
彰後 亖 ［…］
彰後 亖 おくれ
彰松 亖 一こゝろに
彰松 秋下 をうら山
彰後 冬 もの山
凡 亖 衣たゝむ
彰千 亖 ［…］
凡 亖 紛しく
彰松 秋下 亖 ［…］
彰千 亖 更ゝと
彰松 秋下 をのほり
彰千 亖 ［…］

凡 亖一 おくに
彰千 長傷 ［…］
凡 亖一 ［…］
彰松 亖三 せそゝ
彰松 亖二 うかれ
彰千 亖四 花まそ
彰な 秋 ［…］
彰後 亖 ［…］
彰松 秋中 亖 ［…］
彰な 秋中 九代ま
凡 亖六 ［…］
凡 亖三 ［…］

おくに 適合
三位陸教
おくれて
おくれて 亖
伏見院 山荘
活物ヲト
原主之女
おやゆて 乃有
おくれて 亖
原松実
信西 果寺
中文庫 文永

英房の筋 卿
右宰相 雅経
永福門院 源経任
平宣文
山ざと
中園入道 お文保院 ［…］
お文保院 ［…］
諫西公
佐佐木子

風 ありそ海よ
三 浪人等
彩綾古 賀
彩拾 秋 風
彩拾 神 吹
彩よ 毛下 ま
風 旅 ぬ
新千 春傷 ま
彩千 非中 ゆ
風 非上 き
彩綾古 賀 ぬ
彩綾古 三一 宮ふる
彩拾 歌 物は
風 非上 ゆきて

ありそ海よ浪人等
みちのくの安達太良山の
みねにふりおける雪の
ことしだに一味の雨をまたずして
ことをいのりてる袖に
ことをまちつけ花風乃
みてるこころ
ことしくいつ
ことをみあるまで
ことを月はやあらくに
ことをみあまで
ことうつしいのちの
ことをみて、
ことを梢こ

浪人等
安達太良の那
須乃山
一味の雨
祈りつる
平定宣
祈りつる
おほ伴正
満津
三位中将
基房卿
藤原経平
従二位
権大納言
兼

新拾 賀 君代乃
彩千 寿賀 かぎりて
彩子 三 あるら也
新拾 神 君となり
新綾古 三 なりなん
彩綾古 霜 あまりて
彩拾 三 はるもり
彩綾古 神 きみなり
彩拾 非下 春傷ま
彩綾古 非中 彩こし
風 非上 男山
彩よ 寿賀 ゆきて

君代乃かぎりて
かぎりなくて
あるら也
君となり
なりなん
あまりて
はるもり
きみなり
春傷ま
彩こし
男山
ゆきて

中院右大臣
通方
内大臣
通重
権大納言
通成
従二位
後山科
権大納言
言成卿
従二位
後山科
権大納言
言成卿
従二位
後山科
権大納言
言成卿

風
次
新拾
冬

新千
雑中

新後古
雑上

新後拾
雑中

新続古
雑中

新千
恋五

新拾
春下

新拾
冬下

新千
羇旅

新後拾
神

新千
恋二

新拾
恋三

新千
羇旅

新後拾
雑

新千
恋二

風
夏

新後
拾遺

新後拾
歌

百四十七首

風ふくる　ころもまじくうちすてる　浦のまなごや　秋の
月　　延喜御製
夏刀多　ころもでうすく　秋ちかき　風のたもとや　身にしむ
らむ　　三位隆教
秋ごとに　物をわするる　ものにはあれど　いつもおもほ
ゆる　三条西実隆
あるにまた　なしをぬるる　涙かな　袂の秋の　夜半の
月影　　実隆公妻

ゆ

新千 物名　いそなれは　ゆきの松れたる峰の雪さしもいとはてさらん　道喜親王

新千 秋　よそにくに　ゆふやみにあふ松虫の人まつよはゝさそふなるらん　前大僧正慈鎮

新続古 春上　なにしおは　ゆかりのいろしけるをあはれみやかへせなれ　前中納言定家

新千 羇旅　けふ尚も　ゆきまよふ松の風にたへん我乃身なら　遺智院

新拾 雑春　霞こめぬ　ゆくらくたゞの有明のあけ乃はるかなる　前内大臣実

新続古 雑上　絶乃浦や　ゆきの身をの紗にはる霞乃つみてしも　後小松院御製

新千 哀傷　かりても　ゆくへこゝ流れ月乃はかなき我なれ過にしやけれ　恵鎮上人

新続古 羇旅　西雲八丈　ゆくすゑもやと夜の月をうつる夜の中山　法印義宝

風 春下　わかくさ　ゆくへこゝ物思ふるかにほへをみそめてらん数え　壬生忠見

新千 春上　かくれても　ゆくへこゝ物をは柳乃糸にうちはへて山は霞つ　僧正遍昭

新続古 誹諧　大はらへ　ゆくはなかにふすれるやきなりける物ならむ　法橘範卜

新続古 冬　うかしつゝ　ゆく夏なとの有明の月をいくかしらんと見えらん　中園入道前太政大臣

新続古 雑上　たち方に　ゆくらもしらぬみちにたのむの雁乃声ならむ　法印兼道

新続古 恋五　わくらはに　ゆく方もなきの恋のりにはなほなに秋風の吹　前大僧正慈鎮

新拾 恋上　梅の香を　ゆくての袖もうつりてしるき宿の風にまつく　中務卿乃家

新千 雑下　きえやすき　ゆく水のりしめあるへき思ひしる秋の夜の月に　院御製

新千 恋二　ちきりおる　ゆくすゑもみち四方にいへぬ命乃ほとの旅路　法印定乃

風 恋一　たのむ人は　ゆく恋なるねと梅かにさそはれこゝにてはん　読人不知

新千 哀傷　なき人の　ゆくゑやそれもたつ雲に消えぬのゆくへとなれ　顕昭法師

風 恋八　いふかれと　ゆく末しらぬらむかたねさにこゝにてはみかはらん　前参議雅盛

新拾 羇旅　こく舟の　ゆく末しらぬ浪まよりうかこ浦やなにかたらん　後京極摂政前太政大臣

新拾 恋四　あるて八丈　ゆく末しらぬ村雲乃あふかりをなに頼まむ　定家法師

新千 恋二　わか恋を　ゆく末しらぬ吹夕への雲風にまかせてける　前権大納言実教卿

彩千 秋中
いづらハ
ゆくすゑたのもしくかゝれる行り

彩於 鄙
まろうと
ゆくへもしらずまどひてかく言ハるゝ

彩後ム 霧
やり橋や
ゆくへもしらずまどひてかく雁をこゝろてゞ

凡 旅
こゝろと
ゆくもしらぬ旅ぢ又事をとゝこゝろ

彩於 秋上
まねくて
ゆくもしらぬ旅ぢ人〳〵ものうなるれ落れ

彩な 五三
いくしぐ
ゆくしらぬ旅ぢのありのうれ

彩於 別
もるらつに
ゆくもこゝろも金銭乃なき

彩後ム 秋上
笹門り
ゆくものうれとものうるてなく

凡
交
みそ起ち
ゆくさの涙ちう秋風ちう

彩後ム 哀
きれ〳〵な
ゆくてもとゞめ一月乃光ことゝめこゝてる

彩な 羇旅
ふ秋そ
ゆくまいをこゝろのまゝにもてそ仮ちう

彩於 秋上
さらうもと
ゆくすゑみれしもなくうき乃旅

彩後ム 五三
なみいに
ゆくすゑたのもしくかゝれる神ちう

彩千 秋下
うみ〳〵
ゆく〳〵野〳〵こゝろてこゝめ書こゝ庵ちう

凡 秋上
夜の雨て
ゆく〳〵乃涙ちうてたゝ落のそゝてみちう

凡
冬
あれ初り
ゆく〳〵乃てい秋そうそ柳乃そ急てもちう

彩於 秋上
うはうな
ゆく〳〵乃てそと毎てくりふる雪乃

凡 雑中
なにゝなく
ゆく〳〵乃れそをみるまゝにあはれ

凡 五五
うち乃れ
ゆく〳〵乃てよう乃秋ゝ方ふるゝ

凡 雑中
雪のゆく
ゆく〳〵乃てれうくとなるあれ事ゝ山うちこゝ

彩な 秋下
かうなく
ゆく〳〵乃てのゝみそに月をほのか

凡 秋中
月をま
ゆく〳〵乃てれ秋風よ山の紫をれ初行乃ち

彩後ム 雑上
時やう
ゆく〳〵乃てれ秋乃ち方にれうくをれ山里

凡 雑上
ちう似て
ゆふ〳〵乃涙ちう在れ来てうく

彩後ム 五三
なみいに
ゆくすゑたのもしくかゝれる神ちう

彩千 秋下
うみ〳〵
ゆく〳〵野〳〵こゝろてこゝめ書こゝ庵ちう

凡 秋上
夜の雨て
ゆく〳〵乃涙ちうてたゝ落のそゝてみちう

凡
冬
あれ初り
ゆく〳〵乃てい秋そうそ柳乃そ急てもちう

彩於 秋上
うはうな
ゆく〳〵乃てそと毎てくりふる雪乃

凡 雑中
なにゝなく
ゆく〳〵乃れそをみるまゝにあはれ

凡 五五
うち乃れ
ゆく〳〵乃てよう乃秋ゝ方ふるゝ

凡 雑中
雪のゆく
ゆく〳〵乃てのゝみそに月をほのか

凡 秋中
月をま
ゆく〳〵乃てれ秋風よ山の紫をれ初行乃ち

彩後ム 雑上
時やう
ゆく〳〵乃てれ秋乃ち方にれうくをれ山里

凡 雑上
ちう似て
ゆふ〳〵乃涙ちう在れ来てうく

彩千 雑中
いづらハ
ゆくすゑたのもしくかゝれる行り

彩於 鄙
まろうと
ゆくへもしらずまどひてかく言ハるゝ

彩後ム 霧
やり橋や
ゆくへもしらずまどひてかく雁をこゝろてゞ

凡 旅
こゝろと
ゆくもしらぬ旅ぢ又事をとゝこゝろ

彩於 秋上
まねくて
ゆくもしらぬ旅ぢ人〳〵ものうなるれ落れ

彩な 五三
いくしぐ
ゆくしらぬ旅ぢのありのうれ

彩於 別
もるらつに
ゆくもこゝろも金銭乃なき

彩後ム 秋上
笹門り
ゆくものうれとものうるてなく

凡
交
みそ起ち
ゆくさの涙ちう秋風ちう

彩後ム 哀
きれ〳〵な
ゆくてもとゞめ一月乃光ことゝめこゝてる

彩な 羇旅
ふ秋そ
ゆくまいをこゝろのまゝにもてそ仮ちう

彩於 秋上
さらうもと
ゆくすゑみれしもなくうき乃旅

連礼ム 花
右京亮
咸陽宮
中天上絵
陸奥
山階入
左衛
おもひ
みそ
四条大納言
家雨卿
まれに
右京亮
おもひ
隆祢
おもひ
京極

彰於秋下
ゆふされば
風
那下
そよぐなり
彰な秋上
風ふけば
風
秋下
野もせ
風
秋下
月見ゆる
彰千秋上
ゆふべの
風
冬
彰続古契
ゆふされば
彰続秋下
ゆふ
風
夏
彰於夏
ゆふ
風
夏

彰於夏三
ゆふされば
彰於春下
ゆふ
彰続春
ゆふ
彰な夏三
ゆふ
彰於夏三
ゆふ
彰於雑上
ゆふ
彰続雑
ゆふ
彰な夏三
ゆふ
彰於雑下
ゆふ

彰於秋下
ゆふされば
風
那下
そよぐなり
彰な秋上
風ふけば
風
秋下
野もせ
風
秋下
月見ゆる
彰千秋上
ゆふべの
風
冬
彰続古契
ゆふされば
彰続秋下
ゆふ
風
夏
彰於夏
ゆふ
風
夏

彰於夏三
ゆふされば
彰於春下
ゆふ
彰続春
ゆふ
彰な夏三
ゆふ
彰於夏三
ゆふ
彰於雑上
ゆふ
彰続雑
ゆふ
彰な夏三
ゆふ
彰於雑下
ゆふ

新千 冬　わかれ路の　ゆふ暮るさえかゝり何まちし方に鳴かかり　前大僧正覚俊

新千 雑上　なれし夜や　吹く風たえぬに[illegible]の行くてあるし吹かし　前権僧正雲雅

新千 冬　吹く風に　吹く風たへず[illegible]みるとはかりに音の鳴かかり　正三位隆教

新千 恋二　いつに春　吹く風あらしみれにしみ[illegible]ならたえな　源清経

新拾 春上　うれしさは　吹く山かせのいつくにも山のもとにて月をまつ　御製

新続古 春下　ふたゝびと　吹く山かせに[illegible]風とてや[illegible]　左大臣実雄

風 雑上　あまやの　吹くかぜの都をそてに鳴[illegible]いまかし　藤原家経

新拾 雑中　さみだれは　吹く[illegible]山風ふく人の[illegible]　藤原隆[illegible]少将

新千 羇旅　今ふくも　吹く[illegible]なくてもやしや[illegible]　小侍従

新拾 恋三　[illegible]　吹くかれにさしかゝりのいとも[illegible]物を[illegible]　入道二品親王法守

新拾 恋三　さわぎぬに　吹く[illegible]のこもいかへ[illegible]　瑞子内親王

新続古 羇旅　もろこしの　吹くこゝろは[illegible]の[illegible]　従三位忠房親王

新続古 羇旅　こしぢや　吹く[illegible]風の[illegible]　円光院入道前関白太政大臣

新続古 雑上　こしぢへは　吹く[illegible]　中宮大夫家房

新拾 羇旅　都田や　吹くてうれし人休の[illegible]　従二位家隆

新拾 羇旅　[illegible]　吹く[illegible]　花園院御製

風 冬　桁[illegible]　吹く風[illegible]日の[illegible]　後伏見院少将

新拾 秋上　[illegible]　吹く[illegible]秋風[illegible]　従二位隆教

新続古 秋下　[illegible]　吹く[illegible]松原の人に[illegible]　前参議雅有

風 雑中　[illegible]　吹く[illegible]　山階入道左大臣

風 雑上　みちなき　吹くしたかけし非山の[illegible]　従二位氏久

新千 雑上　[illegible]　吹くあらし風そて[illegible]　平貞宗

新続古 冬　冬さみの　吹くあらしも[illegible]の枯葉の[illegible]　法印定為

新拾 夏　[illegible]　吹く[illegible]風[illegible]　入道二品親王覚誉

風 雑上　嶺さむし　ゆふ日はれてかきくもらし雲乃尾上に風ふきぬらし　進子内親王

新拾 雑上　松の色乃　ゆふ日かくれは吹はらふ浪のよすかに松乃声かそこゑ　慶運法師

風 雑上　かすみゆく　ゆふ日さす遠山に雲もなかれゆく旅人の行　守子内親王

新後拾 秋上　うきたなる　ゆふ日の影は乃秋かせ吹わたる夕立の山のと　後光明照院前関白左大臣

風 雑上　霧のまの　ゆふ日のうつろふ空に雲かゝる山乃木ぬれに　院御製

風 秋上　河ふかき　ゆふ日の柳こしなひてさえ花乃流れて松風ぞふく　太上天皇

風 秋上　色うすき　ゆふ日の山にかたふきて秋よりも紀の日くらしの声　従二位為子

風 雑中　川乃それ　ゆふ日の移さしやらて月まつ乃こゝろ　徽安門院一条

風 秋中　霧ふかき　ゆふ日の影乃山こしにうつろひもみちぬる一つら　院御製

新拾 冬上　ふる雪の　ゆふくれてたつ風のつよさやまたにうすきかん　権大納言義詮

新拾 冬　いつしかに　ゆふ日にかはりなかりけん人の杣山なの名残　従二位為子

新後拾 雑秋　山ふかき　ゆふさるゝ木乃下風こそのせ寒き日数かな　冷泉為相

新千 冬　ふり積る　ゆふ日に見えてさえぬる山の葉乃けふくるゝ乃月　権大納言忠季

風 雑上　あはれなり　ゆふ日に日数は松乃花をりつゝなれし山陰乃形　太上天皇

新後拾 雑春　ちる花の　ゆふ日はうつりてさかりすきやゆふたちにさく　源頼隆

新後拾 雑下　雲こめて　ゆふとめりてしくれもすめる秋の月　権大納言公光

新千 春下　ことわり　ゆふこめてやみをしぬる花乃下桜を吹風の吹　入道前太政大臣

新千 冬　降はてぬ　ゆふ日かさねてみるしめの山渡はしらゝ一日殿　前大納言為氏

新續古 冬　らくしけは　ゆふ日そそしはらは流れ松人乃音信え　中納言為藤

新後拾 恋二　おもくは　ゆふ入るさへも見かはらぬ松の夏風よいち　従二位兼子

新續古 夏　津の国の　ゆふかけてみる山桜ちりのまゝにさけの卯花　後普光園院前関白左大臣

新續古 秋　雲あらく　ゆふふえのしれてにゐるまとかすみの月　従二位為子

風 冬　山ふかき　ゆふちたつる夕ふりたる庭竈乃たつ人なり　前中納言雅孝

新千 冬　里の田に　ゆふ乃中にも吹かりやまらの音は秋さりしこ　前左京権大夫

風 夏上　すゝしさは　ゆふしけかくに山へてきこゆなる松原にかゝり　今上御製

新拾 春上　谷の戸を　ゆふも深しけやらに出てさらになきのみしに　前大納言為氏

新千 恋一　いまよりは　ゆふまちそへて心弱くいとゝ身にしみる人日遠　よみ人しらす

新続古 釈教　なかれての　ゆふへつきてさへ待つかしとする秋すかゝらさらせし　小辨

新続古 恋四　よそにのみ　ゆふへをおもひなれとも見ゆるそれ山の端の月　藤原基経

風 雑中　これの憂き　ゆふへさへやはおもしも又にさかひこゝろのみ深し　太上天皇

新千 恋二　かなしきの　ゆふ志けりの契にて袖そのなみたなさらめてなほ　二品法親王覚助

風 恋一　わかれ行　ゆふはあらし面影の行くかたにてゆふぬかり　道平門親王

新拾 恋四　逢事は　ゆふにぬれて床の上に涙かりそこてみりける　惟明親王

新続古 恋三　あふことは　ゆふまちことにわかゝくもれて心たえてさらを　俊恵法師

新千 冬　うたゝねの　ゆふやみかせにほとまれはかりて初しもさえぬ　六条右大臣

新拾 恋一　ねやのうへの　ゆふにきえかへる命かや人もゆふさの涙ぬれん　祝部成豊

新続古 冬　ねやのうへの　ゆふまも秋のやとりせん暁かたの袖ぬらす人の霜　勝定院贈太政大臣

新続古 雑下　さゆる夜を　ゆふさはかりねのまくらの夢はみるとなくとも寝ぬよし　源親長朝臣

新拾 雑下　うけれとも　ゆふまもなにとてかゝるの音かはりにぬれてそるさき　権少僧都宣円

新拾 恋三　うけれとも　ゆふまも何れ身のまになれそこことしためてそ　太宰大弐重氏

新拾 恋二　うけれとも　ゆふまもみてぬ程そかなしきゆめちの下紐のとくさ　大中臣能宣朝臣

風 恋三　とかはする　ゆふちきり見ゆる逢ことをたのむとしるさき　藤原懐世朝臣

新拾 冬　夜の庭の　ゆふちきりなくほとおもはさめそし夢の枕ぬれつゝ　権少僧都心覚

新拾 恋四　みてみぬ　ゆふちかけ縁をそへつゝそのころ哉　行遍法師

新千 恋二　逢とみる　ゆふけさのまにもれはやさまたゆかし　前大納言為家

新続古 雑下　そのかくも　ゆふまへてとゝのふるもの柱の松かせ　前大納言為兼

新千 冬　いく里の　ゆふまかけてもかゝるさすのかさらん　前参議雅有

新続古 釈教　なかれての　ゆふけ立ちさかせてそめ人をたのまん　高辨上人

新続古 恋下　いりみし　ゆめかとぞ思ふねざめして昔を思ふあかつきの空　左近中将公衡

風 恋下　はかなしや　ゆめかとよふるしきたへのまくらにのこるおもかげもなし　二階宗成卿下

新拾 恋四　むば玉の　ゆめのあふせをたのみても一夜にてやみなんといはん　性威法師

風 恋下　思ひねの　ゆめよりほかはたのまれずさそふる昔なれや　藤原宗秀

新千 恋四　逢ことは　ゆめよりほかのちかしのびにみえよかし如無　前大納言為有

風 恋四　あぢきなく　ゆめぢにみえてねやもさびしねよの庭は面影もして　永福門院内侍

新続古 恋中　在中を　ゆめぞとさとりてはいとふ心のおどろきはてぬ　心海上人

新千 恋二　たのまじよ　ゆめのうちの庭のかいさゝやくわればかりとも　源親範

新千 恋三　人目らく　ゆめのうき世の物をまよふさはるゝかひなければ　前大納言為定

新拾 恋一　恨とぞかし　ゆめのうちの面影はたゞいつはりかなしきぞうき　従二位為氏

風 恋二　まどろみて　ゆめのなみだはぬるゝかけしもまさる物と思へ　永福門院内侍

風 恋二　そなたのの　ゆめのかよひぢさめぬまに又みえかしも逢みてしかな　永福門院

風 恋下　なかなかに　ゆめのうちにてみるほどはつれなきこともいはでやみなん　権僧正永縁

新拾 恋一　おもかげの　ゆめの通ひ路たえてしてさらに枕に面影　皇太后宮大夫俊成女

新千 恋四　一夜みし　ゆめのなごり枕にあはれ猶なほ恋しかるらん　前内大臣

新千 恋二　思ひねの　ゆめの枕にちぎりしもさめてはもとのはかなさ　平時村朝臣

新続古 恋四　逢とみる　ゆめやむなしきうつゝかとねもはかなの方にて　源持之朝臣

新千 恋下　世の中の　ゆめにふかくちぎりけるうつゝのゆめと思ふかな　大江廣房

新拾 恋四　逢とみる　ゆめも見ぬれはうつゝにまたなきにけり　大蔵行宗

新続古 恋二　たのまじな　ゆめもうつゝの面影を逢みてなき人をかたらん　平行氏

新千 哀傷　夢人の　ゆめのごとくにみてのみぞふる世のならひをも　祝部忠長

新拾 恋下 哀　なぐさめて　ゆめのかよひとたのむや思ひねのゆめとなりけん　藤原為秀朝臣

新拾 夏　五月やま　ゆめは浦ふりにしそかは人の庭やまだあかぬあけがたの　宗性法師

新和歌類句集

さ

風賀 さえとおり 乳の道ゝ 春花國そあきつ 冬至寒
新千 ゝとゝ葉み 三ゐのくそ 波乳 共敲法師
尺
新撰 あさ三せハ 四里ゐ 氏つな 橋ゐ 尺 津守國冬
雑上
秒後古 いそもく 人ゝ市人 さくら 久三 ゐ 民ゐ 朋
夏
秒千 せり 人ゝ 水よ 雲 ゝけと 祢ゝん 夜納言 夏
夏
風 そつじ 月とゐ 欲ゝん 芳隆利 花院
雑下
秒拾 尺さ山 ゝとゝ 川の 世 川 ゐ 家長 統
秋
秒千 尺くまの 川のさ 川の 世 川 ゐ 帝図 白
雑中
秒後古 人ゐみよ 世ゐ 尺 雲教 谷
雑中
秒後古 ゝあさそ 山の 橋ゐ 秋 民
秋下

風雅中　秋上
秋拾遺　部去
秋續古　秋拾遺
羈　秋拾
天　秋續古
風　羈
猴　秋拾遺
秋下　秋拾遺
秋千　秋下
秋下　秋拾遺
秋拾遺　秋續古
秋續古　羈
羈　風
風雅上

久方の月なき夜半の秋風は
さえてさやけき心ちこそすれ　　藤原俊成朝臣

さびしさの秋よりまさる夕暮は
いかにのまさる物思ふらん　　皇太后宮大夫俊成

いにしへの秋を恋ふとはなしにも
そぞろに袖のぬるる比かな　　前大納言公任

ながめつつ思ふもさびし久方の
月の都も秋の夜の空　　藤原定家朝臣

冬ながらありてふ春のいつしかも
霞みわたれる夕暮の空　　平行時

うき事をなさけもしらぬ山風に
ただ一声を残す郭公　　藤原雅経朝臣

ほととぎす鳴くや五月のあやめ草
あやめも知らぬ恋もするかな　　権中納言長方

夕月夜さすがに軒の荻の葉の
そよと許りの秋風ぞ吹く　　従二位家隆卿

さびしさは其色としもなかりけり
真木立つ山の秋の夕暮　　寂蓮法師

今よりや引きこもりなん山里の
真木の戸ざしに秋風ぞ吹く　　権中納言定家

秋拾遺　羈旅
秋拾遺　秋下
秋拾遺　秋下
秋拾遺　秋下
秋拾遺　秋上
秋千　秋下
秋千　秋下
秋千　物名
秋千　秋下
秋拾遺　秋下
秋拾遺　羈旅上

名にしおはば逢坂山のさねかづら
人にしられでくるよしもがな　　三条院御製

ちぎりおきしさせもが露を命にて
あはれ今年の秋もいぬめり　　藤原基俊

わくらばに問ふ人もがな宮城野の
もとあらの小萩露をもらみて　　源宗于朝臣

君こずは袖のみぬれて明けやすき
秋の夜ながら長からぬ恋　　皇太后宮大夫俊成

秋風にたなびく雲のたえまより
もれ出づる月の影のさやけさ　　左京大夫顕輔

ほととぎす鳴きつる方をながむれば
ただ有明の月ぞ残れる　　後徳大寺左大臣

さびしさに宿を立ち出でてながむれば
いづくも同じ秋の夕暮　　寂蓮法師

もろともにあはれと思へ山桜
花より外に知る人もなし　　前大僧正行尊

夜もすがら物思ふ比は明けやらぬ
ねやの戸ぐちに鳴く蟋蟀かな　　後徳大寺左大臣

秋風の吹くにつけても人の見む
と思ふぞ物は悲しかりける　　皇太后宮大夫俊成

秋風の吹きにし日よりおく露の
いかにせよとか色の変はらん　　藤原敦家朝臣

秋風の吹くにつけても思ひ出でよ
人もとまらぬ宿のまがきを　　中務

新拾貿　新続古下　新千載　風雅　新中　新続古　新後拾　新拾貿　新千載　新後拾　新千載　新後拾

秋山の道を今もそさうくよ　東歌の心を
さて散りぬる夏衣　入道宗親王家百
花ごとにありそうき世を風そく　桂宮通敦
新千載　風雅　新中　新続古　新後拾　新拾貿　新千載　新後拾　新拾貿　新千載　新後拾

花ごとにありそうき世を風そく　桂宮通敦
さうの山ふかみそめしを紅を　二条為重
身をつてあまつそ知る　桂宮通敦
さうれ山雲にたちまよふ夏衣　深満元顕
初冬よ秋とかこつの夏衣　後二条院
さうきたるきぬのうらさへ秋風に　前権大納言雅世
こもる山松をさ秋なかる夏衣　前権大納言雅世
さうみよ山松をさ秋なかる夏衣　前権大納言雅世
さうきたるきぬのうらさへ秋風に　前権大納言雅世
さうこもる山松をさ秋なかる夏衣　前権大納言雅世
さうみよ山松をさ秋なかる夏衣　前権大納言雅世

秋山の道を今もそさうくよ　東歌の心を
さて散りぬる夏衣　入道宗親王家百
花ごとにありそうき世を風そく　桂宮通敦
新千載　風雅　新中　新続古　新後拾　新拾貿　新千載　新後拾　新拾貿　新千載　新後拾

花ごとにありそうき世を風そく　桂宮通敦
さうの山ふかみそめしを紅を　二条為重
身をつてあまつそ知る　桂宮通敦
さうれ山雲にたちまよふ夏衣　深満元顕
初冬よ秋とかこつの夏衣　後二条院
さうきたるきぬのうらさへ秋風に　前権大納言雅世
こもる山松をさ秋なかる夏衣　前権大納言雅世
さうみよ山松をさ秋なかる夏衣　前権大納言雅世
さうきたるきぬのうらさへ秋風に　前権大納言雅世
さうこもる山松をさ秋なかる夏衣　前権大納言雅世
さうみよ山松をさ秋なかる夏衣　前権大納言雅世

風雅 夏　猿さけぶなりせの夜ごゑを　さよ深て秋風かよふ蛍のかはの　円光院入道前関白太政大臣

新拾 雑下　声すみかさ須磨の浦よ　さ夜深て月のひかりもうつろふか　小野小町

新続古 冬　わしかくせを嵐の風　さ夜深て鳴く千鳥すくなくもあるかな　参議雅経

風雅 冬　山の井の袖の月かな　さ夜深てさえ吹き風に川の瀬　前大納言為家

新拾 雑口　かすかそも宿に月の　さ夜ふけて入る袖に月おりの見え　達智門院

新拾 雑三　更て又まつことやいくつかの　さ夜衣かへるも草の声さけよ　権大納言長雅

風雅 雑二　中くまぬ嵐のあさり物は　さ夜衣かへしも寝覚み月をまほし　前右近中将資盛

新千 秋下　くく人の袖も露けし　さ夜衣ねばかへすかことさまの庭の露　後光明照院前関白

新続古 雑三　暮かてあひ見るなるる　さ夜ふけてあふみぬほかに秋を哉て　六条内大臣

新葉 雑上　山いまの露とのかな　さ夜更て鳥の声の夢はれくどく　読人しらず

新千 秋上　うろきて枕そくん物　さ夜更て寝の耳さかな心よくさたに　大納言典侍

新拾 秋下　あくなくあへ遍をや　さ夜更てあくるも惜む月ようやに　三条為連

新続古 冬　さてはかく猶寝覚の床の　さ夜時雨過ぬるをもぬるる袖　前僧正満意

風雅 夏　山かぜもやむ後は寝はいく　さゆるそでにくる入涼さを夕あかれて　前大納言為家

新続古 夏　夜さめぬ寝の夢ならぬは　さゆるそで寝覚すめるる時ものかは　権大納言資名

新千 雑中　いたはて風屋かる月の　さゆも尾上にかかる袖のまくらを　前参議雅有

新拾 冬　嵐吹き時の世て　さめるまくまたきに夜の雁に月るる　三条入道前太政大臣

新拾 雑　冬とそそ時雨にさくも　さめのをき世は川よりはやめぬる　元可法師

新拾 冬　さそふ雲の由さは　さめの間に時雨風はかなり　前中納言為藤

新続古 冬　法の舟もなき浦つもる　さめなく雁のかいたものかは　前大僧正道意 寺

新拾 雑　物思ふ宿もややそ　さめつく行くさもかの袖の旅人　源詮直

新拾 離別　又いつとかはんとと　さめつての夜のさまをさまそ見　大僧正行尊

新拾 雑　人伝も月の光まよ　さそ声て雲の山路にてさえ　寂蓮法師

新拾 雑　あり明の影をよしるかな　さそ更て夜ふく出る嵐の舟　崇賢門院

新千 秋上
呉竹のよとけの窓に さそはれて月もまちつる秋風そ吹　前大僧正道性

新拾 哀
わすれけんよの夜な月に さそはれてもいつさへにかそへつゝ　妙宗法師

新続古 秋上
秋風よまつかみさゝら人 さそはれておきもあまる秋のよの露　前参議雅有

新千 春下
雪となる嵐の末に さそはれて雲にゆかぬ空さそふる　前中納言経継

新拾 恋一
人はまた心もうりみ さそはれてゆくふるさちは子ころ　中園入道前太政大臣

新続古 冬
あられふるおはらの里よ さそはれて又山あらし夕ちゝまよふ　宗久法師

新拾 冬
山嵐のふくたれのみん さそはれて木の葉ゆくへも跡もみつ　源友經

新続古 秋上
嵐ふく岸のかつき雲 さそはれて心もそらにすめる月かけ　後光厳院御製

新続古 雑中
いその浦や雲井の空よ さそはれてあゆく主の月を鳴也　宗尊親王

新拾 雑中
朧はおいのみのうみ さそはれて松の緑も色もかはる也　賀茂雅久

新拾 冬
霜さへにまたやらた さそはれて人かせまつ須磨の白雪　従二位為理

新拾 雑秋
みやこ人のいそくらんみ さそはれてとくるもやらぬ　前関白

新続古 雑中
池くりの浦浪 さそはすはかひなくもかへるよる　左大臣

風雅 雑上
春風の心のまゝにみ さそへともつきぬ梅か香　藤原教兼

新拾 春下
宿ことさそあるふ さそふらんあまりあるまでちる桜か　冷泉前太政大臣

風雅
消えた雨の月の さそふらん雲にうつる猿のなく　安嘉門院四条

新続古 冬
枝の手木の葉をいつよ さそふらん浮井にたえぬ岸の松風　従二位為信

新千 冬
吹風やよそのもみぢを さそふらん松の下てる庭の木の葉　僧正光忠

新拾 冬
いはくらの吹く風 さそふらん梢も志らぬ庭の木の葉　権大納言房経

新拾 冬
木の葉ちるあさけの風や さそふらん時雨よりぬるき雲の色　三品法親王覚助

新千 雑上
春の里は花と嵐を さそふらめあかりへつきさそふる　丹波長有朝臣

新拾 雑下
身のうき里と山嵐へ さそふらく雲の里と花ことまぬ　読人不知

新拾 雑上
うき草のさそふ世は さそふあらいそもしらぬいかなる　婚子内親王

新拾 春上
春さくはちるなり さそひてやしらぬ雲まのかちる　御製

新撰冬　こゝろあてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花　凡河内躬恒

新千冬　年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし　素性法師

新撰秋上　花見れば心さへにぞうつりける色にはいでじ人もこそ知れ　紀貫之

新撰雑上　都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関　紀貫之

新撰夏　時鳥なきつる方をながむれば只有明の月ぞ残れる　紀貫之

新撰秋下　吹く風を勿来の関と思へども道もせに散る山桜かな　素性法師

新撰雑上　わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり　喜撰法師

新撰恋中　今はとて忘れ草をも摘みしかど思ひ忘るゝ時しなければ　凡河内躬恒

新撰秋下　秋風に山飛び越ゆる雁がねは恋ひつゝ来鳴く声遠ざかる　紀友則

新撰恋上　ちはやぶる神の斎垣にあらねども越えまくもかしこき関の荒垣　紀貫之

新撰雑上　人はいさ心も知らず古郷は花ぞ昔の香に匂ひける　紀貫之

新撰雑上　白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住むべき世にこそありけれ　僧正遍昭

新撰雑上　天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも　阿倍仲麻呂

新撰雑上　わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり　喜撰法師

新撰冬　こゝろあてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花　凡河内躬恒

新千冬　年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし　素性法師

新撰秋上　花見れば心さへにぞうつりける色にはいでじ人もこそ知れ　紀貫之

新撰雑上　都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関　紀貫之

新撰夏　時鳥なきつる方をながむれば只有明の月ぞ残れる　紀貫之

新撰秋下　吹く風を勿来の関と思へども道もせに散る山桜かな　素性法師

新撰雑上　わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり　喜撰法師

新撰恋中　今はとて忘れ草をも摘みしかど思ひ忘るゝ時しなければ　凡河内躬恒

新撰秋下　秋風に山飛び越ゆる雁がねは恋ひつゝ来鳴く声遠ざかる　紀友則

新撰恋上　ちはやぶる神の斎垣にあらねども越えまくもかしこき関の荒垣　紀貫之

新撰雑上　人はいさ心も知らず古郷は花ぞ昔の香に匂ひける　紀貫之

新撰雑上　白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住むべき世にこそありけれ　僧正遍昭

新撰雑上　天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも　阿倍仲麻呂

新撰冬　こゝろあてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花　凡河内躬恒

新千冬　年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし　素性法師

新撰秋上　花見れば心さへにぞうつりける色にはいでじ人もこそ知れ　紀貫之

新撰雑上　都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関　紀貫之

新撰夏　時鳥なきつる方をながむれば只有明の月ぞ残れる　紀貫之

新撰秋下　吹く風を勿来の関と思へども道もせに散る山桜かな　素性法師

新撰雑上　わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり　喜撰法師

新撰恋中　今はとて忘れ草をも摘みしかど思ひ忘るゝ時しなければ　凡河内躬恒

新撰秋下　秋風に山飛び越ゆる雁がねは恋ひつゝ来鳴く声遠ざかる　紀友則

新撰恋上　ちはやぶる神の斎垣にあらねども越えまくもかしこき関の荒垣　紀貫之

新撰雑上　人はいさ心も知らず古郷は花ぞ昔の香に匂ひける　紀貫之

新撰雑上　白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住むべき世にこそありけれ　僧正遍昭

新撰雑上　天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも　阿倍仲麻呂

新撰冬　こゝろあてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花　凡河内躬恒

新千冬　年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし　素性法師

新撰秋上　花見れば心さへにぞうつりける色にはいでじ人もこそ知れ　紀貫之

新撰雑上　都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関　紀貫之

新撰夏　時鳥なきつる方をながむれば只有明の月ぞ残れる　紀貫之

新撰秋下　吹く風を勿来の関と思へども道もせに散る山桜かな　素性法師

新撰雑上　わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり　喜撰法師

新撰恋中　今はとて忘れ草をも摘みしかど思ひ忘るゝ時しなければ　凡河内躬恒

新撰秋下　秋風に山飛び越ゆる雁がねは恋ひつゝ来鳴く声遠ざかる　紀友則

新撰恋上　ちはやぶる神の斎垣にあらねども越えまくもかしこき関の荒垣　紀貫之

新撰雑上　人はいさ心も知らず古郷は花ぞ昔の香に匂ひける　紀貫之

新撰雑上　白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住むべき世にこそありけれ　僧正遍昭

新撰雑上　天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも　阿倍仲麻呂

風上
さらぬだにや行く風の
通ひ路も松木陰の
さびしさに枯葉ふきしくころなれや
院一条
風冬
山里よ我ならのみと思ひしに
貧見院宮
風忠岑
秋千
猿ともろともに吹く嵐かな
廢中納言家
風秋中
秋千
庵さへ荒まくほしき月の
彩抜
風冬
もる雲さへぞ通ひまれなる
新抜
風忠三
秋千
雲吹きとくな秋の夜の月
新後古
風忠文
秋上
山ざとは誰も来ざりし冬の朝
新抜
風冬
おく霜の白きを見ても訪ひぬべし
新後拾
秋上
あくる夜の庭きよ掃く風
新抜
風忠一
秋千
あふてはかなきよもの
秋千
吹きぬこれの山の秋
秋千
冬
もる月の夜ごとすさび
秋千
神さびてめぐる年波
秋千
雜下
いたづらなりとをきみよ人
秋抜
羇
宿るさへうきたびの
新後拾
忠一
秋千
袖よりぬれそめにけり
秋抜
新抜
忠文
あふ坂よりうき波の
新抜
秋上
まつ虫のこゑかきよく

風上
さらぬだにや行く風の
通ひ路も松木陰の
さびしさに枯葉ふきしくころなれや
院一条
風冬
山里よ我ならのみと思ひしに
貧見院宮
風忠岑
秋千
猿ともろともに吹く嵐かな
廢中納言家
風秋中
秋千
庵さへ荒まくほしき月の
彩抜
風冬
もる雲さへぞ通ひまれなる
新抜
風忠三
秋千
雲吹きとくな秋の夜の月
新後古
風忠文
秋上
山ざとは誰も来ざりし冬の朝
新抜
風冬
おく霜の白きを見ても訪ひぬべし
新後拾
秋上
あくる夜の庭きよ掃く風
新抜
風忠一
秋千
あふてはかなきよもの
秋千
吹きぬこれの山の秋
秋千
冬
もる月の夜ごとすさび
秋千
神さびてめぐる年波
秋千
雜下
いたづらなりとをきみよ人
秋抜
羇
宿るさへうきたびの
新後拾
忠一
秋千
袖よりぬれそめにけり
秋抜
新抜
忠文
あふ坂よりうき波の
新抜
秋上
まつ虫のこゑかきよく

さく花をみてよめる　大納言師頼

ちる花をいとふ風よりこころせよ　権中納言俊忠

さく花もちるもあまたにみえつるを　白河院御製

さく花のあかぬ色にもあるかな　権大納言家隆

さく花のちるをいとはぬこころこそ　権大納言俊秀

さく花やまづ春風のこころをも　平忠度

さく花やみやこの春をしるらん　従四位上行能

さく花やいかなる春の雪ふりて　従二位家隆

さく花やおなじ雲とも見えぬらん　右大臣

さく花やいつの世までかくもあらん　後鳥羽院

さく花はいまも昔の雪ふりて　権中納言雅経

さく花もちるもあまたにみえつるを　従二位家隆

さく花はいま一枝をあすもがな　源道済

さく花はちるくる春よ幾千代　皇太后宮大夫俊成女

さく花をみてよめる　大納言師頼

ちる花をいとふ風よりこころせよ　権中納言俊忠

さく花もちるもあまたにみえつるを　白河院御製

さく花のあかぬ色にもあるかな　権大納言家隆

さく花のちるをいとはぬこころこそ　権大納言俊秀

さく花やまづ春風のこころをも　平忠度

さく花やみやこの春をしるらん　従四位上行能

さく花やいかなる春の雪ふりて　従二位家隆

さく花やおなじ雲とも見えぬらん　右大臣

さく花やいつの世までかくもあらん　後鳥羽院

さく花はいまも昔の雪ふりて　権中納言雅経

さく花もちるもあまたにみえつるを　従二位家隆

さく花はいま一枝をあすもがな　源道済

さく花はちるくる春よ幾千代　皇太后宮大夫俊成女

さく花をみてよめる　大納言師頼

ちる花をいとふ風よりこころせよ　権中納言俊忠

さく花もちるもあまたにみえつるを　白河院御製

さく花のあかぬ色にもあるかな　権大納言家隆

さく花のちるをいとはぬこころこそ　権大納言俊秀

さく花やまづ春風のこころをも　平忠度

さく花やみやこの春をしるらん　従四位上行能

さく花やいかなる春の雪ふりて　従二位家隆

さく花やおなじ雲とも見えぬらん　右大臣

さく花やいつの世までかくもあらん　後鳥羽院

さく花はいまも昔の雪ふりて　権中納言雅経

さく花もちるもあまたにみえつるを　従二位家隆

さく花はいま一枝をあすもがな　源道済

さく花はちるくる春よ幾千代　皇太后宮大夫俊成女

さく花をみてよめる　大納言師頼

ちる花をいとふ風よりこころせよ　権中納言俊忠

さく花もちるもあまたにみえつるを　白河院御製

さく花のあかぬ色にもあるかな　権大納言家隆

さく花のちるをいとはぬこころこそ　権大納言俊秀

さく花やまづ春風のこころをも　平忠度

さく花やみやこの春をしるらん　従四位上行能

さく花やいかなる春の雪ふりて　従二位家隆

さく花やおなじ雲とも見えぬらん　右大臣

さく花やいつの世までかくもあらん　後鳥羽院

さく花はいまも昔の雪ふりて　権中納言雅経

さく花もちるもあまたにみえつるを　従二位家隆

さく花はいま一枝をあすもがな　源道済

さく花はちるくる春よ幾千代　皇太后宮大夫俊成女

秋綾古
書下
風
文
新千
哀
新千
書上
風
書中
秋綾古
書下
秋接
書下
秋千
書上
秋千
新上
秋接
書下
風
新上

さえよりそふ山のかけはしこえぬとも
まつもちる今をかぎりの秋ならば
ちるからよ秋をぬるくとめぬ紅葉
月影もしぐれもいまよ山ふかく
雪とだにいはぬうちよりふる里を
ふるさとの夢もうつつもおなじ枕に
夢とてもうつつもおなじ枕にも
あやなくもうつつもおなじ枕にも
あやなくもうつつもおなじ枕にも
あやなくもうつつもおなじ枕にも

楊花集 清水谿秀文
楊花集 慶政上人
楊花集 小野宮参議
楊花集 高倉前関白
楊花集 白川院宮内
楊花集 按察使院親
楊花集 後鳥羽院
楊花集 三条入道前太政大臣
楊花集 藤大納言家
楊花集 法通法師
楊花集 奥平親王
楊花集 中将

風
書下
新千
書下
秋接
書上
秋千
書上
秋千
書下
秋接
書下
風
書下
秋接
書上
風
哭
秋接
書下
秋千
書下
秋綾古
書下

秋はとてもとてもかへらぬ人を
あやなくもうつつもおなじ枕にも
一夜をあすかもちくさの露
こころもて雪ふりしきぬ夜半にも
夢にのみてありふる里
書捨てしあとの形見の
雪ふかき山ぢの
ふりはてて今
うつりかはるも世をそ契りて
九重にありひさしかる
初ふゆとそふる

楊花集 後鳥羽院
楊花集 按察使国信
楊花集 頓人
楊花集 天暦御製
楊花集 後鳥羽院御製
楊花集 法通法師
楊花集 頓人
楊花集 後京極摂政
楊花集 隠岐院関白
楊花集 左京大夫
楊花集 九条前関白
楊花集 従二位為子
楊花集 紀貫之

新後拾 雑春　うちもみよ河もそこの　桜花ちるやこの春にくらべてをそき　信昭法師

風 雑上　えいにしや跡に雲井の　桜花見し人ならぬ我をわすれて　良円法橋

新拾 続拾　初さえあかず見る尼　桜ちる志めのふかりあさきよみ　藤原為季

春下 風　春面ならず殺ゆかれ　桜かりぬまでそこなる花深き袖　入道二品親王 性助

春中 新千　蓋ねそ立そかへる　桜かり花にさくなる花を見て　前中納言為世

秋上 新拾　露も草下葉こぼれは　桜あさ此おなかり宮に秋来るなり　従三位守邦 首親王

春下 風　みちまにも花雲ゆかし　桜さく二山の春のあけぼの　前大納言為定

春上 新後拾　山のはに花とみゆるに　さく梅の日とて世にそ春をかなへて　永福門院

雑春 新続古　花ちるも六かの浦にた　さくゆらの冬めきみかはるや三尾　儀同三司 実

賀 風　神室れて春遠尾　さく春の松かり宿かる世の中に　直陽門院

秋上 新後拾　秋なれは萩をゆれよ　さく物ぞ今その宮まで此かて　前大納言維方

雑春　よつ世山も見ぬる　さやにてそらに海人の　源詮政

新拾 恋　あさてぬ西の空より　さやかにて月の山のはにて我かな　権大納言公雄

新続古 賀　わまれかしの月は此　さやかにて万代まで君かへに　権中納言経家

新千 秋上　作籬のもとの月の光の　さやか花八雲かへてこまたかなり　大納言武重家

風 秋下　月かるぬまの光を　さやか花八秋そふ宮やかて見し　西園寺前内大臣女

風 恋　思ふ今もとおもはね　さ夜更は四のうら紙にかれて　永福門院

新 下　まちよの六くさ　さ夜のふそゆめかも新まの道　左大臣直義

新続古 夏　長夜の夏はくそう　さ夜に海寄る後はかくさらせは　小弁

新千　夕まくれ雲をひきは　さしぬる八雲もそ月の光なり　前大納言為嗣

新拾 冬　河の雲ふれ村雲　さしのりぬけをく月に霰ゆくなる　従二位家隆

新 冬 拾　あすなからぬ神山　さしくれて松の主の雲に鳴なり　源頼貞

風 冬　しまて河を空に露　さしくれて氷のことにふて鳴なる　式部卿親王

新拾 雑上　ちさこの浮草のさし　さしくれてさそ花さきとうつしなる　藤原為重朝臣

新千 冬　さゝの葉にみ山おろしは　さえくれて一夜の程もしも結ぶなり　惟宗光之朝臣

風 冬　中々に月まちいでゝ風の　さえくれて夜の空に霞そひさく　伏見院新宰相

風 冬　まだきより絶えぬひゞく嵐　さえくれて出づるあたりに雪ぞ降るなり　後[illegible]左臣

新続古 恋五　夜とともにさゆる寝ざめの八　さえとほるけさの氷もとけぬ間に　殷富門院大輔

新拾 恋五　ながしにこもる月のかげは　さえとほる人の心の夜半なり　中務卿全仁親王

風 恋四　夜とともに見えよとまきて　さゝがにのいとくる人は待ちて乱れ八　前大納言為家

新千 恋三　夜なめてこそろにひくさき　さゝがにのいと絶えれて恋とそ乱る　権大納言実明女

新拾 恋三　絶えまなく見えまたれてとみ　さゝがにのいともたえくるとそ見え　入道二品親王[illegible]

風 雑上　さぬ夜まつかはそきさと　さゝがにの糸にいとめく夕暮の空　前僧正慈鎮

新千 賀　あすか川のむまを淀の　さまざまに世はつれなくて明けぬ間に　読人不知

新千 賀　君が代は万代井のつるの　さゞれ石の見えぬ程のいはほとなりて　前参議[illegible]

新千 恋一　浦ちかく波のつぼみの　さゞれ石のありいとこえずとも　伊勢

新続古 賀　君が代はちくぬまの波の　さゞれ石若も苔とならくまで　式子内親王

新拾 冬　峰の雪はたまどふとも　さゞ波によせてくだけぬ朝の川浪山　正三位知家

新拾 冬　嶺まへの山おろしさきて　さゞ波のひく氷に今はなりけり　中務卿宗尊親王

新後拾 秋下　月えりもめとぞ光る　さゞ波や志賀の浦風　左大臣

新千 雑下　足引の山田にさせる　さゞれいはよぬるさの水　坂上是則

新後拾 恋二　秋をまき豊にあらて　されば集せて初霜といそぎなん　永福門院内侍

風 春上　うらすゝきさきかれ　さゞれ葉になびくうらまで置く霜　読人不知

新後拾 冬　霞あをく秋風にわたる　さゞ葉に霧の晴れる月をたる山風　源義種

新続古 冬　秋たちし嵐吹きて　さゞれ葉にさへ霧は寝て　権中納言[illegible]

新続古 羈旅　草枕虫鳴くさよ　さゞ波のすみてさやにいく秋萩のさ　前中納言定家

新拾 雑上　さそはれ草のすゑ　さゞ枝もありかなとけぬ萩かしさ　従二位家隆

新拾 恋三　うき世と中くおりぬ　さゝ枕もしたふ一夜の夢の結ふりは　読人不知

秋撰 恋三
さ杭人てそかりまりいるてとも　関白前左大臣

秋撰 雑下
ぬるさせ今ノ野ノ杜ノ梢　権中納言定家

秋撰 雑下
あくるあのこの夕の空を　中納言前右大将

秋撰 雑上
咲よもりよこ雲を風とふるまた

秋続古 夏
咲よもりて一むらむらなてる雨を乱れ

風 雑下
今日まて深山の松の　参議実守

秋千 雑上
咲よもりみけさをまちかくさりの名

秋千 秋下
咲よもりまさ木柳よりかう白こま　関白左大臣

風 雑上
かくさそのまつ梢をいろ礼ゆくさ我身なる　権大納言家良

秋撰 天
はの花の宿ぬるよ　参議雅経

秋千 雑上
咲めとりとみしくやありしあ月　従二位家隆

秋続古 恋上
咲よもりの雲ふるみしの山ふ神まりまて　従二位為家

秋続古 雑上
雪とれめ花ノ小萩　前参議教長

秋千 秋上
咲よもり雪をく法のちくさ花　前中納言定資

秋千 秋下
咲よもりまさ木柳よりかう白こま　永陽門院左京大夫

風 雑上
かくさそのまつ梢をいろ礼ゆくさ我身なる　安嘉門院四条

秋撰 雑上
はの花の宿ぬるよ　飛山院前右衛門督

秋撰 天
咲めとりとみしくやありしあ月　後照念院前関白太政大臣

秋千 雑上
咲よもりの雲ふるみしの山ふ神まりまて　貴徳院前内大臣

風 雑下
今日まて深山の松の　近衛法師

秋千 秋上
咲よもりまさ木柳よりかう白こま　源有長卿

新撰 雑下
みるさぬるさ花ノ　前参議教長

風
乱れやをさうるた　前中納言定資

秋中
わまともふさ人を　永陽門院左京大夫

野撰 恋三
ゆるそうめ別れ　安嘉門院四条

秋撰 雑下
物うを本ふ校よ　飛山院前右衛門督

風 雑下
西乱ハうれ中り　後照念院前関白太政大臣

野撰 雑上
梢りりふ花ノ　貴徳院前内大臣

秋続古 雑下
みまさうる染りを　近衛法師

秋撰 雑下
ぬれもしき事葉雲を　源有長卿

秋撰 恋三
衣手に落さうせ　前参議教長

秋撰 雑下
あらし山紅葉ハ水かう　後照念院前関白太政大臣

野撰 冬
ぬりけるる雪に老を　前中納言定資

秋千 冬
さ雪ノ降ける月　按察使忠季

新拾遺　秋
新千　冬
風
又
新千　上
新續古　下
新拾　秋上
新續古　下
新拾遺　上
新續古　中
新拾　秋上
新續古　二
新拾遺　上

ささなみや志賀の山ごえ落ち来つる月に旅人袖や寒けき　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪まもる梢に残る月を待ちとて　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ霜さえて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ風さえて雪に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

新續古　上
風
新拾遺　中
新拾遺　下
新續古　下
新續古　上
新拾遺　秋
新拾遺　下
新千　上
新千　上
風
新續古　中
新續古　一
新續古　下

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

ささなみや志賀の山ごえ雪晴れて月に更行く鐘の声かな　後京極攝政前太政大臣

新千 冬　わたつ山おろしに川音の　さむしろやよ風かさねて白雪　中務卿親王

新拾遺 冬　小鹿なく門田の霜の　さむしろよそにすみかはる袖のよは　法印慶運

新拾 雑上　しかの浦やひらの山風　さむしろの衣よりさむき池の月　僧正慈鎮

新拾 冬　冬されはこほりの川の瀬　さむしろの秋の夜けならす月もかくせ　今出川前右大臣

新続古 冬　さゝ浪やひらの山かせ　さむしろ日は汀のこほりてうちしも　後光厳院御製

新拾 雑上　春夏もしらすに秋の　さむしろ日よ夢のうちなる霜のこほり　民部卿為明

新拾遺 冬　まつ河浦の波のしほか　さむしろの霜をかさねて波もしほ山　権中納言為重

新続古 冬　夢の浮世のさかきを　さむしろにしきねてさらにとまる風さよ　元可法師

新拾 恋四　あはぬまも夢てもなく　さむしろは待しさらてよ宿ふかり　大蔵卿行家

新千 雑下　いく世かは又もそへぬ身の　さむしろの松の戸たゝく峯の嵐よ　前大納言為世

風 恋二　それとなき夢の名残の　さむしろにまたみしかくもおもひそ侘　永福門院

風 恋二　稀にみる夢もなかなか　さむしろにひとり衣をかたしきてさへ　永福門院内侍

新拾遺 恋三　志のふ枕のいさよひ夜そ　さむしろにひとりさむけさの別よ　侍従為敦

新続 雑中　なきなかれとふらひし歌く　さむしろに夢ならでよりふかき世そ　後円融院御製

風 雑中　あはれ雪の夕日のあとは　さむしろも月かかる雪の衣かな　徽安門院一条

新続古 哀傷　うしとみし世をかれ枕の　さむしろておもひすてらてうきに　前大僧正公豪

新拾 恋三　とはれけるわかひころ夜を　さむしろは中々てりまさるかな　藤原盛徳

新拾遺 夏　みをつくしや川となるさ　五月雨はいとまもせぬ瀧つ瀬は　御製

新拾 夏　うきも草さえひちにき　五月雨は小舟ゆけの棹やさして見　衣笠前内大臣

新拾遺 雑春　日数のみなかる風さきの　五月雨はさぬ袖すてとるなへ那　多々良義弘朝臣

新続古 夏　まさめへき雲となるも　五月雨はかくして雲の中ゆかり　中園入道前太政大臣

新拾遺 夏　いともたえぬ川音の　五月雨はちりの井をさそてまさ濱　津守国量

風 夏　あはれみるかけもやらぬ　五月雨はあえぬうれひの煙すたり　藤原清輔朝臣

新続古 夏　さらにえぬ冬とそみる　五月雨は深くなりてかへる布川の瀬　中臣祐臣

新拾 夏 撰
おもかけのちかき枕のうへの
夏月よ袖にやとるへきかり
藤原雅朝臣

新続古 夏
涼しさをまつこゝろなれや
夏月夜すゝしくみくさやとるよさ
按察入道前内大臣

風 雑上 撰
夕立のはれてまたふきぬ
夏月夜ようきてのほりにける雲
津守国夏

新 夏
雲ちにさまよふ月の山の
夏月夜やそら池川にすみわたりし
後照念院関白太政大臣

風 夏
川やしろしのにかゝる波
夏月夜よ衣かへてすゝしやかけ
兵部卿成実

新拾 雑上
雲かゝる山のつきかけの
夏月よおもふ心は氷のうへにうかふし
前内大臣実

夏
みち遠き山の志はら
夏月夜よわけをもとむる谷川の河
源俊平

新続古 夏
雲の井にうつるさゆる山の
夏月夜よ来る人ものゆめのかよひ路
権中納言雅縁

新拾 夏 撰
そこきよくかりそめに
夏月夜よりくもはするて山川の水
前右大臣

新続古 夏
あらやまぬ影のしたよ
夏月夜にあさしき月のかけにさそふ
進子内親王家喜日

新続古 夏
かゝりきの袖ひかれて
夏月夜のれぬ日数やう池の橋姫
前右大臣

新続古 賀
行末の千世の数の色
夏月夜のあかぬ村の竹のたまかね
前中納言定房

新千 夏
今しはやきぬるかたの
夏月の雲ゐのあかぬかたくこし
前大納言為定

風 夏
山のはや音にもれたる
夏月の雲は神まてたちこちより
従二位為子

新 夏 捨
月影ははるかにかへる
夏月の雲にかくれかへりぬる
按察使

風 夏
わかやとのなかめし雲の
夏月のはしまのやかりのそこに
前大納言為氏

風 夏
名にし負ふ猶やすまて
さし入ぬむかひの山をいはう月影
徽安門院

新千 秋中
大井川紅葉の御舟
行かへて ちきりたなひく百秋
従二位家隆

風 夏
月影はうつるしけ
行ゝて暁やこの秋のかけり
民部卿為世

新続古 夏
有明のさし出る光を
行きえてたゝ眠る世の玉津島
後光明照院関白前左大臣

風 秋中
月影をしのひとにに
行きそて秋をこえて今宵
前中納言定家

冬
とやまやさしき鶴の
行きそめてとのまにおはなの白雪
後伏見院

新千 雑下
志つまて折るゝの
行ゝてまつはこゝに風はかり
中務内侍

新続古 雑中
身をうらむ世をなき
行きもそれなりのかたる世を流れ
前大僧正慈円

新於　秋河立つ雲の上より月の影
夏　風こゝやとてまつ待いるよ
雑中　いなよ吾月の影を
風　秋中　松風を友としても
新於　雑上　春色秋深まる夜の
新千　雑中　山里の秋よりち
新於　雑中　まし秋風の
新於　雑中　のとやまの色の秋さの
新千　春下　ちりそふ花の波た
新於　恋上　さそふもやそとそ也
新於　恋三　我ゆくえうのやこも
新於　恋三　ぬきあまてまつ秋夜の

新千　六の道風そ
新於　雑中　ひろひをきし
新於　雑中　春さ夜の梅
新於　雑上　きよ上
新於　恋二
新千　恋中
新於　恋一

三百六十五首

新千 秋上 風 秋上 雨四 新千 非中 風 秋上 雅 秋上 雅 秋下 雅 秋下 新後 秋下 風 非上 雅 秋下 新後 非上 風 非上 新千 入

天川そめなるころあそ　きりしもの　おくるる夜
七夕祭まつる秋を　きたにうつるほととぎすなく　西大寺大僧
ふるさと荒れて蛍こそ　新千　法下　皇寺
山ぞいまのもふ　風　秋上　雅　後拾遺　法下　皇寺
風ぞうつる門田もまふ　雅　秋上　雅　後拾遺　前大僧正
夕日さす秋の山ぞと　雅　秋下　雅　後拾遺　権僧正
雪降てる村田柴家を乱て　雅　秋下　雅　後拾遺　権僧正
雪降て山ぞとをく　雅　秋下　雅　後拾遺　権僧正
雪降て風をあらみ　雅　秋下　雅　後拾遺　権僧正
雪降てしらあきの雲れ行橋　雅　秋下　雅　後拾遺　権僧正
雪降てみ方をてすみ月をこそ　雅　秋下　雅　後拾遺　権僧正
雪降てタ有よみの淡路ちまよ山　雅　秋下　雅　後拾遺　権僧正
雪降てそ降ぬ　雅　秋下　雅　後拾遺　権僧正
雪降てとまり道をへそあらし　雅　秋下　雅　後拾遺　権僧正

天津風わふくさえ　秋上　雪ふりな
秋九重よ三望て　風　秋下　雪ふりな
一志より嵐をきて　風　秋下　雪ふりな
立ぬりてお花をみぬ　風　秋下　雪ふりな
わすれ山ふもとく次　新後　秋下　雪ふりな
時雨そめわき行空の　新後　秋下　雪ふりな
ふるを山ほうくうや　新千　秋下　雪ふりな
ちりぬるの風のこと　新千　秋下　雪ふりな
あふ坂の関もきしも　新後　秋下　雪ふりな
ちる時やかてちるもみぢぬタ行雁　新後　秋上　雪ふりな
雁人れあふ坂やまは　新後古　秋下　雪こめて
雪ふれまよふ坂の月　新千　秋下　雪こめて
雪ふれまよふるころの　新千　秋下　雪こめて

雪ふりなもへ七夕祭をまつ夜　伝法
桐のちくちるよりもそしりもる　雪園寺前斎宮
桐の葉ふ雨ふりよあるタ雲迫　明訪院前斎宮
雪ふりふるよりくまもる笠　基家卿
雪ふりふるよりそみて豚口もる冬　法下　慶運
雪ふりやまよつきのもとに庵ふ吹尼　伝三位親子
雪ふりそをとふ秋ふ川あと　芳陰利花院
雪ふりそをとふ秋ふ川あと　前大僧正
雪ふりそうちともみぬタ行雁　前斎宮　資
雪こめてそうちともみぬタ行雁　待賢門院堀川
雪こめて秋ふ月をふもれ月　後鳥羽院宣旨
雪こめてそをとふもぬもる　太皇太后宮
雪ふれまよふるころを河まて　坂西園寺入道

秋千　秋のよ至りとそれ　源為昌
擬　うつろわさ地う海れ　後貫院宰相
風　きるもくもようろをきう報て南れ
秋下　きるもくもてみるまてうやかると
彩千　おりいあもり口うや東の　普心院親
意心　きるもくもてみるまてうやかると
新千　秋ゆくろあやさむかし　進寺朝臣
秋下　きるもくもてみるまてうやかると
風　きるもくもてみるまてうやかると
雑上　きるもくもてみるまてうやかると
彩千　まてさく老れ松の　前権僧正園伊
雑上　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　あさちやここ八重たの　順徳院御
秋上　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　あさちやここ八重たの　順徳院御
秋下　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　うつさ恋あしまおまや　権参伊資為
秋下　きるもくもてみるまてうやかると
彩千　我さりみさ八おくく　前太納言為氏
雑上　きるもくもてみるまてうやかると
彩続古　去れれおりしやうけ　法下義寛
秋上　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　あさちやここ八重たの　英納言為氏
秋上　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　けてさ雑の年れ　法下実性
秋上　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　そこにさく変たおるを　太政大臣
秋上　きるもくもてみるまてうやかると

風　夜さむみろ松れるく　今出川院
秋中　きるもくもてみるまてうやかると
風　初雪よ是松く重れ　華頂中宮
秋下　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　秋さてるく松れ　二条院讃
秋下　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　いく海れよおみもさき　藤原博
秋上　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　七夕れ雲れろも乃　前大納言為
意三　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　通芝の露てきしみし　法下実性
意三　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　うさまてにさこかに　権僧正公
意三　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　我のおやてえれなん　権僧正尊
意三　きるもくもてみるまてうやかると
彩千　あさおりやけのなるき　華頂中宮
意三　きるもくもてみるまてうやかると
彩擬　ま是れをよ海そしひ　後京極摂
意三　きるもくもてみるまてうやかると
風　こいすとそきうとせめ　権僧正公
神　きるもくもてみるまてうやかると

風 百下 さよふけてきてやまぬ 法橋顕昭
新千 さてもすいさやもまり 題しらず 読人しらず
篠 新続古 多武峯きこやめよ 読人しらず
新続 秋雲なたゝてく 法眼静賢
秋下 日あさくて冬きぬる風 前大僧正慈円
新続 いたのまよりあらはるゝ 権僧正公朝
秋下 ふりいでゝ秋のなかばを 入道前関白太政大臣
新撰 うつりゆくかげをとゞめて 前大僧正慈円
秋上 雪もよそ書とふ庵を 前大納言為家
新撰 ふりいでゝ秋のなかばを 入道前関白太政大臣
秋上 うつりゆくかげをとゞめて 前大僧正慈円
新千 海人のかるもにすだく虫の声 前大納言為家
秋下 いかにうき世をかこちそめけん 従二位家隆
新撰 秋のおくやまひとりこえて 前大納言為家
友 雲もそこ書とふ庵を 前大納言為家
風 秋上 さよふけてきてやまぬ 法橋顕昭
新撰 ふりいでゝ秋のなかばを 入道前関白太政大臣
秋上 うつりゆくかげをとゞめて 前大僧正慈円
新千 海人のかるもにすだく虫の声 前大納言為家
秋下 いかにうき世をかこちそめけん 従二位家隆
新撰 秋のおくやまひとりこえて 前大納言為家
友 雲もそこ書とふ庵を 前大納言為家
風 秋下 さよふけてきてやまぬ 法橋顕昭
新千 さてもすいさやもまり 題しらず 読人しらず
篠 新続古 多武峯きこやめよ 読人しらず
新続 秋雲なたゝてく 法眼静賢
秋下 日あさくて冬きぬる風 前大僧正慈円
新続 いたのまよりあらはるゝ 権僧正公朝
秋下 ふりいでゝ秋のなかばを 入道前関白太政大臣
新撰 うつりゆくかげをとゞめて 前大僧正慈円
秋上 雪もよそ書とふ庵を 前大納言為家
新撰 ふりいでゝ秋のなかばを 入道前関白太政大臣
秋上 うつりゆくかげをとゞめて 前大僧正慈円
新千 海人のかるもにすだく虫の声 前大納言為家
秋下 いかにうき世をかこちそめけん 従二位家隆
新撰 秋のおくやまひとりこえて 前大納言為家
友 雲もそこ書とふ庵を 前大納言為家
風 秋下 さよふけてきてやまぬ 法橋顕昭
新千 さてもすいさやもまり 題しらず 読人しらず
篠 新続古 多武峯きこやめよ 読人しらず
新続 秋雲なたゝてく 法眼静賢
秋下 日あさくて冬きぬる風 前大僧正慈円
新続 いたのまよりあらはるゝ 権僧正公朝
秋下 ふりいでゝ秋のなかばを 入道前関白太政大臣
新撰 うつりゆくかげをとゞめて 前大僧正慈円
秋上 雪もよそ書とふ庵を 前大納言為家
新撰 ふりいでゝ秋のなかばを 入道前関白太政大臣
秋上 うつりゆくかげをとゞめて 前大僧正慈円
新千 海人のかるもにすだく虫の声 前大納言為家
秋下 いかにうき世をかこちそめけん 従二位家隆
新撰 秋のおくやまひとりこえて 前大納言為家
友 雲もそこ書とふ庵を 前大納言為家

新續古 忘二
新千 秋中
新千 賀
新續 秋下
新續 非上
新千 冬
新續 非秋
新拾 秋下
新續 秋下
新 風 非下
新 非上
新拾 秋下

新さらであみせてみくさ　左大臣
をけさころもでひさの　新千 秋中
雲のうへまで代ぞのこ　新千 賀
さ衣河てきぬく風の　新續 秋下
ふきとをそれあまの　新續 非上
そでもなれのよすの　新千 冬
をたえなのよすの　新續 秋下
秋風よわくもちかく　新 風 非下
鹿の音ぞ吹うらかこに　新 非上
きぬの秋ぞやけを　新拾 秋下
なれ世と思へそうみ　新 風 非下
谷川のうき八百と　新 非上
長月ぞ過ぬる気よ　新拾 秋下

新拾 賀
新拾 秋下
新續 秋上
風 天
新續 非下
風 非中
新拾 非上
新千 秋中
新拾 袋
新拾 春上

おさまれる井ぬ迄よ　きこゆ
色ろとそでぬらく　きこゆ
せんぞ忘ぬ恨う　きこゆ
ほの迄そよまそ　きこゆ
もろのなうら君八　きこゆ
山松をみらくをよ　きこゆ
玉ぬ葉ぬ雪の　きこゆ
ちりに我身ぬく　きこゆ
春雨ぬりぬ君八　きこゆ
さよふこえぬ梅や　きこゆ
君ぬ葉よとき井の雪　きこゆ
みてぬく山のもく雪　きこゆ

前中納言宗尚
慶政上人
刑部卿忠盛
儀同敦忠
後京極摂政
後鳥羽院宮内
後堀河院宣旨
後恵法師
後京極摂政
前中納言定

新千
六
新続古
壱一
新千
哀
新千
壱二
新拾
壱下
新千
冬
新拾
雑上
新拾
雑下
新千
六
新続古
壱一
新千
哀
新千
壱二
新拾
壱下
新続古
壱心
新千
冬
新拾
雑上
新拾
雑下

[illegible]をわく清水かな
さてもあまたの人もまいりあひ
もゝしきの大宮人はいかならん
こゝのへにのみ花の散らん
ありあけの月をまつとはなけれど
うらみぬ秋の夜ぞなりにける
秋ごとにもみぢの錦きるものは
もすそや野辺の草葉なるらん
ふるさとの花のふもとの
さそはれて春の山辺に
あふ坂の関もる人もなかりけり
さてもこの世にすみぞうかりける
さゝれ石のいはほとなりて
苔のむすまで
[illegible]
[illegible]

二条院讃岐
正三位家
雲
後鳥羽院御製
俊成卿女
従二位家隆
権大納言
従二位定家
権中納言
従二位為家
前大納言
従二位為氏
参議
正二位為相
権大納言
従二位為世
前中納言
権律師
従二位宣子
典侍
後光厳院御製
後村上院御製
後醍醐院御製

新千
六
新続古
壱上
新千
哀
新続古
壱上
新拾
雑秋
新続古
壱心
新千
秋上
新千
壱上
新千
冬
新続古
壱上
新千
雑上
新続古
冬

きさらぎのころほひ雲ハいれまそらめもはるの大井川こゝのへにのみ花の散らん
ありあけの月をまつとはなけれどうらみぬ秋の夜ぞなりにける
秋ごとにもみぢの錦きるものは
もすそや野辺の草葉なるらん
ふるさとの花のふもとの
さそはれて春の山辺に
あふ坂の関もる人もなかりけり
さてもこの世にすみぞうかりける
さゝれ石のいはほとなりて
苔のむすまで
[illegible]
[illegible]

後鳥羽院御製
権中納言
従二位家隆
後京極摂政
前太政大臣
従二位家隆
権中納言
従二位為家
前大納言
従二位為氏
参議
正二位為相
権大納言
従二位為世
前中納言
権律師
従二位宣子
典侍
後光厳院御製
後村上院御製
後醍醐院御製
二条院讃岐
正三位家
雲
後鳥羽院御製
俊成卿女
従二位家隆
権大納言
従二位為家
前大納言
従二位為氏
参議
正二位為相
権大納言
従二位為世
前中納言
権律師
従二位宣子
典侍
後光厳院御製
後村上院御製
後醍醐院御製

をそ山めとりもてる
浪くまもろを九浦を
きそこれかりにあるまてもそうる
ゆきそぬまてかく
わよくあるへ九者を
春はるまもよ
名ゆりひそけき秋の
秋の風うけひ九水み
約束をふ称えみ
のてうみ堂九称よ
そそおやうく人を

重之法師
殿宣

法眼運

貫之

源家氏

法眼尭

法眼尭

入道二品親王
覚助

皇太后宮大夫
俊成女

源公忠朝臣

前大僧正
慈円

摂政太政大臣

権中納言
資実

参議
雅経

法印
定家

そそうそ九雲九ゆ
いなりし風のあるよ
秋の夜月とそよ
世中をもろみき春て
多ゆうれてのたのこの
雪とりもぬる風よ
風そもき老の称えよ
ふまてそうそ九あれ
世をもし山うゆと
世るへはそよりへ
いうりあそもそ
ふみ九まるあよ

本れりとハけ初冬ふと
天雲のそにうかぶ
冬ごもり海てふものと
みち牡蠣雲を見そと
日のとハ非れこ風て
秋千　ふるさとならぬ雪を
又　うすや庵とり夜
秋抜　動をこさめよ
冬　さゆりあまこハ薫る
秋抜　あいえとをそ
衰　まそわみ世こ動て
秋続　春のとうたうろし
又　秋抜　大徳寺前
秋続　非上　小行
秋千　非中　右大臣
秋抜　恋三　忠見

いこ世ともかきりの心
風　ありのてる秋めり
秋抜　今そ雪にハひまそ
非中　なりへて雪ハそれ
秋抜　雪ふらぬてやう
賀　のとうをありよりな
秋千　雪ふ代ようろけ生を
賀　のまて又若うりおて
秋千　心そまつのつけぬま
賀　きてれうれ世そ
秋抜　雪よもむりとめて色
非中　ちやぬるかけるき
秋続　大淀の渡のまさち代

坂今来門前左大臣
後出羽権介
遍照の僧

秋千　非下
秋抜　秋下
秋抜　又
秋千　又
秋千　風
秋千　又
秋抜　冬
秋抜　衰
秋続　又
秋続　非上
秋千　非中
秋抜　恋三

大徳寺前
僧正遍昭
在原業平朝臣
素性法師
陽成院
源宗于朝臣
小野篁
右大臣
忠見

秋続　賀
風　賀
秋抜　非中
賀　賀
秋千　賀
秋抜　非中
秋千　賀
秋抜　神
秋続　非中
秋抜　神
風　賀

秋続　非中
秋抜　神
風　賀

いこ世ともかきりの心
ありのてる秋めり
今そ雪にハひまそ
なりへて雪ハそれ
雪ふらぬてやう
のとうをありよりな
雪ふ代ようろけ生を
雪ふ代ようろけ生を
雪よもむりとめて色
ちやぬるかけるき
大淀の渡のまさち代

坂今来門前左大臣
後出羽権介
遍照の僧
前関白
在原業平朝臣
前関白左大臣
陽成院
源宗于朝臣
小野篁
右大臣
藤原敏行朝臣
素性法師
源信明朝臣
藤原興風
紀貫之
藤原伊衡朝臣
源信明朝臣
藤原興風
紀貫之
藤原伊衡朝臣
源信明朝臣
藤原興風
紀貫之
藤原伊衡朝臣

ゆ

あをによし奈良の都を秋風の
今日ぞ来て見る
わが宿は海もなければ水もゆく
たゆたふ山の影
ゆくみづにありし姿を
見るたびに
ゆくもうつる日数を
おもふもうつる
ゆくみづに
別れし後ぞ
秋ふく雲
わかれをぞ
水上のごとくも
ゆく年の
ゆく川の
ゆくさつ

秋投 鬻 / 風 / 二 / 秋千 緑上 / 秋投 吉下 / 秋千 緑上 / 秋投 吉下 / 秋投 文 / 風 / 秋千 緑上 / 風 緑下 / 秋投 吉上

秋投 養 / 風 緑上 / 秋千 天 / 風 猿 / 投 風 / 秋千 三 / 秋千 養 / 風 秋上 / 秋千 二 / 秋千 文

あをによし奈良の都を秋風の
今日ぞ来て見る
わが宿は海もなければ水もゆく
たゆたふ山の影
ゆくみづにありし姿を
見るたびに
ゆくもうつる日数を
おもふもうつる
ゆくみづに
別れし後ぞ
秋ふく雲
わかれをぞ
水上のごとくも
ゆく年の
ゆく川の
ゆくさつ

投網を長家
今出川入道
前右大臣
伊勢大輔
投二信歌
辞退法師
相模
後栄雅院殿
太上天皇
参主補親
前中納言為相

為実信家母
冨門寺乳人
前中納言惟継
冨門入道
前太政大臣
前右衛門督
皇太后宮大夫
俊成女
投扇興
後拾遺院殿
大江広秀
後拾遺院前
冨門左衛門

ゆくすゑに別くれぬとをきみなれや
花ぞ名残をそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ

ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ
ゆくすゑもそれとこそ

新続古 恋一
人しれぬおもひのあまりにも
ゆく舟の風をたよりにこがるゝ波　楊梅兼行

新拾遺 別
あさ霧のよそにへだつと
ゆく舟のしらぬ別を袖にぬらしつゝ　永福門院

新千 恋二
しらせばやまかせてつらき
ゆく舟のひとつにはれぬこゝろを　法印定為

新続古 秋下
もみぢ葉の色を
ゆく秋にいさやと

新千 秋下
はるかにおほろ
ゆく秋の

新続古 秋下
よそにおもひて
ゆく秋のなごりの袖の

新千 哀
それにつけてもおもふ人の
ゆくへは

新続古 雑上
うれしや

新拾遺 秋上
ひとり

新千 恋一
河のせに
ゆく水の

新千 恋一
たゞ
ゆく

新千 夏
みなれし
ゆく水の　後宇多院

新拾遺 恋一
岩つゝや岩まの
ゆく水の　法印定為

新千 恋四
いもせ山おもひも
ゆく水の　民部卿資宣

新千 恋下
山川のいはつゝじは
ゆく水の　中院

新続古 哀
袖もみぢ
ゆく水の　前参議雅有

新拾遺 雑上
けふみるも
ゆく水の　宗久法師

新千 雑上
みそぎ河
ゆく水や　陽明門院

新千 哀
あはれ人の
ゆく末とそ　紀

新千 恋一
立のぼる煙の
ゆく末とそ　前大納言為定

新千 風下
花のちる
ゆく春の　院御製

新拾遺 恋一
梅の
ゆく　入道前太政大臣

新拾遺 雑上
ゆく人の　源頼康

風雅 雑上
ゆく人の　順徳院御製

ゆくて海よりそくむもれ　　葵少納言
ゆくわすれぬ方にたなびき　　左京権亮源
ゆくとをちこちの人　　葵
ゆくまとをみよ恋ひわたる今　　後恵法師
ゆくいにしへも今そかし　　橘遠村
ゆくめぐりあふ年月の　　典侍内蔵
ゆくあふ事をいはねとや　　後柳原前帝
ゆくあふ事をさそふにも人　　薬師寺
ゆくあふ事のつらくのみ　　藤原重家
ゆくおもひ初めてより　　藤原定家
ゆくあふ事のまれや恋　　源宰相中将
ゆくかはす言の葉さへ　　藤原信実
ゆくさそふ水あれや　　藤原為家
ゆくうき世よりなれ行　　前大納言
ゆく唐土もたづねゆく　　光明峯寺
ゆくふもと川こけて　　前大納言
ゆく雁なきてや山風の　　薬師寺
ゆく神やきくらん　　関白
ゆくうかりける身の　　為氏
ゆくうかりける身の　　為定
ゆくうかりける身の　　為定

かはる今さく人の　　権大納言
ゆくさそふとなくさそふ　　藤原為定
ゆくいにしへのやの　　前大納言
ゆくめぐりあふ月の　　為定
ゆく雁なきて世よりも　　為定
ゆく唐土もたづねゆく　　為定
ゆく雁なきてや山風の　　為定
ゆく神やきくらん　　為定
ゆくうかりける身の　　為定
ゆくうかりける身の　　為定

秋上 秋指 恋三 雑中 秋千 神祇 恋四 秋指 恋 秋千 秋下 秋指 秋上 雑 恋 秋下 雑 秋上 雑 恋下

うきてをたにそそやへよ秋のあめ　侍従為教
うらさひしへをとりそへよあめのこゑ　権大納言為兼
ほのぼのとあけもはてぬふるさとの　前大僧正慈円
神ちかみうちしめしめのあさぼらけ　前大僧正慈円
我宿も秋のてさくるまきのとを　後京極摂政良経
ゆふかけよ今もこてふまつむしの　後京極摂政良経
うつろひもうすきこのはのあきかせに　前関白九条
さきそめしはなのしたにもあきかせに　後京極摂政良経
秋ふかき浅茅が末のあきかせに　権大納言為兼
露ふけよ一葉にちるもののあきかせに　前関白左大臣
村雨のくもゐをさそふあきかせに　権大納言為兼
吹ちらせ萩のうは葉のあきかせに　順徳院御製
吹ふけよ野もこのしたのあきかせに　後京極摂政良経
吹ふけよ露もこぼさぬあきかせに　前関白左大臣
吹ちらせ萩のうは葉のあきかせに　順徳院御製
吹ふけよ野もこのしたのあきかせに　後京極摂政良経

雑 恋 秋下 雑 恋 秋下 雑 恋 秋上 雑 恋 秋上 雑 恋 秋上

ひと村やそてをめくらすあきかせに　前参議雅経
ゆくまてふりかへりみよあきかせに　後京極摂政良経
ふるさとにおもひをそへよあきかせに　権大納言為兼
ちはやぶる神の御代よりあきかせに　前関白太政大臣
ゆふされはのきはのあきかせに　後京極摂政良経
ふきてとへ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経
ふきてとへ萩のうは葉のあきかせに　前関白太政大臣
立ちもとまれ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経
ふきてとへ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経
ゆふされはのきはのあきかせに　後京極摂政良経
ふきてとへ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経
ゆくまてふりかへりみよあきかせに　後京極摂政良経
ふるさとにおもひをそへよあきかせに　後京極摂政良経
ちはやぶる神の御代よりあきかせに　前関白太政大臣
ゆふされはのきはのあきかせに　後京極摂政良経
ふきてとへ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経
立ちもとまれ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経
ふきてとへ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経
ゆふされはのきはのあきかせに　後京極摂政良経
ふきてとへ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経
ゆくまてふりかへりみよあきかせに　後京極摂政良経
ふるさとにおもひをそへよあきかせに　後京極摂政良経
ちはやぶる神の御代よりあきかせに　前関白太政大臣
ゆふされはのきはのあきかせに　後京極摂政良経
ふきてとへ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経
立ちもとまれ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経
ふきてとへ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経
ゆふされはのきはのあきかせに　後京極摂政良経
ふきてとへ萩のうは葉のあきかせに　後京極摂政良経

秋挂 春上
秋千 秋上
風 春中
風 春上
風 雨中
風 雨上
風 秋上
秋挂 夏
秋千 雑上
秋挂 雑下

春雨のくらくもあらで暮ぬるは
あやなやあやと濡る袖かな
死のつまとほうふ
花園院
春雨の音ばかりふる夜半の床
花園院
風をまつ外のさ夜ふけ
うつりゆく花の末ふく
風に知る秋のこれるく
後京極摂政
夏草の露ばかりしてきえ残る
後京極摂政
山ぢてふ名をあだ
後恵法師
世中をうき物
親鸞
夏草の露をまくら
源順

秋挂 雑中
秋挂 雑中
秋挂 春上
風 春下
秋挂 秋上
秋挂 雑中
風 夏
秋千 恋
秋挂 雑上
風 春中
秋挂 雑上
風 秋下
秋千 恋
秋挂 雑上

法皇くらゐおりさせ給ひて
花園院御事
浦ちかく日数ふる
花園院御事
春ごとの浦のそてのあれ
花園院御事
山川のみなそこまで
花園院御事
春雨も恨まてその
後京極摂政
ふるせ山もしき
後京極摂政
夜もすがら雨や涙のおちそふ
後京極摂政

風 春中
ひかりある山風そよく 世の中はいつ染かはるらん春風ぞなく
後二条院御製

新拾遺 羇旅
とまらぬ川花の散りもとめぬ 世の中は淀せもあらず部とうつる
皇太后宮大夫俊成

新後撰 恋五
結ともかならずいかにたのまれ 世の中は西行ならぬ山の葉にさへ
西園寺入道前太政大臣

新続古 恋又
二見てはもうつされれ 世の中はむらとりぬ萩のうへ風
正三位知家

新拾遺 秋上
秋風はいかに浦をたちぬ 世の中は雲も忘らぬ山のはの月
進子内親王

新続古 恋三
わするれをととこえて何ほとぬ 世の中は浪てうつるとどもかは秋風
蓮生法師

新千 春下
春風は吹くとも色まさる 世の中は梢の花てはちりほそちる
花園院御製

新続古 秋下
嵐色見にけりも秋の 世の中はあはれをそふる鹿の音かな
源通経朝臣

新拾遺 冬
みわたせる松の葉かれ 世の中はあまの川風さむく吹らし
前参議公名

風 雑中
山風にのさそめのはくる 世の中はまたそまさる入道の庵
伏見院御製

新続古 秋上
いく秋の我身ひとつの 世の中はとちて地にしら雪はふれ
正三位成実

新千 哀傷
なさけかぬ時さへ秋の 世の中はいはしたの身かなみするかな
常盤井入道前太政大臣

風 恋二
思ひもとをしらぬ[illegible] 世の中を我浦ちりそ秋をもかさね
従二位親子

新千 雑
われそ浪は消やと思へ 世の中を思ひかへてうつる待ありて
前中納言為相

新拾遺 恋三
秋の夢まよふ我身 世の中をあかぬとするとちまよふらん
後京極前関白

風 恋二
さためてはいへる都ふ 世の中をえにしてもかくひに見る
前大納言為氏

新千 秋上
われ待けるそらの 世の中を秋のあはれをかしこから
権僧正公雄

新拾遺 恋五
つくさむるまみ待ぬ 世の中をうかつるみと秋風を吹
亀山院御製

新拾遺 恋三
海くそとあはれをいぬ 世の中のゆくさりかりをさは浦かん
後光明照院前関白

風 恋上
秋かくるくもしろく 世の中のかるあは月てしそ待する
院御製

新続古 恋四
今はみよまあいそ 世の中のかはりぬる庭の松風
中務卿

風 春中
あか幾重のにてえ 世の中の身とのあはれそ見にまかる
従二位為親

風 秋上
あかれさくもえて 世の中のかの花をも霜に秋ぞうつる
前大納言為定

風 雑
秋風とかはりぬやなる 世の中の雲ちるまでうつりゆく
式子内親王

風雅 秋下　ちりはてゝ花のありかもしらぬ　山里のいはほにさける花も咲けり　永福門院内侍

新続古 冬　めにみえぬ秋やきそひて　山里のまがきにかゝる松の下風　後光厳院御製

風雅 雑中　つもるともいかでしらまし　山里の峯の松のひとりねを　従三位親子

新続古 恋五　ながめつゝ日影をまつの　山里のにはにさすかげも見えけり　藤原隆博

新続古 恋五　さりともと待し夜なの　山里も花くれなゐにちりにけり　前大納言為氏

新千 恋三　かよひこしいまは八重葎　山里にまつ人もなき夜はの月影　内大臣

風雅 雑　ちぎりしやこの秋我ゆき帰り　山里のおくも月は今こそ見えけれ　従二位為子

風雅 夏　蝉のこゑふかき山家の　山ざとやこの秋くれのそらに聞ゆる　後普光園院 関白左大臣

新千 秋　風わたるむら竹のすゞしさに　山ざとにすむ人の夕暮　後深心院関白

新続古 秋上　わけ入りてきく程よりも　山ざとの月にそすめる秋の夕暮　後普光園院摂政太政大臣

新拾 秋上　秋風に荻の葉すさむ夕暮は　山里のあはれもひとしほにこそ　前大納言為定

新拾 恋一　うき中は秋はつるあはれ　山里はうつりかはりてかへるとやみん　前大納言為定

新拾 恋一　とふ人もなき夕暮に　夕暮はちかくてきけば松風の声　頓阿法師

新後拾 恋一　すみなれて花もみちなき　夕暮はくものはたてにやまかぜぞふく　源義種

新続古 恋中　かずならぬみのうき雲の　夕暮は世にながめぬ人もあらじな　入道前太政大臣

風雅 冬　山のはの雪よりしらむ　夕暮はあらしに松のおとぞさびしき　前大納言雅孝

新続古 恋四　中空にたゞよふ雲の　夕暮はいつかはそらにすみはてぬらん　左大臣

新千 恋一　たのめおくあまの苫屋の　夕暮はうらみていづる袖のうら波　前大納言実明

新千 恋一　うきながらさすがにまつの　夕暮はいかにせよとか浦風ぞふく　前中納言有光

新拾 恋一　いかにせんあはれはかなき　夕暮はまちわびぬれば秋風ぞふく　慈源法師

新千 恋一　なげきてもいふかひもなき　夕暮はしらぬなみだのそでにかゝれり　権中納言実継

新拾 哀傷　なぐさむるかたもなきかな　夕暮はいかにそれかとみしやまの雲　藤原守遍

新拾 恋一　人しれぬ思ひのほどを　夕暮はおもひわびつゝなげくころかな　津守国夏

新続古 恋一　あはでこそわかれもあれ　夕暮はまつぞとならぬ人のすさび　権大納言

風 秋中
風 冬
前摂 冬
前摂 夏
夏
前千 秋下
前摂 夏
夏
風
夏
前千 冬下
前摂 冬
前後 上

後門院
権中納言定資
権中納言通冬
前大僧正実教
右大臣
従二位行家
前権中納言雅孝
従二位行家
入道前関白太政大臣
前大僧正慈信
大納言経信

前後 上
前摂 夏上
前摂 秋下
風
夏下
風
冬下
前摂 冬上
前摂 秋上
風
冬下
前摂 冬
風
前摂 冬下
前千 賀
風
冬
前後 上

権中納言長方
前大僧正実朝
僧都道玄
前大僧正慈円
従二位行家
入道前関白太政大臣
前大僧正慈円
前大僧正慈円
前大僧正慈円
前大僧正慈円
前大僧正慈円

新千 冬　かりそめの寝覚めとなれて雪の中よそに暮れゆく山の端の月　忠房親王

風 冬　見わたせハなかそらまて雪の中に標さへ見えぬ里の一村　花山院内大臣

新続古 冬　さとの名も中々いとゝ雪ふりてよそにつもれる槇の下庵　前左兵衛督

新拾遺 冬　あらち山雪のかよひち雪ふかみ道にまよひて袖も涙に　権大納言経嗣

新続古 冬　武蔵野ハなへての雪に埋もれて分けゆく人の跡もみえけり　読人しらす

新千 冬　石ふみ(?)の雪も通へる風のまに雪ふる袖にかゝるさゝ波　道生法師

新拾遺 冬上　かりそめの袖のへたての雪なれや袖に置きしかあるかなきかに　前大納言為定

新後拾遺 冬　ゆきふりて袖の上にも積もりけりあはれをしらぬ雪の夜の月　権僧正運雅

新千 冬上　あめの下雪ハ降りつゝ霜の上に寝覚めしらるゝ山の端の月　郁芳門院安芸

新後拾遺 冬上　あくかれてわかゆく道の遠けれハ雪に宿かる夜半のさゝ波　按察使隆房

風 冬　ゆきてみむしはしと思ふ雪の内にたつねかねぬる峰のかけ道　永福門院

新拾遺 冬二　夢ならて明けぬる空の雪の上にかゝる袖のみ濡れて寝覚めて　寺梅院殿(?)左大臣

新拾遺 冬上　霞ミなから春をまつらむ雪の中ぬれてかへらむ旅の夜の人

新拾遺 冬上　白妙の袖も消えて雪のうちにあはれをかくる山の端の月　従一位宗忠

新続古 冬上　見わたせハ空のみ雪の晴れまより遠く霞める山の朝かけ　前大納言基房

新千 冬上　かりそめの雪けの山のゆふ暮にひとりながめて寝覚めする夜半　従二位氏之

風 冬上　霞たつ霜のふる雪に埋もれて夜半に更けゆく月の影かな　読人しらす

新拾遺 冬　すみなれし松の嵐にたへかねて雪にしほるゝ苔の通ひ路　後頼朝臣

新拾遺 秋　跡もなく雪ふる里の庭の上に霜のおく夜ハ寝覚めかちなる　賀茂重保

風 新中　秋の夜ハ月にうかれて山の端にゆきて見まくのほしき夜の月　前参議信雅

風 冬一　うつろひて袖にかゝれる白雪の花にまかへて積もる庭の面　中務卿家持

新続古 新中　いかにせむ雪の下にもうつもれて夜半に寝覚めの袖の月かな　源頼政

新拾遺 冬二　うち払ふ袖にも雪のかゝりつゝ花ならぬ身の跡ぞ悲しき　読人しらす

風 冬三　たひねする袖にもかゝる雪の上に月のかけさへ冴えて更けゆく　従二位家子

風 冬二　あかなくにまた寒き夜の雪の上に更けてぞひとり月を見るかな　徽安門院

風恋又 せきとめしみちもなき　夢にもおなしおもかけのさそふなる　前大納言為家

風雑下 河ゆたひおもひをかめん　夢とのひてさかみ波もおなし月　権中納言公

新雑中 むかしのうころ夢を　夢とはさらさらやまたのむ夜　源和義朝臣

新雑中 秋の夜のあけかたの　夢ちかそやはらかに秋かなり　権中納言実氏女

風恋下 かりこめのもりの　夢ちかたちもいはてこゝろをは　式部卿親王

新恋下 うき枕しきかへしそぬ　夢ちりやそれよりさらに　平行氏

新雑 あひしかよひかゝむ　夢ちかたゝぬはかりの袖の涙　源和氏

新拾 都にはふかきよるの　夢さへたのむにさへ嵐を吹　兼好法師

風旅 夜の夜のあけしとは　夢さへたにみるすゑにあかり　少将内侍

新雑 松山のあけかたの　夢あはて秋さそれ山の月そかなし　後光厳院御製

風冬 すゝき枕をしき枕に　夢おもてあはれ心よりわか月影　二条院讃岐

新天 七十のむさしのは　夢さへとはれそかゝるなりかなし　前大納言為家

風雑下 さめかゝるおもひつゝきの　夢うつゝとはせはなれてそおもふ　源親長朝臣

風又 あはれなるやこゝろにかかる　夢うつゝとはかくしてはかなき　法空上人

風恋二 なかなかにこゝろそ秋のあはれ　夢なかさぬあてはかなくおもひさるへき　永福門院

新雑中 一夜にふけにける秋のさ来し八　夢のさめてはかなさもきとはかの里も　前内大臣

新雑上 心つれなく情もなけれとも　夢のうちやはかなき世の一とさき思ひ　徽安門院

新恋三 我恋もすこしあはれとおもはれぬ　夢さへやみえもせすて昔にやとき　式部卿親王

新恋二 あけて秋のかせよせたれ　夢なりしは思ひそとしるや方もかな　花園院御製

新恋三 あはれ秋のかりそめの　夢かけてはとゝめやとひあかるこそん　前大納言為家

新恋二 名をとゝめむものを見つれ　夢かなぬいさいとつれなくを待つ　持之朝臣

新後拾 なにとにはしらぬにも心　夢かけて秋はかゝめりなこそみゆれ　中務卿宗尊親王

新雑下 しつかなる松にしもとこそ　夢のかたちはてかねてありて見ん　後光厳院

新続古 あさのすのあはれのとふ　夢の世をむとろぬ身はそなる　正二位隆教

新拾遺中納言為家

立ち帰りまたもこむとや
春霞かすみし空を
名残とは小町

新拾遺二条為氏

ながめやる
春のかぎりも
しるしとて
花もさそはで
風ぞ吹きける

新後撰法印定為

春ごとに
花の盛りは
あまたへぬ
我が身ふりゆく
ながめせしまに

新後撰中納言為世

ふりにける
涙の雨の
袖の上に
花の色さへ
うつろひにけり

二百八拾二首